

「高木磯太郎資料」について：福岡甲種医学校とその時代

江藤, まゆみ
九州大学大学文書館：事務職員

柴田, 篤
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7411151>

出版情報：九州大学大学文書館研究紀要. 1, pp.3-68, 2026-03-31. 九州大学大学文書館
バージョン：
権利関係：



「高木磯太郎資料」について

―福岡甲種医学校とその時代―

江藤 まゆみ
柴田 篤

目次

はじめに

一．「高木磯太郎資料」の内容

(一) 盍簪学舎時代の資料

(二) 福岡甲種医学校時代の資料

(三) 資料の特色

二．医学校入学以前の高木磯太郎

(一) 生涯の概略

(二) 牛頸の環境

(三) 盍簪学舎の教育

三．福岡甲種医学校と高木磯太郎

(一) 福岡甲種医学校の教育

(二) 高木磯太郎の修学

(三) 医学全科卒業試験問題録

四．「雑記載録」と福岡甲種医学校

(一) 医学校の教師たち

(二) 医学生生活

(三) 福岡甲種医学校の存廃問題

五．明治十八年の帝王切開手術

(一) 東洋未聞の大手術

(二) 「雑記載録」の記録

(三) 施術日の謎

六．医学校卒業以後の高木磯太郎

(一) 福岡病院医員の頃

(二) 開業と家族

(三) 晩年

むすびに

附録資料

(1) 高木磯太郎略年表

(2) 高木磯太郎親族家系略図

(3) 大森治豊・池田陽一による

「ボルロー式国帝截開術」関係年表

(4) 「高木磯太郎資料」資料目録

(5) 写真

はじめに

九州大学大学文書館は、令和七（二〇二五）年五月に、泰成堂書店（東京都）から「福岡医学学校講義ノート」（著者 高木磯太郎、冊数 四十九冊）なる史料を購入した。同館はこの史料を一括して「高木磯太郎資料」として保管し活用することにした（以下、略称は「高木資料」とする）。

「高木資料」は明治二十（一八八七）年前後に「福岡甲種医学学校」に在籍し、卒業後に産婦人科の医師となった高木磯太郎氏（以下、敬称略）の自筆文書からなる^{（1）}。「福岡甲種医学学校」（一八八三～一八八八）は、九州大学医学部の遙か前身に当たり、福岡県福岡区中島町岡新地（現福岡市博多区中洲五丁目）にあった福岡県立の医学学校である。「高木資料」は購入段階での名称にあるように、「福岡医学学校」（福岡甲種医学学校）^{（2）}における講義ノートや備忘録等が大半を占めるが、購入後にそれだけではないことが分かった。高木磯太郎は、医学校入学以前に阿蘇宮地（熊本県）にあった「盍簪学舎」という私学校に在籍しており、その時の記録ノート類七冊も「高木資料」の中に存在することが判明した。また資料の中には、医学校在籍中に高木磯太郎が漢文によって綴った日記「雜記載録」一冊も含まれていた。そして、この中には当時の福岡甲種医学校で行われたある重要なことさらに関する興味深い証言が記録されていることも明らかになった。

本稿は、「高木磯太郎資料」の内容を分析検討すると共に、そこに含まれる資料によって新たに発見された事実に関する知見をも報告するものである。そもそも、ある資料の性格を明らかにするためには、その資

料の旧蔵者、執筆者がどのような人物であったかということも重要な要素となる。従来全く知られていなかった高木磯太郎という人物の生涯に関して、可能な限りの調査を行い本稿に反映させた。

なお、本稿は「高木磯太郎資料」の存在を発見し、その資料の重要性に最初に注目した九州大学大学文書館事務職員の江藤まゆみと、漢文資料の読解等を行った同館協力研究員の柴田篤とが、共同で研究を行い執筆したものである。

〔註〕

（1）「高木資料」所収のノート類の中には、自筆のサインが見られるが、「Takaki」、「多加喜」などと綴られていることから、大学文書館では旧蔵者名を「たかき・いそたろう」と称する。なお、「高木資料」は高木磯太郎没後に家族、子孫によって大切に保存されてきたと見られるが、最終的所蔵者が誰であるかは不明のため、大学文書館では「高木磯太郎旧蔵」と称することとした。高木磯太郎氏の肖像写真については、本稿附録資料（5）写真を参照。

（2）後述するように、福岡県は明治十二（一八七九）年に県立福岡医学学校を設置し、病院を附設する。その後、文部省は同十五（一八八二）年に、一定条件を満たす医学校の卒業生に対して医師試験を受けずに医師開業免許を付与することとして、そのような医学校を制度化するための「医学校通則」を制定する。その条件を満たした医学校が「甲種医学学校」であり、同十六（一八八三）年に福岡医学学校も甲種医学学校に認定され、「福岡甲種医学学校」となった。高木磯太郎が入学、そして卒業したのは、この「福岡甲種医学学校」である。ただし、「高木資料」も含め当時の文書の中には、「福岡医学学校」という表記もあり、混用されていたと思われる。また、「甲種福岡医学学校」という表記も見られる。

一「高木磯太郎資料」の内容

「高木磯太郎資料」四十九冊は、その制作年代によって大きく二つに分けることができる。高木磯太郎が阿蘇宮地の「盃簪学舎」に在籍していた時代のもの（七冊）と、福岡の「福岡甲種医学校」に在籍していた時代以降のもの（四十二冊）とである。前者は明治十一（一八七八）年から同十五年（一八八二）まで、後者はその翌年頃から同二十一（一八八八）年頃までとそれ以降に書かれたものである。以下それぞれの時期に作られた資料について、表題や内容を簡潔に紹介する^①。

（一）盃簪学舎時代の資料

この時代の資料には、各冊に執筆時期が記されている。以下、年代順に記す。④以外は科目の掌控・練習帳の類である。

- ① 「洋算掌控」(明治十一年十月、加減乗除の筆算練習帳)
- ② 「洋算掌控」(明治十四年五月、約分、通分等の筆算練習帳)
- ③ 「和漢雑書暗記掌控」(明治十四年六月、歴史上の事柄に関する問答の控え)
- ④ 「盃簪学舎教則并試験法」(明治十四年六月、教則の一覧)
- ⑤ 「不審字控」(明治十四、五年、蒙求、日本外史の難読文字に読みカナ)
- ⑥ 「歴史綱鑑補全不審字控」(明治十五年四月、歴史綱鑑補の難読文字に音訓読みかな)
- ⑦ 「洋算傳習掌控」(明治十五年十月、約分、分数加法、乗法、除法等の筆算練習帳)

（二）福岡甲種医学校時代の資料

この時代の資料は、福岡甲種医学校における講義ノート類と、テキストの書写・備忘録類等とに分けて記す。必ずしも年代順ではない。先ず講義ノート類について、科目、担当教諭名等を記す。

- ⑧ 「外科各論・壹」(大森治豊教諭、彪氏外科各論)
- ⑨ 「外科各論・貳」(大森治豊教諭、彪氏外科各論、下肢・頸部・花柳・皮膚、明治二十年)
- ⑩ 「外科各論・三」(大森治豊教諭、彪氏外科各論、泌尿・生殖・骨盤・上肢、同上)
- ⑪ 「外科各論・四」(大森治豊教諭、外科手術論、胸腹諸病、同上)
- ⑫ 「外科各論」(大森治豊教諭)、四肢篇等、明治十九年、二十年)
- ⑬ 「内科通論」(池田陽一教諭、病理通論、明治十九年)
- ⑭ 「内科各論・二」(熊谷玄旦教諭、呼吸器篇、明治二十一年)
- ⑮ 「内科各論・三」(熊谷玄旦教諭、神経系諸病、明治二十一年)
- ⑯ 「内科各論・四」(熊谷玄旦教諭、消化器病論)
- ⑰ 「内科各論・五」(熊谷玄旦教諭、循環器・泌尿器・生殖器・血液及血液製造器・新陳代謝器諸病論)
- ⑱ 「内科各論・六」(熊谷玄旦教諭、伝染病論)
- ⑲ 「断訟醫學」(熊谷玄旦教諭・斎藤武英教諭、明治二十年)
- ⑳ 「組織學前編」(柘植宗一教諭、明治十八年)
- ㉑ 「組織學後編」(柘植宗一教諭)
- ㉒ 「産科學」(池田陽一教諭、明治二十、二十一年)
- ㉓ 「婦人科學」(池田陽一教諭、明治二十年)
- ㉔ 「診断學・卷之一」(池田陽一教諭)
- ㉕ 「診断學・卷之二」(池田陽一教諭、循環器診法・肚腹臓器診法)

- ②6 「眼科学・壹」(榎本與七郎教諭)
 - ②7 「眼科学・貳」(榎本與七郎教諭、明治二十年)
 - ②8 「生理学拔記」(榎本與七郎教諭)
 - ②9 「薬物學」(斎藤武英教諭、明治十九年)
 - ③0 「動物學」(久能功教諭)
 - ③1 「植物學」(久能功教諭)
- 次にテキストの書写・備忘録類等を記す。なお、卒業後に書写、筆記したものも三点ほど見られる。
- ③2 「組織學・五器官篇圖譜」(書写)
 - ③3 「動脈拔萃表」(書写、明治十七年)
 - ③4 「模寫・解剖筋圖式」(書写、同上)
 - ③5 「醫科全書・神經學拔萃」(書写、同上)
 - ③6 「炭素化合物化學總論」(書写)
 - ③7 「急性化膿性中耳炎・慢性化膿性中耳炎・頭蓋損傷通義」(筆記帳)
 - ③8 「外科聴講要概録」(備忘録、明治十八年、十九年)
 - ③9 「解剖備忘録」(備忘録、明治十六年、十七年)
 - ④0 「生理學備忘録」(備忘録、明治十八年)
 - ④1 「〔組織学〕」(備忘録、「肥斯都露岐伊迷摸亂怒」、明治十七年、十八年)
 - ④2 「組織學「プレパレート」備忘録」(備忘録)
 - ④3 「〔組織学〕實地演習要摘簿」(備忘録)
 - ④4 「〔骨や関節に関する覚書〕」(備忘録)
 - ④5 「醫學全科卒業試験問題録」(甲種福岡醫學學校編集、明治二十一年)
 - ④6 「雜記載録」(日記、明治十八年)
 - ④7 「産科訓典」(翻訳本書写、明治二十六年)
 - ④8 「華氏産科摘要」(翻訳本書写、明治二十六年)
 - ④9 「新式男女禮法畧記」(岡部千仞巡回講師、講義筆記、明治三十一年)

(三) 資料の特色

総じて言えば、福岡甲種医学校時代の講義ノートのうち、②0「組織學前編」、②1「組織學後編」に講義者である柘植宗一教諭の著書(活字本)の一部が綴じ込まれているのを除けば、すべて高木磯太郎本人の書写によるものと見られる。また、一部に表紙が取れたりシミの付いたりしたものもあるが、おおむね保存状態は良好である。

これらの資料のうち、医学校時代の講義ノート類からは、当時の福岡甲種医学校において医学教育を担っていた教諭たちがどのような講義などを行っていたか、その内容とレベルを知ることができる²⁾。また、同じく医学校時代のテキストの書写・備忘録等からは、そうした医学教育で用いられたテキストを書写したり、重要な図を記録したりしたもの、さらに実地演習の摘録や解剖実習の備忘録など、医学教育を受ける生徒の学習の様子が詳細に分かる。たとえば、③9「解剖備忘録」には「解剖学」の講義に用いられた『解剖篇』から解剖図が、④1④2の「組織学」の備忘録には顕微鏡検査による解剖図が数多く描かれている。また、③4「模寫・解剖筋圖式」には諸筋の解剖図が朱色付きで詳細に描かれている(本稿附録資料(5)写真を参照)。

その他、特に注目すべきものとしては、「盍簪学舎」の教育内容が詳細に分かる「盍簪學舎教則并試験法」がある。また、明治二十一(一八八八)年の福岡甲種医学校の卒業試験の内容が分かる「医学全科卒業試験問題録」もある。そして半年余りではあるが、明治十八(一八八五)年当時の福岡甲種医学校の状況や教諭たちの動向などのほか、博多の町の賑わいや日々の生活などが記された日記である「雜記載録」が挙げられる。これらの資料の内容とその価値については、いずれも後述する。

以上のような資料の性格を考えるためにも、資料を作成した高木磯太郎が、どのような生涯を送った人物であったのか見る必要がある。次に可能な限り明らかにしていきたい。

〔註〕

(1) 資料には通し番号を附けている。詳細は本稿附録資料(4)「高木磯太郎資料」資料目録を参照。

(2) 福岡県立九州歴史資料館(福岡県小郡市)所蔵「宮川文書」の中に、「高木資料」とほぼ同時期の福岡医学校における講義ノートが多数収蔵されている。福岡医学校の生徒であった黒木謙吉氏の筆記によるものである(同館所蔵資料目録)。また、太宰府市公文書館(福岡県太宰府市)所蔵「中川家文書」の中にも、同じく福岡医学校の生徒であった中川輓太郎氏による講義ノートが収蔵されている(同館所蔵資料目録)。今後、これらの資料を併せた研究が期待される。

二 医学校入学以前の高木磯太郎

(一) 生涯の概略

「高木資料」の旧蔵者について、先ずその生涯の概略を見ておくことにする。高木磯太郎は、慶応元(一八六五)年十二月二十八日に、福岡藩士の田中又十郎の子として生まれ、やがて父の死によって高木格仙の養子となり、福岡県牛頸^{うしぐび}一四八二(現福岡県大野城市牛頸)で成長する⁽¹⁾。明治十一(一八七八)年、阿蘇^{あそ}宮地(現熊本県阿蘇市一の宮町宮地)に新たに設立された私学校「孟簪^{みやじん}学舎」に入り、漢文(儒学)を初めとして算術、歴史、地誌などの基礎科目を学び、同十五(一八八二)年十一月に同学塾が廃止されるまで、約四年間在籍する。同十六

(一八八三)年度に福岡甲種医学校を受験合格して入学する。医学校在籍中は、同校三等教諭(外科学)の斎藤武英宅に寓居する⁽²⁾。同二十一(一八八八)年四月に同医学校を卒業し、同時に医師開業免状を付与される⁽³⁾。そして同二十六年九月に福岡甲種医学校の後継である県立福岡病院の医員(産科・婦人科)となるが、同二十八年六月に医員を辞して自宅で開業する。また、福岡医学校の池田陽一教諭(産科・婦人科学)が同二十七年に佐賀に開院した池田産科婦人科病院にも勤務する。その後、大正末頃に福岡県筑紫郡二日市町紫で高木産婦人科医院を開業するなど、医師として長年にわたって地域医療の充実に貢献した。昭和五(一九三〇)年の末頃、子息の住む東京に転居したが、没年は未詳である。なお、東京海上火災保険株式会社第四代社長の高木幹夫氏(一八九九―一九六六)は磯太郎の長男に当たる⁽⁴⁾。

(二) 牛頸の環境

磯太郎が育った牛頸は、古代六世紀から八世紀にかけて、西日本最大の須恵器の窯業地帯として栄えた土地柄であった。さらに今から千年ほど前、平安時代中期には、西国鎮護、大宰府守護のため京都の平野神社の勧請を受けて、この地に平野神社(現福岡県大野城市牛頸三丁目)が建てられ、牛頸の精神的支柱となった⁽⁵⁾。明治初期に一人の儒学者がこの平野神社のすぐ近くの地に移住する。竹田^{しげ}猗(維新以前は定猗^{さだより}、字は子斐^{しひ}、号は謙窓、一八三三―一八八九)である。江戸前期に筑前黒田藩(福岡藩)の儒者(朱子学者)であった竹田定直^{さだなお}(号は春庵、一六六一―一七四五)から数えて第九代目の子孫に当たる。竹田定直は、貝原益軒(名は篤信、一六三〇―一七一四)の門人であり、共に『筑前国統風土記』や『黒田家譜』の編纂に従事したほか、『小学句読集疏』、

『筑前国孝子良民伝』など数多くの書物を著す。定直を初代とする竹田家は、第四代の定良（号は梅廬、一七三八～一七九八）が、天明四（一七八四）年に創建された福岡藩の東学問所（修猷館）の総受持（祭酒・館長）に任命されて以来、代々その職を務め、定直以来の学問を伝えた。

第九代の定猷（謙窓）は、安政五（一八五八）年に江戸に遊学し、昌平坂学問所（昌平黌）教授の安積良斎（名は重信、一七九一～一八六〇）の塾に入り、やがてその塾頭となる。文久元（一八六一）年に帰藩し、慶応二（一八六六）年に藩校修猷館の総受持となり、藩主の侍読を務めるが、明治二（一八六九）年に病を得て職を辞す。その後、謙窓は同三年に那珂郡中原村に居住するが、牛頸村より児童教育の依頼を受けて、同七（一八七四）年に一家を挙げて牛頸に転居する。同八年六月より同十三年四月まで、御笠郡牛頸村小学校の初代校長を務め、同年十月より同十八年六月まで御笠中学校一等助教諭を務めるなど、地域の教学に尽くした。さらに明治四年に廃止された修猷館が、同十八（一八八五）年に福岡県立修猷館として再建されると、同二〇（一八八七）年に謙窓は漢文科及び歴史科の教導にもなっている⁽⁶⁾。

ところで、初代の竹田春庵は引退した後、牛頸に隠居してここに「笛塾」という学塾を開いたと伝えられる⁽⁷⁾。しかし、今日の研究によれば、定直の牛頸居住と笛塾開設に関しては、文献資料としては確証はないともされる⁽⁸⁾。ただ、謙窓が明治七年に那珂郡中原村から牛頸に移住したのには、山紫水明の地ということ以外にも、それなりの理由があったのかもしれない⁽⁹⁾。いずれにしても、謙窓がこの地に居住し地域の文教のために功績があったことは確かである。また、謙窓の子である修吉（第十代、号は定修、一八七三～一九四五）も、明治二十五年に牛頸小学校に赴任して以来三十年間にわたって教員、校長として奉職

し、「質樸敦厚」の郷俗はその徳化によるものとされる。平野神社の横には、明治二十五（一八九二）年に「竹田謙窓先生碑」が建てられる。また、修吉を顕彰した「恩師竹田修吉先生追慕碑」も、昭和十八（一九四三）年にその隣に建てられている⁽¹⁰⁾。この謙窓・修吉の竹田父子と深いつながりを持つことになったのが、高木磯太郎である。

磯太郎の養父母が牛頸においてどのような生活をしていたかは定かでないが、彼が福岡甲種医学校在籍中に綴った日記「雜記載録」（明治十八年）の正月十三日の条に、次のような興味深い記述が見える（原漢文）。

午後一時頃、家君の書状を齎して村人來たる。開緘して見る。一見すれば乃ち先日、宮本竹墩翁の謙窓道人に贈るの返書、中に在り。⁽¹¹⁾

ここに「謙窓道人」とあるのは、言うまでもなく先に見た竹田家第九代当主の竹田猷を指す。先に謙窓没後に「竹田謙窓先生碑」が建てられたことに触れたが、その碑文を著したのが、同じく磯太郎の日記に見える「宮本竹墩翁」である。

宮本竹墩（名は茂任、字は子任、一八二一～一八九四）は、福岡藩士で、竹田謙窓と同じ時期に昌平黌で安積良斎に学ぶ。廃藩置県の後、中学及び師範学校の教官を歴任し、最後は中学修猷館の倫理の教師となる。竹墩は文を以て天下に知られた安積良斎に称賛されたほど文章に長じ、著に『竹墩小品』があると云う⁽¹²⁾。彼が誌した「竹田謙窓先生碑」（原漢文）には、「子斐（謙窓）の余に少きこと十余歳、学事自ら使事に及ぶまで、毎に其の職を聯ね、終身親善たり。」とある。両者が生涯公私にわたり極めて親密な間柄にあったことがよく分かる。なお、前述の「恩師竹田修吉先生追慕碑」によれば、謙窓の長男である修吉は再建さ

れた修猷館に学び、さらに宮本竹墩先生の家塾に入門し、孔孟程朱の道を学んだ、とある⁽¹³⁾。

さて、高木磯太郎の日記の記述によれば、竹田謙窓からの書簡に対して、宮本竹墩が贈った返書が、父親からの書状の中に同封されていたということである。おそらく謙窓が竹墩から来た手紙を磯太郎の父親に手渡したものと見られる。少なくとも竹田謙窓と磯太郎の父親とが極めて親密な関係にあったことは確かであり、その書簡が磯太郎の元に送られてきたということは、磯太郎自身少なくとも竹田謙窓や宮本竹墩のことをよく知っていたと思われる。この時同封されていた竹墩の返書にどのような内容が記されていたのか、またなぜ磯太郎のもとに転送されたのか、これらのことは少なくとも彼の日記から明確に読み取ることにはできない。ただし、彼と竹田謙窓との関係については、後年になって磯太郎自身が作成した文書から知ることができる。

日記が書かれてから四十五年以上も経つてのことだが、昭和六（一九三二）年四月、既に東京に転居していた磯太郎は、妻と共に牛頸の墓参に出かける。ついでに神社仏閣・名勝古跡を観光しながら、各地離居の親戚を訪問して交誼を深める。六月に東京に帰宅した六十六歳の磯太郎は、これを「チャンス」と考えて、妻の兄弟姉妹に係る一族の名簿を作成する。「親戚家族名簿」である⁽¹⁴⁾。それによれば、彼の妻の「アグリ」は竹田謙窓の二女であったことが分かる。謙窓には二男四女がいたが、アグリはその二番目の子として明治二年に生まれており、磯太郎より四歳年下であった。ついでに言えば、修吉はアグリの四歳下の弟に当たる。竹田家と高木家とが同じ牛頸在住であることから、磯太郎の父と謙窓道人（竹田猗）との間に以前から交流があったであろうことは想像に難くない。いずれにしても、高木磯太郎は福岡における儒学の名門竹田家と姻戚関係にあったことが分かる。当然謙窓の盟友である

宮本竹墩とも交流があったと思われる。幕末福岡藩の二人の碩儒とながりは、磯太郎の学問的素養を培うものとなったと想像される。十二歳になった磯太郎は、牛頸の儒学的環境の中から人生の次の段階へと進むため、故郷牛頸を離れることになる。

（三） 盍簪学舎の教育

高木磯太郎は、明治十一（一八七八）年に阿蘇宮地の「盍簪学舎」に学ぶことになる。満年齢では十二月に十三歳になる年であったが、入学に至った経緯は定かでない。盍簪学舎は、同年十月に熊本県阿蘇郡宮地村一九四九に設立認可された中等教育の私学校である⁽¹⁵⁾。設立者の高宮貞松（名は守質、字は子直、通称は貞松、号は鶴溪、一八二八―一八八二）は、代々郡医師の家の出身で、安政四（一八五七）年九月二一日に父貞固（名は守為）から跡目相続をしている⁽¹⁶⁾。明治八（一八七五）年、郷人に推されて小学校の師長（校長）となるが、幾ばくもなくして辞職し、同十一年十月二十一日に盍簪学舎を開塾する。没後に門人によって作られた「高宮先生之碑銘」には、遠近から入門する者は「先後、百を以て数う」とある。そして、高宮貞松の姿を次のように描写している（原漢文）⁽¹⁷⁾。

先生、居恒（平生）謹慎し、奢侈を戒め、恭儉を崇び、声色貨利を遠ざく。凡そ亂帙無く、席に纖塵も無く、終日端座して、絶えて倦容無し。其の門に入り其の教えを奉ずる者、望みて敬を起さざること靡し。

高木磯太郎が学んだ高宮貞松の人柄と盍簪学舎の校風が想像できる文

章である。盍簪学舎については、昭和六（一九三一）年に熊本県教育会によって編集発行された『熊本縣教育史』上巻に「中等教育・私学」の一つとして記録されているが、その中に、県庁文書によって「学科」「教則」が紹介されている。一方、「高木資料」に収められている「盍簪学舎教則并試験法」（明治十四（一八八一）年六月中旬筆録。但し試験法は省略）にも、「学科・教則」が筆録されているが、両者を比べるとかなりの異同が見られる。高木の筆録した「盍簪学舎教則」では、先ず次のように記されている。

上下等は各々六級、高等は三級、分ちて三等十五級と為す。⁽¹⁸⁾

だが、『熊本縣教育史』が引用する県庁文書にはこの文章はなく、教則の中にも、「下等」第六級から第一級まで、「上等」第六級から第一級まで、「高等」の三級は記されていない。また、各教科目の種類と内容（教科書）にも相当の違いが見られる。県庁文書と、学塾で実際に用いられたものとは差異があったと言える。ただ、今日、県庁文書をそのまま引用した『熊本縣教育史』上巻と『阿蘇魂』（阿蘇魂刊行会、一九六九）以外に「教則」を見ることはできないようであるから、高木磯太郎の筆録本は教育史的に見ても極めて貴重な資料と言えよう。そこで以下に、高木の筆録本によって、盍簪学舎で実際に行われていた教育の内容を見ていくことにする。なお、本文にはその表記はないが、「読書」「算術」等を「科目」と表記した。「一学科 和漢洋兼学」のあとに、「二教則」として各等各級の科目が列記されている（県庁文書との異同については括弧書きで示す）。

二 教則

下等

第六級

一 読書 孝経 大學

一 算術 数学

一 習字 假名 洋文字

第五級

一 読書 論語 中庸

一 算術 位取

一 習字 楷書 千字文

第四級

一 読書 孟子

一 講義 日本畧史（「読書」の科目に）地理初歩^附地球儀（なし）

（講義の科目なし）

一 問答 右二書之内（問答の科目なし）

一 算術 加法

一 習字 同前級（楷書、唐詩選）

第三級

一 読書 詩経

一 講義 日本地誌略（「読書」の科目に）（講義の科目なし）

一 問答 同^附日本地圖之内（問答の科目なし）

一 算術 減法（加減、合法）

一 習字 行書

第二級

一 読書 書経 易经

一 講義 萬国史略（「読書」の科目に）（講義の科目なし）

- 一 問答 同（問答の科目なし）
- 一 算術 乗法 加減乗合法
- 一 習字 草書（習字の科目なし）

第一級

- 一 讀書 禮記
- 一 講義 内国史略 万国地誌畧（共に「読書」の科目に）（講義の科目なし）
- 一 問答 右二書之内 ^附万国地圖（問答の科目なし）
- 一 算術 除法 四術合法
- 一 作文 通俗往復文
- 一 習字 （習字の科目なし）

上等

第六級

- 一 讀書 春秋左氏傳 国語 国史肇要（なし、代わりに十八史略、日本地理書）
 - 一 講義 国史肇要（講義の科目なし）
 - 一 地理学 日本地誌要畧（地理学の科目なし）
 - 一 諳記 右四書之内（諳記の科目なし）
 - 一 算術 至大等数
 - 一 作文 片假名交記事
 - 一 詩作 五七言絶句（五言絶句）
 - 一 習字 （習字の科目なし）
- #### 第五級
- 一 讀書 十八史略（なし） 史記（戦国策あり） 國史略
 - 一 講義 右三史之内（講義の科目なし）

- 一 諳記 同（諳記の科目なし）
- 一 算術 至小倍数
- 一 作文 片假名交論説（史類複文）
- 一 詩作 同前級（七言絶句）
- 一 習字 （習字の科目なし）

第四級

- 一 讀書 說苑（世説新語あり） 蒙求 日本外史
- 一 講義 右四書之内（講義の科目なし）
- 一 物理学 物理階梯（物理学の科目なし）
- 一 諳記 前書之内（諳記の科目なし）
- 一 算術 自命分至通分
- 一 作文 史類復文（漢文記事）
- 一 詩作 同前級（五言律）
- 一 習字 （習字の科目なし）

第三級

- 一 讀書 文章軌範 文選 日本政記（和譯地理全志あり）
 - 一 講義 文章軌範 日本政記
 - 一 修身學 修身論（修身学の科目は第四級へ）
 - 一 地理学 輿地誌略（地理学の科目なし）
 - 一 物理学 物理全誌（一理学 物理階梯）
 - 一 諳記 前書之内（諳記の科目なし、代わりに一化学 化学篇）
 - 一 算術 自加分至除分
 - 一 作文 漢文記事（雜題漢文）
 - 一 詩作 五言排律（七言律）
 - 一 習字 （習字の科目なし）
- #### 第二級

- 一 讀書 歴史綱鑑〔補〕 国史纂論
 - 一 講義 右二書之内（講義の科目なし）
 - 一 修身學 小学内篇（修身学の科目なし）
 - 一 物理学（理学） 気海觀瀾廣義
 - 一 化学 化学篇（未究）
 - 一 諳記 前書之内（諳記の科目なし）
 - 一 算術 比例
 - 一 作文 漢文諸説（同前級）
 - 一 詩作 同前級（五言排律）
 - 一 習字 （習字の科目なし）
- 第二級
- 一 讀書 綱鑑易知録 唐宋八大家讀本
 - 一 講義 右二書之内（講義の科目なし）
 - 一 修身學 小學外篇（修身学の科目なし）
 - 一 物理学（理学） 博物新編
 - 一 化学 （未究）
 - 一 諳記 前書之内（諳記の科目なし）
 - 一 算術 利息算
 - 一 作文 漢文遊記（同前級）
 - 一 詩作 七言律（五七言古）
 - 一 習字 （習字の科目なし）
- 高等（以下すべて無し）
- 第三級
- 一 讀書 無點大日本史
 - 一 修身学 孟子

- 一 作文 論文
 - 一 詩作 五言排律
 - 一 習字 董其昌石搢
- 第二級
- 一 讀書 無點詩文集
 - 一 修身学 論語
 - 一 作文 雜題
 - 一 詩作 五七言古
 - 一 習字 同前級
- 第一級
- 一 讀書 唐本史類
 - 一 修身学 大学 中庸
 - 一 作文 同前級
 - 一 詩作 四言及五七言古
 - 一 習字 同前級

右教則終

各科目ごとに見ていくと、「読書」は高等の第一級まで、「講義」は、下等の第四級から上等の第一級まで、ほぼ一貫して課せられている。「読書」はおそらく今日で言う演習形式、「講義」は同じく講読ないし講義形式を指すと思われる。「算術」も上等の第一級まで一貫して課せられており、段階的に上がり「比例」や「利息算」まで行く。上等になると、「物理学」や「化学」の科目も見える。「習字」は全等全級にあり、下等第一級からは「作文」が加わり、上等第三級からは内容が漢文になり、上等の第六級からは漢詩の「詩作」も加わる。また、上等第三級か

らは「修身学」も置かれ、教科書としては『四書』や『小学』が取りあげられている。

漢文の教科書としては、下等、上等の段階では、おそらく訓点の施されたいわゆる和刻本であったと推測されるが、高等では「無点」つまり訓点なしのいわゆる白文の読解が加わる計画であったようである。今日の大学の学部ないしは大学院の演習レベルの授業である。

このように見てくると、壺簪学舎では、徹底して儒学を中心とした漢学教育が行われ、漢文を書き漢詩が作られるように指導されていたことが分かる。同時に算術や地理、歴史、物理学、化学といった教養科目も学んだのである。特に「不審字控」などを見ると、身につけた漢字漢文能力は相当なもので、後に彼が漢文で、しかもかなり難解な漢字をも使用して日記を綴ったことも首肯できる。また、全等全級に課せられている「習字」は、その後の彼が記した講義ノートなどに見事に活かされていると言える。

ところで、「高木資料」には含まれていないが、『熊本縣教育史』上巻には壺簪学舎の「塾則」が掲載されており、学塾内の生活を垣間見ることができるので、以下に引用する。本人にとっては頭に刻み込まれており、書き写す必要もなかったであろう。原漢文であるので、訓読をも記す。

一、塾 則

- 一、座班者以学級爲順（座班^{ざはん}（席次）は学級を以て順と爲す）
- 一、朝六時起床夜十時臥（朝六時に起き、夜十時に臥^ふす）
- 一、整肅諸具清潔塾内不可汚障壁（諸具を整肅にし、塾内を清潔にし、障壁を汚すべからず）
- 一、借用書籍毎帰省可返致塾中会稽亦準之（借用せる書籍は、帰省す

る毎に返致すべし。塾中の会稽（計）も亦た之れに準ず）

- 一、不許漫外出則必可告其事故（漫^{みた}りに外出するを許さず。出づるには則ち必ず其の事故（事情）を告ぐべし）

- 一、除昆弟外禁同臥（昆弟（兄弟）を除くの外は、同臥^{どうが}を禁ず）

- 一、塾中禁酒（塾中は酒を禁ず）

- 一、犯規則者可以炊飯及灑掃贖之（規則を犯す者は、炊飯及び灑掃を以て之れを贖^{あがな}うべし）

さて、『熊本縣教育史』上巻所掲の「第二期新設私学表」によれば、「壺簪学舎」は明治十一（一八七八）年十月二十一日に設置され、同十五（一八八二）年十一月二十八日に廃止されている。前掲の「高宮先生之碑銘」には、「先生病歿す、年五十有五。實に明治十五年十月四日なり。古神原の先塋（祖先の墓域）^{せんえい}の側に葬る。」とある。壺簪学舎は、設立者であった高宮貞松が病没したために、翌月に閉塾となったのである。「高木資料」所収のノートでは、明治十五年十月の「洋算傳習手控」が最後のものである。高宮貞松が亡くなった月である。この年の四月に書かれたのが、「歴史綱鑑補不審字控」である。「不審字控」とあるのは、当該の書物の中で難読・難解の文字を抜き出し、読みや意味を記録して覚えることを指す。『歴史綱鑑補』は上等第二級の「読書」に対応する。だとすると、この秋、高木磯太郎は壺簪学舎において上等第一級まで進級していたことになる。「高木資料」の中で一番早いノートは明治十一年十月と記された「洋算手控」であるから、高木磯太郎は壺簪学舎が設立された時から、閉塾の時に至るまでの四年間、壺簪学舎の生徒であったと言える。また、明治十五年秋の閉塾によって、「教則」上の「高等」教育は実質的には行われなかったのである。

ところで、明治十一年十月の日付けのある「洋算手控」の裏表紙には、

中央に「高木磯太郎」と大書されているが、その左側に漢詩一首が書写されている。安積良斎の「登筑波山絶頂」(筑波山の絶頂に登る)という七言絶句である(本稿附録資料(5) 写真を参照)。

突兀奇峯雲外浮	突兀たる奇峯	雲外に浮かぶ
天風吹上絶巔秋	天風吹き上る	絶巔の秋
山河歴歴双鞋下	山河歴歴たり	双鞋の下
但恐一呼驚八州	但だ恐る一呼	八州を驚かさんことを

この詩は、『嘉永二十五家絶句』(嘉永二十五年刊)巻二に収録されているが⁽¹⁹⁾、磯太郎が何によつてこれを記したかは定かでない。ただ、安積良斎は言うまでもなく牛頸の二人の碩儒、竹田謙窓と宮本竹墩との恩師である。二人を通して良斎の漢詩を知ったのかも知れない。いずれにしても、筑波山の絶頂で詠われた気宇広大なこの詩が、雄大な阿蘇の自然の中で、磯太郎が奮い立たせたことは確かであろう。

やがて高木磯太郎は阿蘇の地を離れ、福岡甲種医学校に進学することになる。盃簪学舎設立者の高宮貞松は、郡医師であつた人物である。高木の医学校への進学に対しどのような影響を与えたのかということは、現今の時点では明確でない。ただ、盃簪学舎の教則を見る限り、福岡医学校への進学準備するのに十分な教育を受けたことはまちがいない⁽²⁰⁾。当時、医学校の受験者・入学者が事前にどのような教育を受けていたかということは、公立の中学の修了者以外では必ずしも明瞭ではないと思われることから、高木磯太郎のここまでの歩みは、一つの事例として貴重な資料を提供するものと言えよう。

〔註〕

(1) 生年月日は『日本醫籍録』(東京醫事論社編纂、一九二五)に記されている。実父と養父については、竹田亨氏所蔵の竹田晴夫著『竹田家の歴史』(私家版、二〇〇〇)第五章・表六(家系図)「二・高木家」に見える「高木磯太郎」の箇所に、竹田準氏が補筆して「(実父)黒田家臣田中又十郎(養父)高木格仙」と記している。竹田家については後述するが、第九代(謙窓)の長男が修吉、その長男が博吉、その二男が準、その長男が亨で、猗の二男の六吉の長男が晴夫である(敬称略、附録資料(2) 高木磯太郎親族家系略図を参照)。田中又十郎については、磯太郎の日記「雜記載録」にも見える。明治十八(一八八五)年二月十三日の条に、「午後三時自り田中又十郎の墓所並びに大西新地に到る。」とある。また、三月二日の条に、「乃父出福す。又竹田先生、二日市自り直来す。今日、暇を乞い西新地田中氏に到る。蓋し明日は実父十三年忌會執行の由。余、招待せらる。之れに因り、今夜自り明日九時前に到るまで寄寓の筈なり。」とある。これによれば、高木磯太郎の実父である田中又十郎は、明治六(一八七三)年三月頃に逝去したと思われる。この時、磯太郎は満七歳で、これ以後、高木格仙の養子になり、福岡から牛頸に移ったと思われる。

牛頸が出身地であることは『舊福岡醫學校同窓人名録』(九州大学大学文書館蔵)等に見える。番地は『日本杏林要覧』(日本杏林社、一九〇九)等によつて分かる。なお、牛頸の地名表記の時代的変遷(磯太郎出生以後、現在まで)は、次の通りである。

慶応元年(一八六五) 福岡藩牛頸村
 明治四年(一八七一) 福岡県牛頸村
 明治十一年(一八七八) 福岡県御笠郡牛頸村
 明治二十二年(一八八九) 福岡県御笠郡大野村大字牛頸
 明治二十九年(一八九六) 福岡県筑紫郡大野村大字牛頸
 昭和二年(一九五〇) 福岡県筑紫郡大野町大字牛頸
 昭和四七年(一九七二) 福岡県大野城市牛頸

(2) 自筆の講義ノートによつて、福岡区因幡町(天神町)にあった斎藤教諭

宅に寄宿していたことが分かる。

(3) 『日本杏林要覧』(日本杏林社、一九〇九)には、明治二十一(一八八八)年六月の卒業と記されているが、福岡甲種医学校は同年三月三十一日に廃校となり、卒業生に対する証書授与は四月に行われている(後述)。

(4) 『第三版大衆人事録』(帝国秘密探偵社・帝国人事通信社、一九三〇)、『財界系図』(人事興信所、一九五六)を参照した。なお、『月刊保険評論』(保険評論社発行、一九六六)十月号に、「前東京海上火災保険株式会社社長・前日本損害保険協会会長・故從四位・勳三等 高木幹夫氏追悼特集」が組まれていて、多くの人によって高木幹夫の業績や人柄が述べられている。また、註の(1)に記した竹田晴夫氏は、高木幹夫氏の従弟に当たり、同社の第八代社長となった。

(5) 牛頸の歴史や文化については、『牛頸郷土史』(牛頸郷土史発行委員会発行、二〇〇二)を参照した。

(6) 竹田猗については、大野城市所蔵「竹田家文書」一八五四〜一八五七「竹田定猗履歴書」、一八六一〜一八六三「竹田猗履歴書」、三六一五「謙窓年譜并行状」(竹田修吉)、また『修猷館七十年史』(福岡県立修猷館高等学校編輯発行、一九五五)等を参照した。

(7) 『福岡県教育史』(福岡県教育委員会、一九五七)等に記載。

(8) 門井慶介氏は、「竹田文書について」(『市民ミュージアム 大野城心のふるさと館紀要』第4号、大野城心のふるさと館、二〇二四)において、牛頸に定直が隠居して「笛塾」を開いたという説に疑問を呈している。なお、定直の門人である井上周道撰の「竹田春庵墓誌」(延享三年、一七四六)には、「享保九(一七二四)年、年六十四、老を告げて致仕す。」「致仕の後、家居二十年、手に巻を釈かず。」とあるだけで、隠居後の居住地や家塾等については触れていない(『福岡縣碑誌 筑前之部』(菊池敏彦校閲、荒井周夫編輯、大道學館出版部発行、一九二九) 篤学垂帷篇を参照)。

(9) 謙窓が牛頸に居住することにした理由について、長男修吉は、大野城市所蔵「竹田家文書」一八〇七「禮辞」(竹田修吉、明治二十七年二月二十五日)の中で、「固ヨリ風流閑雅ヲ好ミ山水幽微ノ地ヲ愛シ僻遠ナル此牛頸ノ

閑幽ヲトシテ移住ス」と記している。また、同「竹田家文書」三六一五「謙窓年譜并行状」附「謙窓長女秀子の口述」(昭和五年七月)には、「此頃世は寺子屋が全廃されまして、小学校が村々に建てられる事になり、貞之進(謙窓)、師として八方より迎えられました。牛頸はかねてより水清く谷静かにして山水の眺めよろしきことを聞き及びしを以て、此村よりの招に応じまして、居を移されたのであります。それより牛頸小学校の先生として平然として暮らされました。」(句読点は筆者)とある。また、この間に他の地域の小学校や中学から引き抜かれたので、牛頸の村民は大いに不平を言って反対をした、とも述べている。なお、この「口述」には、牛頸での謙窓と村民たちとのやりとりが述べられており、身内ならではの興味深い資料である。

(10) 『大野城市のいしぶみ(大野城墓碑誌)』(大野城市発行、二〇〇四)を参照した。また、「竹田謙窓先生碑」については、大野城市所蔵「竹田家文書」一八〇七「禮辞」(竹田修吉)を参照した。宮本竹墩による「竹田謙窓先生碑」の翻刻と訓読は、『福岡縣碑誌 筑前之部』(菊池敏彦校閲、荒井周夫編輯、大道學館出版部発行、一九二九) 篤学垂帷篇に収載されている。また、同書には竹田家歴代の人物の墓誌などが多く収載されている。

(11) 「(十三日) 午後一時頃齋家君之書状村人來開緘見一見乃先日宮本竹墩翁贈謙窓道人之返書在中」

(12) 宮本竹墩については、養嗣子である宮本保が誌した「宮本竹墩墓誌」の翻刻と訓読が、前掲『福岡縣碑誌 筑前之部』 篤学垂帷篇に収載されている。なお、同書には、宮本竹墩が著した各種の碑文類二十二点も収載されている。

(13) 大野城市所蔵「竹田家文書」三六二四「年譜(竹田修吉)」の明治二十四(一八九一)年の条に、「十九才四月福岡儒者宮本茂任先生ノ家塾ニ學ブ」と見える。

(14) 大野城市所蔵「竹田家文書」三七七一「親戚家族名簿」である。冒頭に名簿調製者である高木磯太郎が、昭和六(一九三一)年八月上旬に著した「親戚家族名簿調製に就て」という文章が置かれている。内容の詳細に関しては後述する。

(15) 「盍簪学舎」については、『熊本縣教育史・上巻』(熊本縣教育會編集・発行、

一九三一）第四章・第二期・第四節、山本十郎著『阿蘇魂』（阿蘇魂刊行会、一九六九）を参照した。学舎の所在地の番地については、『熊本縣教育史・上巻』の四八五頁には「一九四九番地」とあるが、四九七頁には「二四七番地」となっている。ここでは前者を取った。なお、「盃簪」は『易経』豫卦に、「朋盃簪ともあいぢまらん（同志の朋友が集まってきて助けてくれるであろう）」とあるによる。

(16) 高宮貞松の跡目相続については、熊本大学附属図書館・文学部附属永青文庫研究センターが提供するインターネット検索システム「十九世紀熊本藩住民評価・褒賞記録『町在』解析目録」の中に見える。原資料は、「安政四年九月二一日」、「坂梨手永宮地村医師高宮貞固隠居、二男高宮貞松跡目相続」となっている。

(17) 高宮貞松の顕彰碑に誌された「高宮先生之碑銘」は、『阿蘇郡誌』（熊本縣教育會阿蘇郡支會編纂、一九二六）第二編・人文界「盃簪學舎」に翻刻されている（原文のみ）。また、前掲『阿蘇魂』の中にも翻刻（原文に校点）があり、さらに高宮貞松が著した「先考墓表」の翻刻や彼の漢詩も数篇載せている。『一の宮町史 史料目録』（一の宮町教育委員会発行、二〇〇二）によれば、「高宮の霊は宮地古神の阿蘇家の霊廟近く、門弟糸永裕順の撰んだ墓碑のもとに静かに眠っている。」とある。「墓碑」とあるのは、この「高宮先生之碑銘」の誌された顕彰碑のことと思われる。なお、糸永裕順は「判事」であったと『一の宮町史』にはある。また、同書には、高宮貞松の没年を「三十五歳の若さであった。」と記すが、「高宮先生之碑銘」には「先生病歿、年五十有五」とある。こちらの方が正しいと思われる。

(18) 「上下等各六級高等三級分爲三等十五級」

(19) 富士川英郎等編『詞華集 日本漢詩』第八卷（汲古書院、一九八二）所収の影印版を参照した。

(20) 前掲『一の宮町史 史料目録』は、盃簪学舎について、「明治期において初めて新味を帯びた学塾で、阿蘇における新式私学といっても過言ではない。」として、さらに「高宮は、謹言質実、身をもって衆を率い、子弟はおのずからその薫化を受けた。彼の門から判事糸永裕順をはじめ、政、財、宗

教、軍部などの各界に有為の人材を出した。」とある。加えて「医療」と言ってもよいだろう。

三 福岡甲種医学校と高木磯太郎

(一) 福岡甲種医学校の教育

ここで、高木磯太郎が入学した「福岡甲種医学校」について、その歴史、規則、授業科目などについて概略を見てみることにする⁽¹⁾。

福岡甲種医学校は、九州大学医学部の前身である九州帝国大学医学部から遡ると、京都帝国大学福岡医科大学、県立福岡病院のさらに前身に当たる。そして、古くは慶応三（一八六七）年に開設された福岡藩の医学校である藩校賛生館を淵源とする。明治になり「学制」公布によって賛生館が廃校となったのを受け、福岡県は明治十（一八七七）年に福岡医院を設立し、院内で医師教育を行うが、同十二（一八七九）年に福岡医院を廃止して福岡医学校を設置し病院を附設する。当初の教員不足を解消するために招かれたのが、東京大学医学部をその年に卒業した大森治豊と熊谷玄旦の二人の医学士であった。彼らより前に福岡医院の初代院長として招かれていた大河内和を含めて教員は三名であった。翌年一月に開講式が行われ、五月に「福岡医学校職制章程并諸規則」が制定される。

ところで、同十五（一八八二）年五月に文部省は、一定条件を満たす医学校の卒業生には、医師試験を受けずに医師開業免許を付与することとして、そのような医学校を制度化するための「医学校通則」を制定した。そして、その条件を満たした医学校を「甲種医学校」とした。福岡医学校も甲種医学校の認可を受けるために、種々努力し、「福岡医学校

規則」を通則に従ったものに改訂する。こうして認可を受ける条件を満たしていったが、直前の同十六（一八八三）年一月に大河内和が病死したため、追加の人事が必要となる。そこで大森が奔走し、最終的には五名の一等教諭の人事体制が整い、「福岡甲種医学校」が誕生することになる。同十七（一八八四）年のことである。

次に、明治十六年二月五日改訂の「福岡医学校規則」（十一章、全一〇四條）から主要な項目を見ることにする。先ず修学年限は四ヶ年で八学期制（第四條）。一学年は十二月一日から翌年十一月三十日まで（第五條）。各学年で、一学期は十二月一日から翌年五月三十一日まで、二学期は六月一日より十一月三十日まで（第六條）。毎週の授業時間数は、二十一時間から三十三時間まで（第七條）。日曜日は休日で、夏休業は八月一日より三十一日まで、冬休業は十二月二十五日より翌年一月七日まで（第八條）。なお、学年の開始は、明治十八（一八八五）年から九月一日に改められたようである。

本医学校は「尋常医学科」を教授する処であったが（第一條）、医学科は以下の諸科目（二十一科目）に分かれた（第三條）。

物理学、化学、動物学、植物学、解剖学、組織学、解剖組織実地演習、生理学、薬物学、病理学、内科、外科、眼科、診断学、内科臨床講義、外科臨床講義、眼科臨床講義、婦人科学、産科学、衛生学、裁判医学

各科目の内容や履修学期や時間数なども定められ（第九條）第二十七條）、試験は、月末小試験、定期試験²⁾、医学理科試験、卒業試験とされた（第二十八條）第五十七條）。

次に、入学規則（第六章）を見てみる。入学資格は、年齢は十八歳以上（第五十八條）、初等中学校卒業あるいはその学力を有する者（第

五十九條）とされた。初等中学校卒業以外に課される入学試験科目は次の通りとされた（第六十條）。

体格検査、和漢文、算術、代数、幾何、物理学、化学、動物学、植物学

生徒募集は毎年五月一回とし（第六十一條）、志願者は証人二人を立て、所定の入学願を出すこと、とされた（第六十二條）。

（二）高木磯太郎の修学

次に、高木磯太郎の修学について見ていく。「規則」に入学資格は「年齢は十八歳以上」とある。彼は慶応元（一八六五）年十二月二十八日の生まれであるから、満年齢であれば明治十六（一八八三）年十二月に十八歳となるが、この年の五月の生徒募集（「規則」第六十一條）に応じて受験したと思われる。また、「初等中学校卒業」はしていないが、「その学力を有する者」と見なされ、「入学試験」を受け合格したのである。つまり、壺簪学舎における四年間の修学の成果が、初等中学校卒業と同等の学力と見なされただけでなく、入学試験に合格するに足る実力を身につけていたということである。こうして同年十二月一日から第一学年の生徒となる。

現存する明治十九（一八八六）年八月の「福岡甲種醫學校明治十九年前半學期生徒優劣表」（九州大学大学文書館所蔵）によれば「醫學第三年前半期生」の中に、また翌年三月の「福岡甲種醫學校明治十九年后半學期生徒優劣表」（同上）によれば「醫學第三年后半期生」の中に、それぞれ高木磯太郎の名前が見える。前述のように、学年開始の時期が、同十八（一八八五）年から九月一日に改められたとあるために、学年開

始時期が改訂された後の前半期に当たる同二十（一八八七）年の九月一日から翌年二月二十八日までの学期が、高木たちにとっては第四年後半期に当たり、この学期の終了時に当たる同二十一（一八八八）年一月に卒業試験を受け、四月に卒業することになったのである（後述）。

「規則」によれば、履修すべき学科課程は第一期（第一学年前期）から第八期（第四学年後期）まで厳密に定められていた（第二十七條）。以下に記すと共に、下段に「高木資料」所収の講義ノートを対照させる。

第一期（第一学年前期）

物理学

無機化学

解剖学

第二期（第一学年後期）

有機化学

動植物学

解剖学

組織学

第三期（第二学年前期）

組織学

生理学

解剖組織実地演習

第四期（第二学年後期）

薬物学

内科通論

外科通論

第五期（第三学年前期）

内科各論

外科各論

診断学

眼科学

内科臨床講義

外科臨床講義

第六期（第三学年後期）

内科各論

外科各論

眼科学

内科臨床講義

外科臨床講義

第七期（第四学年前期）

内科各論

外科各論

婦人科学

内科臨床講義

外科臨床講義

眼科臨床講義

第八期（第四学年後期）

産科学

裁判医学

衛生学

内科臨床講義

外科臨床講義

眼科臨床講義

⑭～⑱ 「内科各論・二～六」

⑧～⑫ 「外科各論・一～〔五〕」

②④⑤ 「診断学・卷之一・卷之二」

②⑥ 「眼科学・壹」

⑭～⑱ 「内科各論・二～六」

⑧～⑫ 「外科各論・一～〔五〕」

②⑦ 「眼科学・貳」

⑭～⑱ 「内科各論・二～六」

⑧～⑫ 「外科各論・一～〔五〕」

②③ 「婦人科学」

②② 「産科学」

①⑨ 「断訟醫學」

こうして見ると、学科目のうち、第一期と第二期の「物理学」「無機化学」「有機化学」といった基礎科目と「解剖学」、及び「臨床講義」(内科・外科・眼科)と「実地演習」(解剖・組織)を除いた主要学科目の講義に関するノートがほとんど揃っていることになる。つまり、高木磯太郎は医学校時代の主要ノートを大切にまとめて保存していたのである。次に、これらの講義ノートによって、彼が受講した学科目と担当教諭の名前と受講学期とを挙げる。

外科学…大森治豊(一等教諭)	第四期～第七期
内科学…熊谷玄旦(二等教諭)	第四期～第七期
組織学…柘植宗一(二等教諭)	第二期～第三期
産科学…池田陽一(二等教諭)	第八期
婦人科学…池田陽一	第七期
眼科学…榎本与七郎(一等教諭)	第五期～第六期
薬物学…斎藤武英(三等教諭)	第五期
断断医学…熊谷玄旦・斎藤武英	第八期
診断学…池田陽一	第五期
動物学・植物学…久能功教諭	第二期

ところで、福岡甲種医学校には寮舎があり(「規則」第十一章)、明治十七(一八八四)年三月には規則を改正して全寮制を実施したとされるが⁽³⁾、その前年末に入学していた磯太郎は寮には入っていない。講義ノートの末尾に「福岡天神町斎藤武英先生方寓居中」などと記しているように、医学校三等教諭(外科学)の斎藤武英教諭の自宅(天神因幡町八番地)に寄宿していた。医学校(中島町岡新地)とはさほど遠くない距離にあったようである。

(三) 医学全科卒業試験問題録

「高木資料」の中には、特異な一冊が含まれている。表紙に、「醫學全科卒業試験問題録全」という題簽が附され、標題の右に「甲種福岡醫學校編輯」とあり、最初の頁には「問題 総数 三百二十四題 明治二十一年一月五日乃至」と記されている⁽⁴⁾。これは、高木磯太郎が受験した卒業試験時の試験問題が記録されたものを、本人が書き写した冊子と思われる(本稿附録資料(5) 写真を参照)。各学科ごとに試験問題が記されている。以下に各学科名と問題数⁽⁵⁾とを挙げる(「外科学之部」は、二十九題のあと、頁を改めて十六題が記されている)。

「解剖學之部」(三十九題)
「組織學之部」(四十二題)
「断断醫學之部」(十六題)
「衛生學之部」(十六題)
「婦人科學之部」(十八題)
「産科學之部」(十四題)
「生理學之部」(三十題)
「外科學之部」(二十九題) (十六題)
「藥劑學之部」(三十題)
「眼科學ノ部」(二十七題)
「内科學之部」(四十六題)

次に、最初に掲げられている「解剖學之部」(三十九題)を例に挙げて、記載されている「問題」を次に示すことにする。

- (1) 下顎関節
- (2) 肩胛関節
- (3) 股関節
- (4) 膝関節
- (5) 骨盤連合
- (6) 鼓室及欧氏管
- (7) 三半規管
- (8) 蝸牛殻
- (9) 涙器装置
- (10) 眼球筋
- (11) 喉頭
- (12) 肺及肋莫
- (13) 唾腺
- (14) 舌
- (15) 咽頭及食道
- (16) 胃
- (17) 腸
- (18) 肝及胆嚢
- (19) 脾臓
- (20) 腎
- (21) 膀胱
- (22) 男子尿道
- (23) 辜丸及副辜
- (24) 精系
- (25) 陽莖
- (26) 子宮及喇叭管
- (27) 會陰諸筋
- (28) 横膈莫
- (29) 心臓
- (30) 外腎動脈ノ經過及枝別
- (31) 内腎動脈
- (32) 鎖骨下動脈
- (33) 上腕動脈
- (34) 前腕動脈
- (35) 腹部大動脈内臓支
- (36) 内腸骨動脈内臓支
- (37) 股動脈
- (38) 下腿及足動脈
- (39) 門脈

これらは設問そのものではなく、内容項目と言うべきものである。また、もちろんこの「問題録」所載の三百二十四題がすべて出題されたわけではないだろう。これらの中から各学科ごとに幾問かが出題されたことが「規則」から分かる。

福岡甲種医学校の卒業試験に関しては、前掲の明治十六年二月五日付で改訂告示された「福岡医学校規則」に詳細に規定されている。すなわち、「第五章 試験規則」の「第四節 卒業試験」(第四十六條〜第五十七條)である。先ず卒業試験科目を三大科目に大別する。第一大科目は「解剖学」、「組織学」、「生理学」、「衛生学」で、第二大科目は「外科」、「眼科論理及び実験」、「裁判医学」で、第三大科目は「内科論理及び実験」、「薬物学」、「婦人科」、「産科」である。第一大科目では、「生理学」と「衛生学」とをまとめて全体で三小科目として、試験方法をさ

らに詳しく以下のように説明している（第五十條、句読点は筆者）。

此試験ニ於テハ、毎試験期前ニ定メタル問題ヨリ、抽籤法ヲ以テ問題ヲ附與シ、口答及ヒ筆答ヲナサシム。

生理学、衛生学試験ニ於テハ、抽籤ニ由テ定ムル處ノ二様ノ問題ヲ與フ。即チ其一ハ生理学、一ハ衛生学ノ中ヨリ撰ムモノトス。

以下の第二大科目と第三大科目の各科目においても同様の試験方法が規定されている。ここには、「毎試験期前に定めたる問題より抽籤法を以て問題を附與」するとある。事前に定めた問題の中から実際に出題される問題は抽籤によって決められるということである。先に見た「高木資料」所収の「醫學全科卒業試験問題録」の中に示された「三百二十四題」は、この「試験期前に定めたる問題」の一覧であつたと言えよう。

つまり、この三百二十四題のうち、どれが出題されるかは分からないということであり、受験者としては全てを復習しておかなければならない。逆に言えば卒業までの四年間でこれらの内容の全てが教授され学習されていたということでもある。もちろんこれ以外のことがらが教授され学習されなかったというわけではない。その意味で、この明治二十一年の「醫學全科卒業試験問題録」は、福岡甲種医学校のカリキュラム全体ではないが、実際にどのようなことがらが教授され学習されていたかの実例を具体的に示すものと言えよう⁽⁶⁾。現在のところ、福岡甲種医学校における「卒業試験問題録」の存在を示す資料は他に見当たらない。また、当時の他の医学校の場合も、実際に出題された試験問題は記録されていても、試験範囲全体を示すようなものは存在しないと思われる⁽⁷⁾。これらのことから、「高木資料」所収の「醫學全科卒業試験問題録」は医学史及び医学教育史研究にとつても、貴重な資料と言ふことができる。

〔註〕

(1) 以下、福岡甲種医学校については、基本的に『九州大学百年史』第一巻…通史篇Ⅰ・第一編「第一章 賛生館から県立病院へ」を参照した。

(2) 「福岡医学校規則」第三十二條に、「定期試験ハ毎期ノ末ニ（五月・十一月）於テ施行シ生徒ノ進退ヲ定ム」とあるが、試験成績ハ「甲（五点）乙（四点）丙（三点）丁（二点）戊（一点）ノ五格ヲ以テ表ス」（同第三十一條）とあり、「丁以下ノ点数ヲ得ルモノハ落第トシ其期ニ止ム」とある。各学期で及第点を取った生徒は、次の学期に進むことができるわけだが、この時に学期の「卒業証」が授与されていたことが、九州大学大学文書館所蔵の資料によって明らかになった。長崎県出身の鈴木貞一という生徒に授与されたもので、明治十三年十一月三十日付けで「第貳學期卒業証」が、同十四年五月付けで「第參學期卒業証」がそれぞれ授与されている。この学期ごとの「卒業証」授与については、従来知られていなかったことであるので、ここに記しておく（本稿附録資料（5）写真を参照）。因みに、鈴木貞一氏は明治十二（一八七九）年に入学しており、福岡医学校の最初の入学生の一入といふことになる。

(3) 前掲『九州大学百年史』第一卷（三二頁）に、『福岡県教育百年史』第1巻資料編を典拠として記している。

(4) 明治十六年二月五日付けで改訂告示された「福岡医学校規則」の「第五章 試験規則」の「第四節 卒業試験」第四十七條には「卒業試験ハ毎歳一月及ヒ七月ヲ以テ定期トシ毎期十週日内ニ之ヲ施行ス」とある。「明治二十一年一月五日乃至」とあるのは、一月に行われた最終試験のことである。

(5) 各学科の問題数を総計すると三百二十三題となり「総数 三百二十四題」と記されているのは異なる。数え間違いか、一題記載漏れか、何れかは定かでない。

(6) 各学科で教授される概要については、「福岡医学校規則」の「第四章 教授要旨」（第九條、第二十七條）に記されている。因みに、先に掲げた「解剖学」について言えば、「解剖学ハ第一期生ニ骨学靱帯学及ヒ筋学ヲ授ケ第二期生ニハ内臓学脈管学及ヒ神経学ヲ授ク教授ノ方法ハ実物ニ就キ一々之ヲ示

シ製造品ノ預備ナキトキハ図画或ハ犬猫ノ類ヨリ製品ヲ作り其大意ヲ示ス」
(第十三條)とある。

(7) たとえば私立東京医学校の場合、「東京医学校卒業試験問題」として、『東洋医事新報』第十八号(私立東京医学校編輯部発行、一九〇八)の「雑報」に掲載されているが、「内科学」については次のように記されている。

第一問 脊髓癆の診断及鑑別

第二問 腸室扶斯の診断及併発症に就て記載せよ

第三問 白血病を詳記せよ

四 「雑記載録」と福岡甲種医学校

「高木資料」の中には、医学校における講義ノートや書写本、備忘録などに混じって、極めて私的な内容を持つ一冊が含まれている。表紙は縦十六cm、横十二cmで、和紙をこよりで綴じたものである。表紙の右の方に「明治十八歳乙酉」、左の方に「正月 福岡醫学校生徒 高木磯太郎」、そして中央にやや大きく「雑記載録」とそれぞれ縦書きで墨書されている。本文は横位置となり、細かい文字で縦書きされ、表紙を含めて二十三丁ほどで、冒頭に「紀元二千五百四十年 明治十八年 乙酉 正月」とあり、「元旦」「貳日」「参日」と日にちごとに日常のことが記されている。明治十八(一八八五)年の元旦から七月二十九日までの日記で、すべて漢文によって綴られ墨書されている。裏表紙には「甲種福岡醫學校生員 第貳年前半期生 takaki (筆記体)」とある(本稿附録資料(5) 写真を参照)。

(一) 医学校の教師たち

「雑記載録」にはどのようなことが書かれていたのか。先ず冒頭にあ

る元旦の文章をそのまま記し、また訓読文に改めて引用する(1)。

〔元旦〕 霜氣寒慄旭日瞳々出於東方輝天地戸々門々掲旭旗祝大平之治世矣賀新禧客續々接踵而來不知其幾人予亦以名刺行歲初之礼於醫學校各先生之許矣

〔元旦〕 霜氣寒慄、旭日瞳々として、東方より出でて天地を輝かし、戸々門々、旭旗を掲げて大平の治世を祝う。新禧を賀するの客、続々と踵を接して来たり、其の幾人なるかを知らず。予も亦た名刺を以て歲初の礼を医学校の各先生の許に行う。

元旦、医学校の斎藤教諭の自宅に人々が続々と新年の祝賀に訪れる様子を伝えると共に、生徒が教師の所に新年の御挨拶に足を運んだことを記録している。正月六日には、午後三時三十分より実家への帰途につき、夕暮れに到着する。福岡の上人橋から井尻までは人力車を使う。翌七日には、朝からの大雨が正午過ぎにようやく止んだので帰福しようと思ひ、雑餉隈から橋口町まで人力車に乗る。正月休みの牛頸への帰省も一晩泊まりであったことが分かる。それは冬休暇が前年十二月二十五日から一月七日までで、翌八日が福岡甲種医学校の新年の開校式であったからである。その式の様子は次のように詳細に記されている。

〔八日〕 微雨肅然たり。今日は福岡医学校の開校式なり。数十の生徒着席す。又た諸教師及び校長、生徒監、寮長等、各々出場し、衛生課自り某氏出臨す。校長、先ず今日開校の語を述べ。次いで衛生課某も亦生徒奨励の弁語有り。又た校長曰く、例に依りて聊か酒肴を供せんと欲す。諸君、暫く待つべし、と。暫時にして小使酒肴を陳列す。

一飲一呑して稍紅顔と為り、席を辞して帰る。酒宴闌の頃、五期生の林為二郎、祝文を朗読す。衆、拍手す。其の声囂然として樓宇に響くこと雷鳴の如し。嗚呼熾なり今日の祝宴、今自り遠く千歳に至るまで極め止むること無し。(2)

福岡甲種医学校の新年開校式における教師と生徒たちとの様子を彷彿とさせる記録で、他の資料には見られない。福岡医学校設立の時点では香江誠が主管(校長)を務めていた。福岡甲種医学校では、この年の八月二十九日に外科学担当の大森治豊が医学校校長兼薬学校長になるが、この時期はまだ香江が校長であり、彼が「開校の語」を述べたものと思われる(3)。ところで、大森治豊、熊谷玄旦と共に福岡医学校設立当時の教諭であったのは、大河内和であるが、その名が五日後の正月十三日の日記に見える。

今日は故福岡医学校一等教師大河内和氏の墓碑の建立成就せり。故に医学校の発起者、祭典式を執行す(今日は鳥度大河内氏卒去の月日なり)。予輩独り歩いて墓の間に到る。到れば乃ち祭典式は已に終わり、諸人多くは飯れり。抑氏の墓石は、広大無比にして、国中屈指の美物なり(其の方寸等、今は之れを略して記載せず。新聞紙に載せて有れば、宜しく之れを見るべし)。其の表面には「大河内和之墓」と書し、裏面は木戸麟の撰する所の文、其の書を鐫刻するは博多の開業医師井上侃齋氏の揮う所なり。(4)

大河内和(一八五〇―一八八三)は、名古屋出身でドイツ人学士数人に就いて医学を学び、明治九(一八七六)年に東京医学校を卒業して、翌年福岡医学校教師となり、県立福岡医院の初代院長を務めるが、明治

十六(一八八三)年一月十三日に三十三歳の若さで病没している。彼の三回忌を迎えたこの日に、その墓碑が東公園内の墓地(招魂場)に建立されたのである。木戸麟は墓誌の終わりで、万感の思いを以て次のように誌している(原漢文)。

菩薩の心、劊子の手、病魔を攘い蒼生を護る。君をして永に娑婆に在らしむれば、百千万の蒼生、膏肓の患いを脱して、歡喜の声を発せん。嗚呼、彼の蒼たる者は天、何ぞ吾が蒼生を愛せざる。君をして宛然として遠逝せしむ。招けども至らず、喚べども応えず。

(衆生を救う)菩薩の心は、首切り人の手を持ち、病魔を討ち払って万民を守り救う。君が永久にこの地上にいたることができたならば、何百何千何万もの人々が、治る見込みのない病魔から逃れて、歡喜の声を発しただろう。ああ、あの青々とした天はどうして「青々とした草木のようにいる」吾が万民を愛していないのだろうか。君が永遠に去って行くのをそのままにしているではないか。君を手招きしたが君は帰ってこず、君の名を呼んだが、君は応えてくれない。(5)

福岡甲種医学校の生徒たちにとっても大河内和の遺徳は語り伝えられていたのであろう。高木磯太郎も建立された墓碑に足を運び花を手向けたようである。

ところで、患者たちに慕われた大河内和のように、生徒たちに慕われた教師の話が、日記の終わりのあたりに見える。解剖学や組織学を担当していた柘植宗一教諭のことである。柘植宗一(一八五三―一九〇七)は、東大医学部別課医学科を卒業して、明治十四(一八八二)年に福岡医学校に赴任し、解剖学や組織学を担当するが、この年の七月に岡山医学校に転出することとなった(七月二十五日に依願免本官)。以下は七

月二十六日及び二十七日の日記である。

〔二十六日〕故福岡医学校二等教諭柘植氏、事故（事情）に依り職を岡山県岡山医学校に付搏（転籍）さる。離別（お別れの会）を東公園一方亭に為す。午后四時頃、衆子着席し、先生も亦出臨す。先に演説する者数輩、演壇に登り、血涙酸澹（惨澹）として（涙が溢れてどうしようもなく）、積もりて小泉を為す。悲哀慕欽すること、恰も慈母に離るるが如きの心地を為す。游魚鳴禽皆愁腸（傷）す（嘆き悲しむ）。実に袂を分かつの情は、筆舌に尽くすべからず。飲食咬喫、味を忘る。午后八時頃、皆退散せり。（6）

〔二十七日〕福岡医学校の前の寮に於いて、柘植先生と諸子と写真せり。実に先生に比しむ者、惜しむべき慕うべきの先醒（生）なり。故に写せる英顔は永久に忘れざるなり。（7）

当時の福岡医学校における師弟の麗しい間柄を窺わせる記録である（8）。ところで、「雜記載録」にしばしば登場する教師と言え、何と言っても斎藤武英教諭である。斎藤武英は東京大学医学部別課医学科の第一回卒業生で、明治十三（一八八〇）年に福岡医学校三等教諭となったのち、同十九年に二等教諭となり、同二十一年に県立福岡病院となったのちは外科副部長となるが、同二十二（一八八九）年三月に公立久留米病院（福岡県久留米市）の初代院長として転出する。高木磯太郎は、この斎藤武英宅に寄寓していたのである。姓を書かずに「先生」として出てくるのは、ほとんど斎藤先生のことであり、その日常生活がよく分かる。もちろん医学校教諭であったのだから、学校での授業のほか附属病院での診療や手術などがあったのは言うまでもないが、自宅に診療を求めて

やつて来る患者も多かったし、そのほか病者宅への往診もしばしば行っている。一月二十三日には次のように見える。

今日、先生足下は、鞍手郡上境村の某病家の為に往診を為す。故を以て午前四時に起き、二人引きの車に乗り、払曉に家門を発し、麟々然たる車声、瞬く間に飛びて中島橋辺りに到る。嗚呼亦速やかなるかな。今朝、霜氣嚴肅たり、昼間に至りて甚だ温和たり。恰も先生遠往の日に適うかな。（9）

斎藤は鞍手郡水原村（現福岡県宮若市）の出身であったが、鞍手郡上境村（現福岡県直方市）は、福岡区（現福岡市）からは相当の距離がある。一月の早朝だからまだ暗いうちに出立をしたわけである。翌々日の一月二十五日、日曜日に帰宅の予定であった。

今日、先生足下、鞍手郡自り帰舎の筈なり。然れども午後六時頃、以て帰舎すること無し。奥様と（カケ）を為す。負くる者は饅頭十五買うべきの約束なり。而して午後九時頃、俄然として車声の門外麟々たる有り。出でて之れを見れば乃ち先生なり。衆、驚き悦びて、先ず其の労を謝し、次いで酒間の談話。十二時に到りて皆臥蓐に就くのみ。（10）

医学士家庭の生活の一齣である。往診はもちろん日帰りの時もある。次は二月十二日である。

今日、先生、佐賀県下、木山口に往診せり。午前十時に発足し、午後八時に帰着す。実に疾速なること車夫の勉厲に依ると謂うべし。（11）

また、次のように往診依頼が重なるということもあった。二月十五日である。

今朝、先生の書簡を以て博多旧秋月蔵本原田種忠方に使います。蓋し今日先生、同氏の託に応じて、遠方に往診するの筈の処、先生の親族、大宰〔府〕村の西高辻宅の某病氣なり、故を以て先生、約束に背くに謝を為し、書簡を原田氏に遺るなり。午前十時頃、先生、二人引きの車に乗りて駿々として大宰府村に向かつて行く。(12)

秋月（現福岡県朝倉市秋月）まで往診に行く予定であったが、急患であったのか、太宰府村（現福岡県太宰府市）に往診することになったので、謝罪の手紙を届けに行ったということである。太宰府村の西高辻家と言え、太宰府天満宮の社家（宮司の家）であり、斎藤家とは縁続きであったことが分かる。ところで、斎藤の遠出は往診だけではなかった。屍体検査のための出張もあった。一月三十日のことである。

この日、先生は裁判所の命令にに応じて、屍体検査の為に、榎本医学士及び秦某等と遠賀郡伊岐須村に行く。(13)

斎藤と一緒に伊岐須村（現福岡県飯塚市伊岐須）まで出かけたのは、医学校の眼科担当の榎本与七郎一等教諭と、おそらく医学校の寮長の秦氏であったようである。帰宅は翌日三十一日の夜であった。

今夜九時三十分、先生、遠賀表自り帰宅す。其の言に曰く、石炭鉱山の囚人の粗暴なる者、同輩を欧殺す。剖検するに、其の脳部中の脳膜動脈破裂し、頭頸骨鱗状部の両半分破裂、其の頭蓋骨中、所々裂間

有り。又た見るに、脳面、溢血を起こし、且つ其の動脈破裂するを以て急死を惹起せり。(14)

伊岐須村は筑豊炭田の一地域であった。炭鉱労働者である囚人仲間には殺された人物の剖検を行った斎藤先生が、その時の様子を磯太郎に話して聞かせたということで、斎藤は医学校で「裁判医学（断訟医学）」（法医学）の学科を担当しており、磯太郎にとっては思わぬ深夜の臨時講義となった。寄宿人ならではの受講と言える。ただ、斎藤家に居住していた磯太郎にはそれなりの苦勞もあった。先生のお弁当を学校に届けたり、斎藤一家全員が外出の時には留守番をしたり、芝居見物のお供をしたり、奥様が急病になるとそのお世話をしたり、と結構忙しい日々でもあった。話が医学校教師のことから少し離れてしまったので元に戻ろう。医学校の教諭たちは、講義や実習、病院での診療や手術、往診その外で日々多忙だったようだが、息抜きもしていたようで、「雜記載録」には、このような話も出てくる。四月二十二日には、午後、熊谷先生、池田先生、斎藤先生が「サヨリ」釣りを思い立って、池田先生の別荘に行った、という話が出てくる。海辺の別荘での「サヨリ」釣りの話は、五月七日にも見える。さらに十五日の夜には、先生がやはり両先生と共に石堂川で「イナ」六尾と小魚数尾を釣ったと書いている。また、このようなこともあった。三月八日、日曜日のことである。

〔八日〕晴天。今朝、医学校の教師等、平尾山に於いて兎狩り相催す処、大森先生始め外科の掛員の者、大治療有るを以て止む。其の他の諸□、彼れ此れ差し支え之れ有り、悉く皆休止せり。(15)

附属病院における大治療（手術）が、兎狩りより優先されたことは言

うまでもない。この節を終える前に、教師たちの学校外での社会的活動について見てみたい。六月二十七日（土曜日）のことである。

博多片土居かたどいの称名寺しょうみょうじにて、例月の如く私立演説会、衛生談なり。午後一時よ自り始まる。予も傍聴す。聴衆は無慮百余名、弁士続々と昇る。演題は種々、奇々妙々、雄弁三寸の舌笑、実に天地を揺るがし、聴衆感服す。就中熊谷なかんずく、斎藤の両夫子、最も好きが如し。⁽¹⁶⁾

当時は片土居（現福岡市博多区下川端）にあった由緒ある時宗寺院の称名寺（現在は福岡市東区馬出）で行われた講演の模様が活写されている。おそらく公衆衛生推進のための講演会に、福岡医学校の教師が積極的に関与していたことが分かる。

（二）医学生生活

次に医学校の生徒たちの日常生活について見てみよう。生徒にとって何よりも重要なことは、言うまでもなく学校の授業を受けることであり、試験を受けて及第することである。「福岡医学校規則」の「第四章教授要旨」には各学科の科目について、どのような形で教授（授業）がなされるかについて記されている。「くを講述す」、「くを総論す」、「くを詳論す」などであるのは、教師が行ういわゆる「講義」であり、そのほかに「実地演習」や「臨床講義」という生徒が実際に行うものがある。このうち、講義については教師が自らのノート、あるいはテキストを読み上げる形のものが多かったと思われる。生徒はひたすら講義（口述）される内容を、自分のノートに筆記するのである。「高木資料」のうち多くの講義ノートがそれを示している。このことについて興味深い話が、

「高木資料」所収の「組織學前編」の中に載っている。「組織學前編」と「組織學後編」だけは、他の講義ノートと異なり、教師の著書の一部が綴じ込まれている。これは何を意味しているのだろうか。教師である柘植宗一が明治十八（一八八五）年一月にその著書『組織學前編』（甲種福岡医学校上梓）の冒頭に記した「例言」の中に、次のように見える（句読点等は筆者）。

宗一不肖、職ヲ福岡県医学校ニ奉シ、解剖・組織ノ二科ヲ分担シ、鞠躬事ニ従ヒ欧洲諸哲ノ書ヲ訳纂シ、以テ講筵ニ諸生ヲ薫陶スルノ秘録トナス。頃時生徒等、謄写ノ勞ヲ省カンコトヲ欲シ、予ノ秘録ヲ以テ鉛梓ニ寿センコトヲ乞フ。然ルニ予ヤ其稿ノ疎ニシテ且ツ略ナルノ故ヲ以テ、敢テ心ニ慊トセサレトモ、請求ノ切ナルニ由リ、遂ニ諾シテ鉛字ニ植ス。

柘植は講義を行うに当たって、ヨーロッパの医学者の著書をアレンジして訳し、生徒に語っていたのであり、高木の「組織學後編」のノートの表紙には「柘植二等教諭譯」と記されている。ところが、生徒たちは筆記するのが大変なので、先生の原稿（秘録）を書物にして欲しい、と申し出たというわけである。躊躇した柘植だが、最終的には自分の原稿を出版する。「組織學後編」のノートは、「第三編器官造構」から始まり、「〔甲〕植物性器官」は高木の筆記だが、「〔乙〕動物性器官」からは柘植の著書（活版本）が附されている。学期中に出版されたことが分かる。医学校における講義のあり方をめぐる教師と生徒とのやりとりの跡を伝える珍しい講義ノートとすることができる。

「雜記載録」には講義自体の様子を伝えたものはあまりないが、休講などについては記されている。三月二十八日には、「今日、榎本先醒

(生) 試験有るを以て、予輩等の講釈は停止なり。予驚喜す。」とある。ここに「試験」とあるのは、附属病院における臨時の手術などを指すと思われる。突然の休講はいつの時代でも嬉しいものである。またこのようなこともあった。五月五日には、斎藤先生の講義であったが、出席者が非常に少なかったので中止にして、六人ほどの出席者の質問(不審)を聞くことに切り替え、一時間ほどで解散した、ということであった。ところで、医学校の授業では解剖実習が必須のものであるが、四月八日には次のように見える。

午前第九時出校す。今日、榎本教諭、解剖室に於いて諸生〔乃ち現在の三期生丈〕を招集し、家兎の喉頭部を切り割きて迷走神経を現出させ、電氣を以て刺戟するの試験、心臓鼓動す。正午十二時終わる。(17)

三期生とは、二学年前期の生徒のことである。三時間に及ぶ解剖実習であったが、これより先、一月二十八日には人体(屍体)の解剖実習が行われている。

今日、医学校解剖局に於いて、筋及び靱帯学研究を為す。柘植先生の指揮を以て、同胞諸氏と相い共に刀を揮い死体の下脚の垂兒箇保児に浸潤する者を解剖するなり。見処多少にして、益利無きに非ざるなり。(18)

解剖実習は見どころが多く有益であったが、翌二十九日にも、下脚の解剖が行われている。さて、授業に次いで重要なのは試験である。この年、学年の開始が九月一日からに変更され、八月は以前より夏休業であったから、後期の定期試験は七月中に行われた。この試験は学期の進

退が係っているから切実である。日記によれば、磯太郎が受けたのは、三日、七日、十一日、十五日、二十日、二十二日のようである。定期試験は一日から始まるが、この日は一の組の「理学」の試験であった。皆がよくできたのは問題が容易であったからだ、と記している。三日が自分たちの番である。

今日は乃ち予輩等三の組の理学試験なり。午前、八時自り出校す。九時自り久能先生、出頭す。受検者十二名着席す。午後〇時三十分、口答終わり、一同退席し、昼飯を喫す。一時自り筆答なり。(19)

「福岡医学校規則」の「第五章 試験規則」の「第二節 定期試験」第三十四條には、「各科問題ハ口演一題、筆答一題トシ、口演ハ時限ヲ定メス、筆答ハ二時間内ニ結了スルヲ法トス。」(句読点は筆者)とある。いわゆる口頭試問と筆記試験である。先の三日の記録から、これらの試験が実際にどのように行われたのが、よく分かる。十五日の試験は次の通りである。

今日は解剖及び組織学の試験。

口答 股関節 筋組織

筆答 唾腺及び其の造構

しかし、試験に失敗はつきもの、高木本人のことではないが、このようなこともあった。二十日の生理試問の翌日のことである。「生理学」の担当は眼科の榎本与七郎教諭であった。

朝、昨日の受検者不〔合〕格分、今日又た再受〔験〕。午前七時自

り始むる処、書生、先生自り后に到る。故を以て先生立腹して試験を為さず帰宅す。保利其の他長谷部等、相い共に先生の宅に到り再試を乞う。先生聴かず。暫時にして先生眼科診断の出勤する所なり。之れを以て予と佐伯と、又た再試を乞う。先生尚お聴かず。愈寮長の秦氏に依頼す。先生の忿怒稍解く。今日十一時自り試験し、一時に至りて漸く一人放免さる。(20)

『九州大学百年史』にも記されているように、甲種医学校に認定されてから前記四種類の試験は特に厳格を極め、留年者や退学者も多かったようであるが、当時の試験風景的一幕を「雜記載録」に見ることができ

る。ところで、同日記には医学校の出来事だけでなく、高木が住んでいた博多の町の風俗や日常のことも描かれている。正月六日には、午前十一時より旧御台場において、いわゆる消防出初め式が行われ、最後に各消防組の数名が長梯の頂上で曲芸を披露するのを、大勢の群衆と共に固唾を呑んで見ている。二月十五日には、午後一時三十分から中洲演劇場に行き、西洋から渡来した大象を見物している。生まれて初めて象を見た磯太郎は、象の姿や仕草を詳細に日記に綴っている。そして感動と共に他の日と同様、「一金三銭 象見代」、「一金壹銭 右図代」と、その日の支出額をしっかりと記録している。翌十六日は旧正月三日で、宮崎宮で行われた「玉争」(玉取祭、玉セセリ)を見に行く。日記には初めて見るその勇壮なありさまが詳述され、「愉快」であったと記している。

四月十七日には「舊曆三月節句相當」と記し、「今年、該宅は節句式を行わずして、薬院小性町自り菱餅を貰わる。之れに因り予も亦聊か饗応さる。」とある。その日は、午後四時頃に医学校の第十八舍(寮)に行き、同胞十数名と談話会を開催して帰宅する。すると、斎藤家には

「宮本保氏来館し、先生と酒宴を行う。」とある。そのあと、数名の来訪があり、淨瑠璃を語ったり詩歌を吟詠したりで、にぎやかになって酒宴は十一時まで続く。

ここに出てくる薬院小性(姓)町(現福岡市中央区薬院)は、日記に時々登場する地名だが、そこには宮本茂任(竹墩)の自宅があった。そして、来訪者の「宮本保氏」とは、宮本茂任の養嗣子である。菱餅を届けたのはおそらく彼であったであろう。五月八日の条には、斎藤夫妻が薬院の諸氏(方々)と一緒に、荒戸にある某氏の庭園で満開の藤の花を見物し、帰りに薬院に寄って、結局そこに泊まることになり、翌朝先生は学校に直行された、と記している。また、三月十八日の条に、「今日、内政(奥様)、薬院の里家(実家)に行かる。」とあることから、薬院小姓町の宮本家は斎藤夫人の実家の可能性が高い。そうだとすると、宮本家と斎藤家は姻戚関係にあったと言える。牛頸の竹田謙窓と宮本竹墩との関係、磯太郎の父親と彼らとの関係などを併せて考えていくならば、高木磯太郎が斎藤教諭宅に寄宿するに至った経緯も自ずから想像される。

これより少し前、四月十一日の土曜日に、磯太郎は牛頸に帰省する。午後二時から帰宅の途につく。村の田のあぜや畑のうねにはちょうど菜の花が開花の真最中で、磯太郎は遠望しながら「独歩閑吟」し、四時には実家に着く。しかし、この頃、所謂松方財政による農村不況が深刻化し、農家は疲弊していた。

翌十二日の日曜日、「今朝は例の都路々汁なり。」と記す。その後で、母親と一緒に土筆と芹とを摘む。町には少ないので、竹田先生の所に行って、子どもたちと一緒に前の川のほとりを歩き回ってたくさん摘み、持って帰る。昼飯を済ませて帰ろうとして、思い立って福岡に持ち帰り、斎藤先生のお土産にする。その記事の後に、磯太郎はわざわざ「註文」として次のように綴っている。

今春、居村窮迫して、実に惨哭に忍びず。貧民は草の根、或いは粥を食べ、毎日の活計殆ど算うる無し。嗚呼哀しむべし、哭くべし。予輩悠悠々閑々として光陰を渡る、実に積罪の至りなり。(21)

―「この春、我が村は困窮逼迫して、実に憂い嘆くに堪えられないほどだ。貧しい民は、草の根を食べたり粥をすすったりして、毎月の生計はほとんど立てようもない。ああ、何と哀しいことか、何と嘆かわしいことか。それなのに私はのんびんだらりと日々を過ごしている。何と罪深いことか。」―これは、福岡医学校に入学して二年目、町の暮らしに親しんだ高木磯太郎の偽らざる気持であったと思われる。後に彼が産婦人科の医師となって、福岡市などの都会の診療よりも地方での診療を主として行ったのも、こういう思いが根底にあったからかも知れない。

(三) 福岡甲種医学校の存廃問題

実はこの時期、福岡甲種医学校はある厳しい状況に置かれていた。福岡県会（議会）における医学校廃止論の動向であった。『九州大学百年史』第一巻…通史篇Ⅰ・第一編・第一章・第四節にあるように、明治十五（一八八二）年頃から、医学校に対する地方税の支出に反対する「廃止論」が通常県会に提出されるようになるが、同十七（一八八四）年までは「全廃賛成」が少数で廃棄となっていた。ところが、翌年四月の通常県会の本会議では、「医学校全廃」が議決される。これに反対した県当局の意向で、県令が内務卿の指揮を仰ぐことによって福岡医学校の存続を図り、事なきを得る。だが、最終的には明治二十一（一八八八）年三月末日を以て福岡県医学校と薬学校は廃止され、新たに県立福岡病院が発足することになる。

このように、県会において福岡甲種医学校の存廃論が激しく抗争したのが、明治十八年、まさに「雜記載録」が記された時期に重なる。高木磯太郎の日記の中には、「県会傍聴」という形でそのことが登場する。高木が県会の傍聴に行ったのは、三月二十五日、二十六日、四月四日、八日、九日のようである。先ず三月二十五日の様子である

今日、午後一時自り福岡県会を傍聴す。中学二次会議終り、之れに因り、蟻（議）長・中村耕介、義を述ぶるに医学校の意自りす。衆蟻（議）之れに従う。先ず医学校存廃之大蟻（義）を為すに、彼駁し是賛じ、論鋒滔々として尽きず。蟻（議）長、可否の起立を取る。存立の者多数にして、全廃の説、敗棄せり。嗚呼大息す、愉快々々。予儕医学校の生徒為る者、傍聴人中、過半を占め、蟻（議）員の口に課（喋）るを耳を欽てて門聴するもの、掌中に汗を握らざる者無し。然りと雖も天幸いにして之れを廃せず。今日、世間上、衛生の忽せにすべからざる事、亦推量して知るべし。(22)

県会傍聴者のうち、福岡医学校の生徒が過半数を占める中、議場では学校存立に賛成する者が多数で、全廃の説を敗ったという様子が、傍聴生徒の立場から活写されている。ところが、十日後の四月五日の新聞を見ると、事態は変化していた。その日の日記である。

今朝、歴閲する際に医学校全廃の書有り。哀しいかな、我が甲種福岡医学校にして此の議定有り。医道の隆盛、何れの日にか起こらん。本校一たび廃され塗地すれば（泥にまみえれば）、誰か之れを興こす者之れ有らん。賢明なる県令の親裁なり。若し世事の困難に因りて之れを廃毀せば、我輩同学諸子の方向、針路を失うこと、恰も胎児より

離るるの慈母の愁嘆に堪えざるが如きなり。(23)

医学校全廃に傾いた県会の議定に対する嘆きと怒りの思いが伝わってくるが、事態はまだ流動的であった。七日には、「今日の新聞紙に、医学校、再議に附せらるゝと記載す。宜しきかな。」とあり、翌八日に県会を傍聴する。続いて九日にも傍聴に行く。

午後一時自り県会聴傍す。医学校再議案、亦廢毀論者、多数を占む。(24)

福岡医学校の「全廃」がついに県会で決議されたのである。しかし、前記のように、県当局―県令―内務卿のラインで存続派は逆転に成功する。五月十六日の日記には次のように見える。

新聞紙を閲見するに、雑報中に福岡県会、内務省認可不認可云々の事件(記事)有り。予、喜悅して之れを読む。乃ち福岡県立医学校は従前の通り、壹万八十二円を以て継続するの旨、指令有り。嗚呼喜ぶべし、賀すべし、祝うべし。何ぞ雀躍せざるを得んや。内務卿の決断宜しきを得。我が福岡医学校の同胞諸生の胸の裏、如何の感覚を起こさんや。県下の庶民の幸福、洪大なりと謂うべし。(25)

福岡医学校の存続が決まったということで、医学校生徒が進路を失うこともなく、庶民の衛生、幸福が守れるということに対する喜びと祝賀の思いがよく伝わってくる文章である。

以上、福岡医学校の存廃をめぐる議会内外での攻防については、当時の新聞や九大の年史等においても詳細に伝えられてきたところであるが、医学校の生徒の視点からこの問題について記録したものは、おそらく他

には見られないもので、その意味では貴重な資料と言うことができよう。ところで、ちょうどその時期に、福岡医学校が別の意味で世間の注目を浴びるようなことが起きていた。「大森治豊らによる帝王切開手術の成功」という出来事であった。

〔註〕

(1) 「雜記載録」の原文には句読点が附されていない。訓読文は常用漢字のあるものはそれを用い、判読できなかった文字については□^(不明)とした。以下、特別な引用以外は、本文では訓読文を示し、原文はそのまま註に記すこととした。なお、訓読文のルビは筆者が施した。

(2) 「(八日) 微雨蕭然今日福岡醫學校之開校式也數十生徒着席又諸教師及校長生徒監察長等各出場自衛生課某氏出臨焉校長先今日述開校之語次而衛生課某亦有生徒奨励之弁語又校長日依例聊欲供酒肴諸君暫可待矣暫時而小使陳列酒肴一飲一吞稍為紅顏辞席而帰酒宴闌頃五期生林為二郎朗誦祝文衆拍手其声囂然響樓宇如雷嗚嗚呼熾今日之祝宴自今遠至千歲無極止矣」

(3) 『九州大学百年史』第一卷…通史篇Ⅰ・第一編・第一章を参照。

(4) 「今日故福岡醫學校一等教師大河内和氏之墓碑建立成就故醫學校発起者執行祭典式(今日鳥度大河内氏卒去之月日也) 予輩獨歩到墓間到乃祭典式已終諸人多舛焉抑氏之墓石廣大無比國中屈指之美物也(其方寸等今畧之不記載新聞紙有宜見之) 其表面書大河内和之墓裏面木戸麟所撰文鐫刻其書博多開業醫師井上侃齋氏所揮也」

(5) 「菩薩心劊子手、攘病魔護蒼生。俾君永在娑婆、百千万之蒼生、脱於膏肓之患發歡喜之聲。嗚呼彼蒼者天、何不愛吾蒼生、俾君宛然遠逝。招不至、喚不膺」(句読点は筆者)

木戸麟は、土佐中村(高知県)の出身で、医師となり、兵隊付医師となつたのち、群馬県庁に勤務する。明治十二年(一八七九)一月に衛生課兼群馬県医学校御用掛となり、近代医学発展のための基礎造りにつとめる。同年十二月に福岡県に勤務し、衛生課兼学校掛となり、同十九(一八八六)年に

衛生課長となる（丸山知良著「医師木戸麟の近代社会への貢献」『医学史雑誌』二九卷二号、一九八三）を参照した）。木戸麟撰の「大河内和之墓」の碑文は、『福岡縣誌 筑前之部』（菊池敏彦校閲、荒井周夫編輯、大道學館出版部発行、一九二九）に翻刻と訓読文が収載されている。なお、福岡の東公園内に建立された大河内和の墓碑は、今日では福岡市東区馬出三丁目の九州大病院地区（キャンパス）構内の久保記念館（現九州大学医学部耳鼻咽喉科の初代教授である久保猪之吉を記念したもの）の横に移築されている。

(6)「二十六日」故福岡醫學校二等教諭柘植氏依事故付搏職於岡山縣岡山醫學校為離別東公園一方亭矣午后四時頃衆子着席先生亦出臨先演說者數輩登壇壇血淚酸澹積為小泉悲哀慕欽恰為如離慈母心地游魚鳴禽皆愁腸實分袂之情不可盡筆舌矣飲食咬嚙忘味午后八時頃皆退散。」

(7)「二十七日」於福岡醫學校前寮、柘植先生与諸子寫真矣実比先生者可惜可慕之先醒也故寫真笑顏永久不忘矣」

(8) 柘植宗一は、岡山県医学校に赴任した後、同医学校が編入された第三高等中学校医学部（のち第三高等学校医学部）の教授となり、明治二十八年には依願退職をするが、同三十六（一九〇三）年、福岡医学校の後進に当たる京都帝国大学福岡医科大学の講師（組織学）となり、同三九年には同医科大学の助教授（解剖学）に任ぜられ、翌年九月に退任している。

(9)「今日先生足下為鞍手郡上境村某病家為往診以故午前四時起乘二人引之車松曉發家門麟々然車聲瞬間飛到中嶋橋辺嗚呼亦速哉矣今朝霜氣嚴肅至昼間甚温和恰適先生遠往之日矣也焉」

(10)「今日先生足下自鞍手郡歸舍之筈也然午後六時頃以無歸舍與與様為（カケ）負者、饅頭十五可買之約束也而午後九時頃俄然有車声之門外麟々出見之乃先生也衆驚悅先謝其勞次而酒間之談話到十二時皆就臥暮云爾」

(11)「今日先生往診佐賀県下、木山口午前十時發足午後八時歸着実可謂疾速依車夫勉厲矣」

(12)「今朝以先生之書簡使博多舊秋月藏本原田種忠方蓋今日先生応同氏之託往診遠方之筈處先生之親族大宰村西高辻宅某病氣以故先生為謝背約束遺書簡於原田氏也午前十時頃先生乘二人引之車駁々乎向大宰府村行矣」

(13)「此日先生應裁判所命令為屍體檢查與榎本医学士及秦某等行遠賀郡伊岐須村」

(14)「今夜九時三十分先生自遠賀表歸宅矣其言曰石炭鉱山囚人粗暴者歐殺同輩剖檢其腦部中腦膜動脈破裂頭頸骨鱗狀部兩半分擊裂其頭蓋骨中所々有裂間又見腦面起溢血且其以動脈破裂惹起急死也矣」

(15)「八日」晴天今朝醫學學校教師等於平尾山兎狩相催處大森先生始外科掛員者以有大治療止其他諸□彼此差支有之悉皆休止」

(16)「博多片土居称名寺如例月私立演說會衛生談也自午後一時始予傍聽聽衆無慮百餘名辨士統々昇演題種々奇々妙々雄辯三寸舌笑實揺天地聽衆感服就中熊谷齋藤兩夫子最如好」

(17)「午前第九時出校今日榎本教諭於解剖室召集諸生（乃チ現在ノ三期生丈）切割家兎喉頭部現出迷走神經以電氣刺戟之試驗心臟鼓動正午十二時終」

(18)「今日於医学校解剖局為筋及靱帶学研究以柘植先生之指揮與同胞諸氏相共揮刀解剖死体下脚浸潤垂兒箇保兒者見處多少非無益利矣」

(19)「今日乃予輩等三之組理學試驗也午前自八時出校自九時久能先生出頭受檢者十二名着席午後〇時三十分口答終一同退席喫屋飯自一時筆答」

(20)「朝昨日受檢者不格分今日又再受自午前七時始處書生自先生后到以故先生立腹不為而歸宅矣保利其他長谷部等相共到先生宅乞再試先生不聽暫時而先生眼科診斷所出勤以之予与佐伯又乞再試先生尚不聽愈依頼寮長秦氏先生忿怒稍解今日自十一時試驗至一時漸一人放免」

(21)「今春居村窮迫實不忍慘哭貧民食草根或粥每日活計殆無算嗚呼可哀可哭予輩悠々閑々渡光陰實積罪之至也」

(22)「今日自午後一時傍聽於福岡縣會中學二次會議終因之蟻長中村耕介述義自醫學校意衆蟻從之先為醫學校存廢之大蟻彼駁是贊論鋒滔々不尽蟻長取可否起立存立者多數而全廢說敗棄嗚呼大息愉快々々予儕醫學校為生徒者傍聽人中占過半蟻員之謀口欽耳門聽掌中無不握汗者雖然天幸而不廢之今日世間上衛生之不可忽亦可推量知矣」

(23)「今朝歷閱際有醫學校全廢書哀哉我甲種福岡醫學校而有此議定焉醫道隆盛何日起本校一廢塗地誰興之者之有賢明縣令之親裁也若因世事困難廢毀之我輩

同學諸子之方向失針路恰如離胎兒慈母不堪愁嘆也」

(24) 「自午後一時縣會聽傍醫學校再議案亦廢毀論者占多数」

(25) 「聞見新聞紙雜報中有福岡縣會內務省認可不認可云之事件予喜悅読之乃福岡縣立醫學校從前之通以壹万八十二円継続之旨有指令嗚呼可喜可賀可祝何得不雀躍內務卿之決斷得宜我福岡醫學校同胞諸生之胸裏起如何之感覺乎縣下庶民之幸福可謂洪大矣」

五 明治十八年の帝王切開手術

(一) 東洋未聞の大施術

九州大学医学部、さらには九州大学の創設者の一人に挙げられる人物が、大森治豊はるとよ(一八五二～一九二二)である。大森治豊は、明治十二(一八七九)年十一月に東京大学を卒業して医学士の称号を得、十二月に県立福岡医学校の教師、同十四年に外科学教授担当、同十七年に福岡医学校附属病院兼務となる。同十八年八月二十九日付けで福岡医学校長兼外科部長、同二十一年に福岡病院長になり、同二十四年には医学博士の学位を授けられる。同三十六(一九〇三)年四月に京都帝国大学福岡医科大学長兼附属医院長となり、同四十三年三月に退官し、同四十四年五月に九州帝国大学名誉教授の称号(第一号)を授けられる。同四十五年二月十九日に福岡で病没する。

大森没後の五月に発行された『故大森治豊先生記念録』(『福岡医科大学雑誌』第五卷第三号附録、九州帝国大学医科大学雑誌部発行、一九一二)の巻頭に掲げられた九州帝国大学医科大学の久保猪之吉教授の「大森博士を弔ふ詞」には、「博士を有名ならしめたるは、當時外科学の進歩に先ちて種々の困難なる手術を決行し、好成績を収めたるに在

り。」として、いくつかの種類の手術例を挙げ、「日本に於て斬新なる手術にして卒先之を行ひ」とするが、その最初に挙げているのが「帝王切開手術」である。この手術に関して、『九州大学五十年史・通史』(九州大学創立五十周年記念会、一九六七)には次のように記されている。文中に池田とあるのは、産科婦人科の池田陽一教諭のことである。

なかんずく、同校の名を高からしめたのはわが国で最初といわれる帝王切開手術に大森と池田が成功したことであった。十八年四月二十八日、一妊婦が膣の瘢痕狭窄のため出産が困難になり、附属病院に運び込まれ、これに対してポルロー(Porro)氏式帝王切開手術を行い、母子共に良好な経過をたどった。これは、『中外医事新報』に報告され、また『伯林臨床週報』にも報告された。一般社会では地元の新報はもとより、『東京日日新聞』(十八年五月十二日)にも報ぜられて、世人を驚倒させた。(一)

ここで、この手術の報道、公表について時系列的に整理して見てみることにする(本稿附録資料(3)大森治豊・池田陽一による「ポルロー式國帝截開術」関係年表を参照)。一番早いのは、明治十八年五月六日の「福岡日日新聞」で、「東洋未聞の大施術(某氏の報道)」という見出しで、「福岡県福岡區博多中島町平民幸田某の妻歌(當二十三年)」の当該手術のことを報じている(句読点は筆者)。

同十七年六月、受胎の兆あり。爾后漸次腹部膨大し、妊娠たる事疑なきを以て、預め込とても分娩する能ざるを慮り、福岡醫醫院附属病院に治を仰ぐ。依て該院に於てハ、院長大森治豊氏及婦人科醫長池田陽一等の諸氏にて、國帝切開術を行へり。

続いて、当該手術の歴史について説明をした上で、生きている母胎においてこの手術を行い、母子の健全を保存するのは、はなはだ困難かつ危険であつて、ドイツではこの四年間に行われた手術で百人中五十六人が死亡していると述べている。そして、「如此至危至難なる大手術たるを以て東洋諸國に於て此術を施せしハ未だ曾て聞かざる處なり」と、この記事を結んでいる。「東洋未聞の大手術」であることを強調したものである。

次は、五月十二日の「東京日日新聞」である。これも「東洋未聞の大手術」の見出しで書かれているが、要するに「福岡日日新聞」の記事をそのままの形で転用したものである。そして、最後に「云々と福岡新聞に見ゆ然れども妊婦歌子は二者何れの法に因りしかまた手術の結末如何と知るによしなけれど姑く記して後報を待つ」と結んでいる。「二者何れの法に因りしか」とあるのは、「レーベルト」式、「ポーロー」式のどちらによるのかは分らないということである。また、手術後の経過・結果についても分らないとしているが、実はこれ以前に「福岡日日新聞」は続報を掲載していた。五月八日の新聞に「大手術母子安全なり」という見出しで次のように記している（句読点は筆者）。

博多中島町幸田某の妻ウタ（二十三年）の分娩に付き、福岡醫学校附属院に於て大手術の事は、一昨日の紙上に報道せし通り。彼の國帝切開術とて、腹壁を切りひらいて子宮壁を開き、胎兒を分娩せしめたる所の小兒ハ、通常の分娩兒と同様、強健にして既に病院を出で、乳母の手にて養育せられ居り。又たその母親ウタも、追々快方して、頃日より既に室内運動位は能く出来、擔當醫の話に依れば、今より二週間も立ちなば、退院するを得べきだけの健康に復するならんとの事なり。

これによれば、手術は成功し、生まれた子は元気に退院して乳母の手で養育されており、母親の方も回復して、あと二週間もすれば退院できる状態になるということである。この記事で注目すべきことは、「担当医の話に依れば」と、名前こそ記していないが、初めて担当医の発言が登場していることである。

以上のように、両新聞共に「東洋未聞の大手術」と報じているが⁽²⁾、問題はこの手術がいつ行われたかということについては全く触れていないことである。しかも、当初は「某氏の報道」とあつて、情報源を曖昧にしていることである。五月八日の記事にしても、あくまでも伝聞としている。つまり、手術の内容や、その経過などに関して、当該手術を行った福岡甲種医学校の執刀者たちによる正式な発表によるものではないということである。では公式な発表はいつどのような形でなされたのか。

国内で最初に公表されたのは、明治十八年十二月十九日発行の『東京醫事新誌』（東京醫事新誌局発行、週刊）第四百三号である。巻頭の「官令」に続く「中外新説」というコーナーの最初に、「ポルロー氏帝王開切術」という題目を掲げ、「在福岡」と冠して「醫學士 大森治豊」と「醫學士 池田陽一」との共述としている。最初に、編集者による前書きが次のように記されている。

本篇ハ兩學士カ本年四月廿八日ヲ以テ手術シ之ヲ独逸國伯林醫事週誌ニ寄稿セラレ同誌ハ本年十月十二日四十一號ニ之ヲ掲載セリ編者今之ヲ譯出シテ諸君ノ一覽ニ供ス

この雑誌に続いて出されたのは、明治十九年一月十日発行の『中外醫

事新報」(中外醫事新報社、第一三九号)である。「實驗記事」というコーナーで、「ポルロー氏國帝切開術」という題目を掲げ、大森、池田の「共述」としている。冒頭の編集者による前書きは次の通りである。

本稿ハ右両学士ノ先頃福岡病院ニ於テ實驗セラレシモノニ係リ
一千八百八十五年十月十二日刊行伯林醫事週誌(四十號)ノ別紙ニ登
録セシモノナリ今回大森醫學士ヨリ其ノ原文ノ寄贈ヲ得タレバ左ニ譯
載シテ讀者ノ一覽ニ供ス

ここでは、原文を大森医学士から直接寄贈されたと明記している。以上の両誌の記事は、「ポルロー氏帝王切開術」と「ポルロー氏國帝切開術」とやや訳語の違いはあるが、いずれも大森、池田共述のドイツ語による文章を日本語に訳出したものである。両誌は訳文の表現に違いはあっても、内容的には大差はないようである。ここから分かるのは、執刀医である大森、池田の両医学士が共著として執筆し、ドイツの医学専門学術誌に投稿して、ベルリンで刊行されたのが一八八五年十月十二日であり、これが当該手術の公式発表日ということになる。もう一つ明確になったのは、当該手術が福岡病院で行われたのは、同年の四月二十八日であったということである。ところで、両誌が「伯林醫事週誌」と訳しているのは、正式には次の誌名である。

Berliner Klinische Wochenschrift (伯林(ベルリン)臨床週報)

両医学士による報告論文が掲載されたのは、この雑誌の一八八五年の第四十一号であり、論文の題名は、*Eine Sectio caesarea nach Porro.* (ポロー式帝王切開術について)となっている⁽³⁾。手術が行われたのが

「四月二十八日」であったということは、このドイツ語論文で確認できる。となると、五月六日の「福岡日日新聞」の発表はその一週間後ということになり、極めて早い時期の情報の取得とその発表ということになる。しかも、この新聞報道には手術が行われた月日が全く記されていないし情報源も記されていないということが疑問として残る。また、医学校として報道機関に対して正式な発表が行われていない理由も不明である。いくつかの謎が残る。

(二)「雜記載録」の記録

さて、「東洋未聞の大施術」と評された手術の報道や公表に関してはいくつか不明な点が残っているが、そうした点などを考察するに当たって、実に参加になる資料が出現したと言える。高木磯太郎の「雜記載録」である。以下に見ていくことにする。この手術の話が出てくるのは、「雜記載録」の三月二十九日の条で、この日は日曜日で医学校の休暇日であった。次のような文章が書かれている。重要なので原漢文と訓読文の両方を示すことにする。

昨日自午前十時大森池田齋藤三先生療產婦矣蓋該婦人者中寫町緒田
卷屋之人也腔口狹隘而不能降胎兒於是各先生設置割破產婦之臍部上
二寸及恥骨縫際迄、取出子宮及卵巢以後幾回雖為交接決而不妊孥也而
其子宮內胎兒健然生活焉又其妊婦依然存命病家之喜悅不及言各國手
生之胸中亦其欣喜可想也冀以后兩母子共全快為壯健本校之名譽益國內
仁術隆盛在近可悅くくく右記概畧而已

昨日、午前十時^よ自り、大森、池田、齋藤の三先生、產婦を療^よす。蓋^{けだ}

し該婦人なる者は、中寫町の緒田巻屋の人なり。膣口狹隘にして胎児を降ろす能わず。是に於いて各先生、装置を設け産婦の臍部（へそ）上二寸を割破し、恥骨縫際迄に及び、子宮及び卵巢を取り出す。以後幾回交接を為すと雖も決して孳を妊まざるなり。而して其の子宮内の胎児は健然と生活す。又た其の妊婦も依然として存命す。病家（患者家族）の喜悅すること言うに及ばず。各国手（名医）先生の胸中、亦其の欣喜うべきなり。以后両母子共に全快し壮健為るを冀う。本校の名譽がること益、国内の仁術隆盛なること近きに在り。悦ぶべし、悦ぶべし、悦ぶべし、悦ぶべし。右、概略を記すのみ。

この文章は、「昨日」すなわち三月二十八日（土曜日）のことを記したものである。大森治豊、池田陽一、齋藤武英の三人の教諭によつてなされた手術は、言うまでもなく、上記ドイツ語で正式に公表された「ポロ式帝王切開術」に他ならない。「福岡日日新聞」にも「院長大森治豊氏及婦人科醫長池田陽一氏等の諸氏にて」とあるように、手術は大森池田の両氏だけでなされたわけではなく、そのほかに数名の医師ないし医員や看護婦が携わったと想像できる。高木磯太郎の記録によれば、外科専門の齋藤武英教諭もその一人であり、二人の執刀医の助手のような役割を果たしたと思われる。

高木磯太郎は齋藤教諭の家に寄宿していたわけであるから、手術の後に齋藤からその時の一部始終を聞いたと思われる。施術を受けた妊婦の全快と生まれ出た新しい命の壮健とを祈る気持と共に、学校の名譽がかり国内の仁術（医学）が隆盛になることを願う気持が、この文章には「悦ぶべし」の連呼とともによく表現されている。

この手術に関連した高木磯太郎の証言は、実はこれにとどまらない。十日余り経った、四月八日の条である。その日は、朝から榎本與七郎教

諭の解剖試験があり、午後からは県会の傍聴に出かけている。その夜のことである。「先生」とはもちろん齋藤教諭を指す。

夜食の時、先生と対坐して談話す。突然、大森教師入り来りて先生と対酌す。談話、先日の婦人の治術、腹部切開子宮摘出の事に及んで、優笑高談し、心中自り快樂に在るが如し。侍坐の傍人予輩も亦多少感無きを免れず。東洋未だ曾て有らざるの大治術なり。先生等相い語りて曰く、今度の治術は実に珍奇なり。故に速やかに西洋の諸大家に報ずべし。我が日本国中には何ぞ報導するに及ばんや、と。其の他の諸話あり、十時に至りて大森教諭、人力車に乗りて帰宅す。⁽⁴⁾

これは、明らかに十日余り前の手術について、大森教諭と齋藤教諭とが語り合っている様子を、側らにいた高木磯太郎があとで記録したものである。大森らが発表した報告論文には、術後六日目に最初の繃帯交換を行い、さらに日々適切な処置を行って、患者が日増しに回復していった様子が記録されているが、この日の大森教諭と齋藤教諭とが、「優笑高談」して喜びに浸っているのは、術後十日が過ぎて、手術の成功が確信できたということに他ならないであろう。

もう一つ興味深いことは、両教諭が、この手術は極めて稀なものであるから、速やかに西洋の専門家にこのことを報告すべきで、その前に国内向けの報道はする必要がない、と語り合っていることである。前述のように、国内の専門誌や報道媒体ではなく、ドイツの専門誌に直接投稿することを最優先したことが、この話からも十分に理解できる。以上の大森と齋藤との「後日談」の内容は、「雜記載録」以外にはどこにも見ることのできない貴重な発言記録と言える。

また、さらにこの手術に関連する話が高木の日記には残されている。

五月二十四日の記事である。この日は日曜日であった。

今日、中寫町の緒田巻屋の婦人、入院療治し、此の度全癒す。故を以て東公園の官宅に於いて回祝いの筵えんを設く。医学校教諭の大森、熊谷、池田、斎藤、並びに医員の青木、中寫の諸氏、招待さる。⁽⁵⁾

手術日から二ヶ月近くが経った五月二十四日に、緒田巻屋の婦人の快氣祝いの宴席が設けられ、大森、池田以下の福岡甲種医学校の関係者六名が招待されたということである。このように、晩春三月二十八日の緊迫した手術室の様子から、十一日後の夜の後日談、そして初夏の祝宴に至るまでの一連のできごとを、高木磯太郎は自分の日記の中に書きとどめた。彼はその後、施術者の一人である池田陽一に師事し、産科婦人科の医師となるが、この「東洋未曾有の大治術」が、あるいは個人的にも大きな契機となったのかもしれない。

(三) 施術日の謎

さて、改めて「雜記載録」の記述を見ると、先に疑問としたいいくつかの点が解明されていく。先ず、施術者をはじめとする福岡甲種医学校の当事者による正式発表が、ドイツ語による発表までおそろくなかったであろうことの謎が解ける。四月八日の日記に見えるように、西洋の医学者たちに報告して承認されることを最優先したということである。

次は新聞報道との関係である。日記によれば、福岡甲種医学校における大森、池田らによる画期的な手術は、明治十八年三月二十八日に行われたということが分かる。その後の四月八日、五月二十四日とつながる記事も、間隔的に無理がないと見られる。かりに四月二十八日の手術で

あれば、四月八日の記事はあり得ない話であるし、五月二十四日の快氣祝いは余りにも早すぎるということになる。三月二十八日の手術であれば、五月六日に地元新聞に報道がなされても不思議はない。その間に、病院関係者が誰かから情報が伝わったことは十分に考えられる。五月二十四日の快氣祝いも時期的に納得できる。

ここで想起したい資料がある。この手術のことを最初に報道した「福岡日日新聞」の明治十八年五月六日版の記事である。幸田歌について、「同十七年六月受胎の兆あり爾后漸次腹部膨大し妊娠たる事疑なきを以て」と、かなり詳細な記述がなされている。前年六月に「受胎の兆(兆候)」が見られたというからには、六月で妊娠一ヶ月以上は経っていたと考えられる。仮に六月を妊娠一ヶ月目とすると、十ヶ月目は同十八年三月ということになる。三月が妊娠十ヶ月目であったということは、ほぼまちがいないであろう。そうであれば、「雜記載録」に記す「三月二十八日」の手術ということは、十分納得がいく。逆に、もし「四月二十八日」ということになると、妊娠十一ヶ月を過ぎていたことになり、いささか疑問を差し挟まざるを得ない。

しかし、執刀医である両医師のドイツ語による報告書には、施術日は「四月二十八日」と記されていた。当事者による正式記録であるから、それ以後、この施術日について異なる発言をしている者はもちろん誰もいない⁽⁶⁾。だが、日にちは同じ二十八日であるが、ちょうど一ヶ月遅くなっている。なぜそのように記載したのであるうか。

そのことに関しては、両者を始め福岡甲種医学校の人々も、その他の関係者たちも何も書き残していないことから、現在のところその理由は分からないと言わざるを得ない。しかし、どのような理由があったにせよ、高木のこの日記を読む限りは、手術自体は明治十八(一八八五)年三月二十八日に行われたと考えざるを得ない。一箇月ずれている理由やその

事情などについては、今後の研究に待つこととしたい。

すでに見てきたように、「雜記載録」は個人的な記録ではあるが、日付け、曜日、天候、事項の記述において、極めて正確なものと考えられる。かりにも高木磯太郎に何らかの理由があつてわざわざ書き換えたとはとうてい考えられない。本稿は現在見ることが可能な「高木資料」の全体を精査し、さらに彼の生涯の足跡を可能な限り跡付けた上で、「雜記載録」の資料としての信憑性に確信を持つに至ったものである。

本節を終る前に、従来ほとんど取りあげられることがなかった、この帝王切開手術において摘出された「子宮及び卵巣」について触れておきたい。手術が行われてから二年後、明治二十（一八八七）年一月十二日に、当時の文部大臣であつた森有礼（一八四七―一八八九）が福岡各校巡視を行った際に、福岡医学校の施術場に備えてあつた子宮アルコーン漬けを熱心に見学した、とのことだが、同月十四日の「福岡日日新聞」に次のように記述されている（句読点は筆者）。

施術場に備へある国帝截開術にて昨年^マ施療せし中島町幸田某の妻か子宮のアルコーン漬を熟覧ありて、痛く称讃され、其の母子ハ猶ほ無事安穩なるかとの問ひに、大森医学士は今猶ほ壮健なりと申されしに、同大臣は斯く迄医術の進歩せしハ、実に国家のために慶す可きの至りなり、と深く称讃されしと云ふ。

森文部大臣は、国家のために慶賀すべき医学の進歩を示すものとして、この国帝截開術の成果に対して賛辞を贈つたのである。

また、その翌月二月十日から三月三十一日まで、福岡市春吉村岡新地で開催された「第五回九州冲縄聯合共進會」（博覧会）に併せて、二月二十日から三月三十一日までの四十日間、博多崇福寺において「福岡博

物展覧會」が開催された。この展覧会場の第二区第二室に出品された「病院出品」の「第九号」が、「國帝切開術ノ際扶出シタル子宮及卵巣（大瓶入）」である（明治二十年四月十八日内務省交付「福岡博物展覧會物品初編目錄」）。

以上のことは、明治十八年における大森・池田両医学士による帝王切開手術が、いかに社会的にも注目された出来事であつたかを物語るものと言えよう。ただし、森文部大臣が賛嘆し、福岡博物展覧会で衆目の視るところとなつた標本が、その後どのような形で保管されあるいは展示されたかということは、現在のところ不明であり、現存するかどうかは未確認である。

〔註〕

（1）『九州大学五十年史・通史』には「わが国で最初といわれる帝王切開手術」とあり、また、それより前、宇留野勝弥著『医傑大森先生の生涯』（一九六一）の表紙には、表題の横に「九州大学創設者」「帝王切開の創始者」とある。しかし、今日では幕末の嘉永五（一八五二）年に既に帝王切開手術が行われたことが明らかになっている。古賀康八郎氏は、「池田陽一先生に就いて」（『産科と婦人科』第二十六巻第八号、株式会社診断と治療社発行、一九五九）の中で、次のように述べている。「斯くて先生は、本邦に於ける帝王切開術の紹介者として自他共に許して居たのであるが、近年に至り図らずも、嘉永五年五月埼玉県の伊古田純道なる人によって同様の手術が行われた事実が明らかとなり医学界を驚かした。しかし、本邦の成功並びにその報告により以後現今吾々が日常施行し得る産婦人科諸手術々式が発達し来たった事を想う時、本邦近代医学において帝王切開術として紹介した功績は依然先生が負うべきものであらう。」また、松本明知氏は、『麻醉科学のバイオニアたち―麻醉科学史研究序説―』（克誠堂出版株式会社、一九八三）所収「本邦初の全身麻醉下帝王切開術」の中で、「従来、全身麻醉下帝王切開術は、

明治十八年（一八八五）に大森、池田が福岡で施行したのが最初とされて来た。しかし筆者の調査によって、実際にはそれよりも六年前の明治十二年（一八七九）十二月二十五日に横浜で、二十六歳のオランダ人の産婦に対して外人医師ホイレル、エルドリッツら四人に、エルドリッツの弟子六角謙吉が参加して施行されたのが、本邦の嚆矢であろう。」と述べている。なお、前掲『九州大学百年史』通史編Ⅰでは、「なお大森と池田は、一八八五年に帝王切開手術に成功し、福岡医学校の名声を高めることに貢献している。」と記されている。

(2) 両新聞のほかに、医事新聞社（東京）発行の「医事新聞」第百五十八号（明治十八年五月二十五日）にも、「國帝切開術」の見出しで記事が掲載されているが、これは「福岡日日新聞」の五月六日と同八日の記事を併せた内容である。ただ、一般紙ではなく、医事専門誌に掲載されたのはこれが最初と思われる。

(3) この雑誌に関しては、九州大学附属図書館医学図書館所蔵本を閲覧参照した。なお、当該論文の掲載誌は第四十一号であり、『中外醫事新報』に「四十号」とあるのは誤りであろう。

(4) 「夜食時与先生對坐談話突然大森教師入來與先生對酌談語及於先日婦人治術腹部切開子宮摘出事優笑高談自心中如在快樂侍坐傍人予輩亦多少不免無感東洋未曾有之大治術也先生等相語曰今度之治術実珍奇故速可報西洋諸大家矣我日本國中何及報導乎哉其他諸話至十時大森教諭乘人力車帰宅」

(5) 「今日中島町緒田卷屋婦人入院療治此度全癒以故於東公園官宅設回起祝之筵醫學校教諭大森熊谷池田齋藤並醫員青木中島諸氏招待」

(6) 手術から九年近く経つが、池田陽一が『杏林之葉』第六卷第二号及び同第六卷第三号（明治二十七年（一九一四）年、二月、三月）に寄稿した「ポルロー氏國帝切開術ヲ施シテ母子共ニ安全ナリシ再度ノ治驗」においても、当該手術は「四月二十八日」に行われたと記されている。また、昭和七（一九三二）年十一月二十三日に、福岡千代松原の崇福寺で執行された「元県立福岡医学校関係者物故者追弔法会」において、同会の委員長であった池田陽一は、「旧福岡医学校及病院教職員の追弔会に於て」と題して追憶所

感を述べたが、その中でも「明治十八年四月廿八日の所謂國帝切開術」と述べている（『福岡醫學學校關係物故者追弔會記事』、古賀得四郎著・発行、一九三三）。

六 医学校卒業以後の高木磯太郎

(一) 福岡病院医員の頃

高木磯太郎は、明治二十一（一八八八）年一月に福岡甲種医学校の最終試験を受けて合格し、卒業と同時に医師開業免許を取得する。満二十三歳の春であった。ところが、福岡県は福岡甲種医学校をこの年の三月三十一日に閉校とし、四月一日に県立福岡病院を発足させる⁽¹⁾。

従って、高木は福岡甲種医学校の最後の卒業生の一人ということになる。同年四月十三日の「福岡日日新聞」によれば、四月十二日に旧福岡医学校医学生二十余名と旧福岡薬学校生徒にして卒業せし諸氏に対して、卒業証書が授与される。さらに、同日、旧医学校の卒業生諸氏は病院の職員諸氏を東公園の一方亭に招待し饗応する。また、その前に卒業生らは十日から十一日まで、福岡病院で同窓会を催し、治療の経験等につき相互に研究を行う。そして、十一日には中洲共進館で写真師三苦を雇い教師と生徒一同の集合写真の撮影を行い、その夜には東公園の一方亭において懇親宴会を開催している⁽²⁾。

さて、新たな病院内には内科部・外科部・眼科部・婦人科産科小児科部の四部が置かれる。病院の主要職員は福岡甲種医学校時代をほぼ継承した。大森治豊が病院長兼外科部長を、熊谷玄旦が副院長兼内科部長を、榎本与七郎が眼科部長を、池田陽一が婦人科産科小児科部長をそれぞれ務める。外科部と内科部とは副部長が置かれたほか、各部とも医員が

配置された。

高木磯太郎は、明治二十六（一八九三）年九月八日より県立福岡病院の産科・婦人科部の医員を務めることになる。卒業後五年半が経過しているが、この間の活動については定かでない。ただ、唯一手がかりとなるものが「高木資料」の中にある。二冊の翻訳本の書写である。「産科訓典」と「華氏産科摘要」（巻上・巻下）である。前者は同年四月三日から十二日までに、後者は五月十日までに書写がなされている。書写がなされた場所として、前者には「圖新堂 高木庫」とあり、後者には「恩師池田陽一先生方寄寓中於北窓之下執筆」とある。後者から分かるのは、当時彼は池田陽一宅に寄寓していたということである。この両書は産科学の専門書の翻訳本であり、福岡病院の医員になる前に池田陽一のもとで産科・婦人科学の研修に励んでいたと思われる。

ところで、明治二十二（一八八九）年に福岡県の医師団体である「玄洋医学会」が発足する。医師の権利と義務とに関わる医師会組織と学理と実験との研究を目的とした学会組織という二つの機能を兼ねたものであった。六月十八日には機関誌である『杏林之葉』（以下、本節では「同誌」と略称する）を創刊する³⁾。会の本部は県立福岡病院内に、支部は福岡市始め県下二十市郡に置かれた。会員は福岡県居住の医師を正会員とした。同年十月三十一日発行の同誌第一巻第四号掲載の「会員動静」欄に、「入会者」の一人として「御笠郡 高木磯太郎」と見える。卒業後二年目であったが、彼が執筆者として同誌に登場するのは、五年後の同二十七（一八九四）年のことである。同年一月刊行の第六巻第一号に「第四回、五十回卵巣腫瘍實驗」という報告を寄稿する。続いて二月から五月、七月から十月にかけて、同巻第二号から第五号、第七号から第十号に、「第四回、五十回卵巣腫瘍截除術實驗」という標題で連載される。この論文について、高木磯太郎は同巻第一号に次のような前書

きを記している（句読点やカギ括弧は筆者）。

我福岡病院ニ於テ大森博士、池田博士ノ施行セル卵巣腫瘍截除術ノ報告百五十回ハ、載セテ『杏林之葉』第五巻第七号迄ニアリ。爾來該手術ヲ行フコト、又已ニ五十回ニ垂ントス。依テ完全ノ報告ハ術者他日ノ報告ニ譲リ、茲ニハ術者ノ許可ヲ得テ、假リニ第四回、五十回卵巣腫瘍實驗ト題シ、前番號ヲ繼續シテ逐次其梗概ヲ掲載シ、以テ會員諸君ノ一閱ニ供セント欲ス。

以上に述べられている経緯をもとにして、関連報告文を以下に列記する。

第二巻第六号（一八九〇、七）

「五十回卵巣手術實驗」大森治豊・池田陽一報、澤邊祐尚訳
第二巻第七号（一八九〇、八）

「卵巣腫瘍五十件ノ報告（承前）」同上

第二巻第八号（一八九〇、九）

「卵巣腫瘍手術五十件ノ報告（承前）」

大森治豊・池田陽一報、岡田和一郎訳

第二巻第九号（一八九〇、一〇）

「第二、五十回卵巣腫瘍實驗」樋口宗次郎

第二巻第十号（一八九〇、一一）

「第二、五十回卵巣腫瘍實驗（前号ノ続）」樋口宗次郎

第三巻第十号（一八九一、一二）

「第二、五十回卵巣腫瘍實驗」池田陽一閱、岩永左右一稿

第四巻第三号（一八九二、三）

「第二ノ五十回卵巣腫瘍實驗」同上

第四卷第十一号（一八九二、一二）

「第二、五十回卵巢囊腫實驗」東原新稿

第五卷第五号（一八九三、五）

「百回卵巢囊腫截除術報告（續）」大森治豊・池田陽一共述

第五卷第六号（一八九三、六）

「百回卵巢囊腫截除術第二報告（續）」同上

第五卷第七号（一八九三、七）

「百回卵巢囊腫截除術第二報告（續）」同上

第六卷第一号（一八九四、一）

「第四回、五十回卵巢囊腫實驗」高木磯太郎記

第二卷第六号に掲載されている大森・池田両医学士の言によれば、この報告はその年の一月に『伯林毎週医報』第九号に掲載されたもので、実は三年前（一八八七）に郵送したものであった。一八八五年五月から一八八七年の始めに至るまでの間に、兩人が施行した腹壁切開術は七十回に及んだが、そのうちの五十回は卵巢疾病に係るものであった。三号にわたる報告は、その五十回の卵巢手術に関するものであり、寄稿したドイツ語文を翻訳したものであった。それに続く一連の報告のうち、執筆を行った樋口宗次郎、岩永左右一、東原新の諸氏、並びに高木を含めた四人は、いずれも福岡病院の医員（産科・婦人科）であった。それぞれの任期は以下の通りである⁽⁴⁾。

樋口宗次郎 明治二十一（一八八八）年四月～二十三年十月

岩永左右一 明治二十四（一八九一）年四月～同年七月

東原 新 明治二十五（一八九二）年七月～同二十九年九月

高木磯太郎 明治二十六（一八九三）年九月～同二十八年六月

つまり、福岡病院で実施された「卵巢囊腫截除術」についての報告は、術者である大森治豊と池田陽一との共述に続いて、産科・婦人科の医員が術者の許可を得て、順次報告を行ったものであることが分かる。ところで、高木磯太郎の報告は第六卷第一号（一月）から同卷第十号（十月）まで連載されるが、同卷第六号（六月）だけにはこの連載はなく、彼自身による別の報告が掲載されている。「代償性膀胱出血ノ一例」という報告である。興味深いのは、標題の次行の「高木磯太郎述」の上部に、「福岡病院婦人科池田醫學士ノ「クリニック」ニ於テ」とわざわざ記していることである。何か特別な意味があったのであろうか。

三ヶ月後、同誌の第六卷第九号（九月）の「雑報」には、「池田醫學士の送別會及同學士の閲歴事業」という文が掲載されている。池田陽一（一八五八～一九三七）は佐賀藩医の子として生まれ、東京外国語学校でドイツ語を専攻したのち東大医学部に進み、明治十六（一八八三）年五月に卒業して、同年十二月に福岡医学校一等教諭になる。同二十一年四月から、県立福岡病院の婦人科産科小児科部長を務める。その間、明治十八年に、大森治豊と共に帝王切開手術に成功したことは前述の通りである。池田はかねてよりドイツ留学を切望しており、そのための資金作りを兼ねて、郷里の佐賀で私立病院を開設することにしようである。明治二十七（一八九四）年九月十五日に集成館で開催された送別会には、各界の知名士など一二〇余名が参集し、発起人総代には福岡市長磯野七平がなったようである。そして、十一月四日には、佐賀市水ヶ江町で「池田私立病院」の開院式が挙行されている⁽⁵⁾。

つまり、『杏林之葉』第六卷第六号に「代償性膀胱出血ノ一例」が掲載された時点で、すでに池田陽一はまもなく福岡病院を去ることになっており、高木磯太郎は初めて個人による報告文を投稿したということで、長年にわたる池田の学恩に対する感謝の思いと共に惜別の情をもって、

「福岡病院婦人科池田醫學士ノ「クリニック」ニ於テ」と記したのではないだろうか。池田陽一は、福岡医学校、福岡甲種医学校、福岡病院での十年以上にわたる数々の業績を携えて、自ら開設した佐賀の私立病院に移る。そして、高木磯太郎も翌年福岡病院を去ることになる。翌年六月三十日発行の同誌第七卷第六号の「雑報」欄に、「婦人科醫員の交迭」という見出しで次のような文章が載っている。

前醫員高木磯太郎氏ハ先きに本院を辭して自宅開業せらるるを以て職員一同よりは送別の宴を福村樓に開きたりしが其後任としては第五高等學校醫學部卒業生八木猛雄氏近日赴任したり

「県立福岡病院医員等名簿」によれば、八木猛雄氏の着任は同年六月二十日付であったようだから、高木の辞任は五月末かあるいは六月初め頃であったと思われる。同誌「雑報」記事によれば、辞任の理由は「自宅開業」ということであった。その後しばらくして、彼は結婚して家庭を持つことになる。なお、池田が福岡病院を去った明治二十七年の六月二十一日に、宮本茂任（竹墩）が享年七十四で亡くなっている。高木磯太郎にとって、その存在が大きなものであったことは確かであろう。

(二) 開業と家族

「高木資料」所収の講義ノートの中に、特異な一冊がある。表紙には、『岡部先生口授新式男女禮法畧記』と記されている。その他の講義ノートは、『内科通論』、『産科学』、『診断学』のようにすべて医学に関する内容であるが、この一冊は男女の婚礼に関する内容である。本文には、標題として「新式男女禮法手續覺」とあり、次のように記している（句

読点は筆者）。

夫レ禮ハ敬ヲ以テ本トナス。故ニ人生一日モ不可缺ノ者ハ禮ニ在リ。茲ヲ以テ畏クモ明治ノ聖天子陛下、国会開設前、明治二十有二年ノ春、御内諭アリテ、宮内省及内務省文部省ノ三省ニ懇々タル仰セ在リタリ。故ニ此三省モ、聖諭ノ有リ難キヲ深ク感銘シテ、先ツ諸禮ノ主、小笠原及武田邊見ノ諸禮家相議シテ、左ノ新式ノ禮法ヲ、先ツ東京府女子華族學校ニ教授シタルニ、天皇皇后両陛下共ニ、叡感斜ナラズ、之ヲ順次皇國一般ニ瀾及セントノ仰セモ之レ有リタリ。

以下、二十二箇条にわたって書かれているが、最後の四条は次の通りである。

- 一 結婚式 雄蝶雌蝶折り様結附ケ并ニ舞様ノコト
- 一 婿嫁并ニ媒酌人土器戴キ様、且ツ媒酌人婿嫁ニ進メ様ノコト
- 一 三々九度三枚ノ杯夫レソレ配置ノコト
- 一 御酒土器飲ミ様受取ノコト

このように婚礼の礼儀作法に関することが述べられており、結びに高木磯太郎本人が次のように記している。

以上明治三十一年旧五月廿九日ヨリ六月七日迄自宅ニ於テ巡回教師岡部千仞先生ニ從ヒ傳習 高木磯太郎 記之

自宅というのは牛頸の家のことであろう。岡部千仞（一八四二―一九〇八、字は子寓）は、福岡藩士で昌平黌に学び、帰藩後に藩校修猷

館教授となる。明治十七年に山梨県市川大門町に修齊学舎を開き、門人を教える。古礼法を修め、岡部式礼法と称した⁽⁶⁾。十日ほど磯太郎の家で講習を行ったということである。講習内容の全体については不詳だが、少なくともこの記録は婚礼に関する礼法に限られており、最後に「嫁入ノ節御茶ノ配置法心得」が図入りで附されてもいる。

このように見てくると、婚礼に関するこの新式礼法の講義は、磯太郎自身の必要に応じてなされたものではないかと考えられる。つまり、自身の結婚が控えていたのではないか。磯太郎が結婚の式を挙げた時期は定かでないが、妻は既に見たように竹田謙窓の二女アグリである。謙窓は明治二十二(一八八九)年に亡くなっているから、この時の娘の晴れ姿を見ることはなかった。はつきりしていることは、翌年明治三十二(一八九九)年三月二十一日に二人の長男幹夫が誕生していることである。

この頃、磯太郎は佐賀の池田産科婦人科病院に勤務していたようである。前掲の『杏林之栞』第十卷第十二号附録(明治三十一年十二月)所載の会員住所には「筑紫郡大野村大字牛頸」とあるが、翌年の第十一卷第十二号附録(同三十二年十二月)及び第十二卷第十号附録(明治三十三年十一月)には、「佐賀市池田病院」と記されていることから分かる。さらに言えば、第十三卷第十二号附録(同三十四年十二月)には、また「筑紫郡大野村大字牛頸」に戻っている。しかし、その翌年の第十四卷第七号附録(同三十五年十二月)には、「筑紫郡二日市町湯町」となっている。

以上から見ると、磯太郎は明治三十二(一八九九)年から同三十四(一九〇一)年まで、二年間ほど佐賀の池田病院に勤務していたと考えられる。院長である池田陽一が、念願のドイツ留学を果たしていた時期である⁽⁷⁾。そして、同年に牛頸に戻り、翌年には二日市町に居住したようである。

ここで、一人の人物を登場させておきたい。磯太郎の妻となったアグリのすぐ下の弟、すなわち竹田謙窓を継いで竹田家の第十代当主となった竹田修吉(字は子来、号は定修、一八七三―一九四五)のことである。修吉に関しては、本稿「牛頸の環境」のところすでに触れたが、彼は多くの自筆文書を残しており、中でも次のような年譜や日記類が大野城市所蔵「竹田家文書」の中に収められている(数字は同文庫の資料番号)。

- 三六一五「謙窓年譜并行状」(竹田修吉、昭和五年一月序)
- 三六二四「年譜(定修年譜)」(竹田修吉、明治四十二年七月序)
- 四〇〇九「竹林日誌」(竹田修吉、明治三十四年)
- 四〇一〇「定修日記」(竹田修吉、大正元年―同十五年)
- 四〇一二「定修日記」(竹田修吉、昭和八年―同十七年)

修吉は磯太郎より八歳年下であったが、義兄弟として生涯親しく交わったようである。その年譜や日記にはしばしば「高木兄」の名前が登場する。これらの資料によって磯太郎の後半生がかなりはつきりしてくる。明治三十四(一九〇一)年の「竹林日誌」には、一月一日の条に「佐賀池田病院ヨリ高木磯太郎氏」の年賀状が到来したと記されている。そして興味深いことが四月一日の条に見える(句読点は筆者)。

高木兄帰宅之事ニ付、両三日自分出佐ノ處、池田先生モ無異議耳仰ラレタル由。是ニ就キテ飯(帰)村後ノ出張所ノ事等、区長へ□方依頼シ来ル。

これは、佐賀の池田病院に勤務していた磯太郎が牛頸に帰ってくるということについて、池田陽一先生に相談をしたところ異論がないという

ことであったので、帰村後の出張所（診療所）⁽⁸⁾のことにについて区長に相談することを依頼されたということである。この年の正月にドイツから帰国していた池田は福岡甲種医学校や福岡病院時代の愛弟子であった高木のことを常に気にかけていたものと思われる。

翌三十五年の「竹林日誌」の二月七日の条には、「高木氏博多へ開業ニ付、其關係を以て村寄をなす。自分は高木氏帰宅せしや否や視候す。兄は四時頃帰宅。今□福岡氏昨日依頼の湯町返事を申し来る。」とある。事情は少し複雑であったようだが、ともかくこの年に磯太郎は二日市町湯町に居住することになったようである。なお、明治四十（一九〇七）年の十一月十三日に、元福岡医学校教諭であった柘植宗一が逝去している。

さて、同四十年に、「同業相互ノ連絡ヲ謀リ徳義ヲ涵養スルコト」、「医事衛生ノ進歩発展ヲ期スルコト」、「學術ヲ研鑽シ知識ヲ交換スルコト」を目的として、筑紫郡医師会が設立認可され、磯太郎はその会員となる。同四十四（一九一一年）三月十四日に筑紫郡会議所で開催された医師会主催の學術講演会において、「屍体解剖所見に就て」という演題で発表を行っている。また、大正八（一九一九）年四月から翌年一月までは理事を務めている⁽⁹⁾。その筑紫郡医師会、今日の一般社団法人筑紫医師会が所蔵する大正十五（一九二六）年頃の資料「会員中自カラ医院ヲ経営スルモノ」の中に、「二日市町四一七」（現福岡県筑紫野市）の「高木磯太郎」の経営する「高木産婦人科医院・病床数二」を見ることができる。また、大正二（一九一三）年末頃まで、水城村大佐野（現福岡県太宰府市大佐野）に出張所を設置していたことが分かる資料も残されている。

ここで、県立福岡病院の医員を辞任して以降の高木磯太郎の歩みについて整理しておくことにする。医員辞任は「自宅開業」のためと言われていたが、おそらく牛頸の自宅を診療所として医療活動を行い、途中で

佐賀の池田産科婦人科病院に勤務する。二年ほど経って郷里に戻るが、その後、博多や大佐野でも出張所を持ち、最終的には二日市町紫で高木産婦人科医院を経営することになる。

この間、家庭的にも変化があった。長男幹夫は福岡の中学修猷館を卒業した後、第一高等学校から東京帝国大学へと進み、大正十二（一九二三）年に東大法学部英法科を卒業し、東京海上火災保険に入社する。そして、見学（研修）のため英国へ留学をする。三年間の留学を経て、昭和三（一九二八）年三月三日に帰国するが、たまたま東京出張中の竹田修吉が横浜港で出迎えた、と前掲「年譜」の中に記している。幹夫は第一生命保険社長（創業者）の矢野恒太⁽¹⁰⁾に将来を嘱望され、その二女と結婚し、同五年二月には長男正幹が誕生する。その年に六十五歳を迎える磯太郎にとっては初孫であった。そして、この年に磯太郎は東京への転居を決め、筑紫郡医師会に退会届を提出している⁽¹¹⁾。

（三）晩年

高木磯太郎・アグリ夫妻は、長年慣れ親しんできた福岡の地を離れ、東京府荏原郡東調布町田園調布に住むことになる。特別の感慨があったであろう。半年も経たない昭和六（一九三一）年四月に、磯太郎は妻を伴って郷里へ墓参の旅に出る。観光旁々各地の親戚を訪問した夫妻は、二ヶ月近くにも及ぶ長旅を終えて東京に戻る。磯太郎はこれを機会に親戚家族の名簿を作ることにして、出来上がった名簿を八月上旬に各家族へ送付する。表紙には「親戚家族名簿」とのみ記され、始めに「親戚家族名簿調製に就て」という文章が綴られている。「高木資料」所収の「雜記載録」以外に磯太郎自身の考えを述べた文章はほとんどないが、この一文はその年六十六歳となる磯太郎の心境をよく表すと共に、彼の

漢語力の高さを示しているので、全文を以下にそのまま掲げる（原文は漢文訓読調で漢語が多く、句読点もないが、訓読の便のため句読点を施し、適宜読み仮名を振った。（上略）（中略）（下略）「モットー」「チャンス」などの表記は原文のままである）。

親戚家族名簿調製に就て

熟ら考ふるに、方今、人文日に進み月に闇き、國家の為め慶賀に堪へずと雖も、動もすれば思想悪化、萬代不易の神聖なる我が國体に動揺を来さんとする傾向あり。豈惻然として深淵薄氷の感なきを得ざらんや。

茲時に膺り吾人の最も心すべきは何ぞや。畏くも

明治大帝の勅語、（上略）我が臣民、克く忠に克く孝に、億兆心を一にして、（中略）父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ（下略）の金科玉條を「モットー」として、益國運の隆盛、家福の伸暢を企図するに在りと信ず。予本年四月中旬より六月上旬まで、九州筑紫野の故郷に展墓の為め、糟糠の妻と同伴、旅行の序を以て、神社佛閣名称古蹟觀光旁各地離居の親戚を訪問し、予等六組の兄弟姉妹夫婦相共に健在、其子孫は彌榮へに榮へつつあるに親しく面接するを得、誠に愉々快々の極めなり。故に予は此「チャンス」を期とし、親戚家族名簿を調製して、関係各家に配布し、予が這般旅行の記念とせん事を提議せしに、幸に其微衷を賛同せられ各家族名簿を送致せられたるを以て、茲に之を綜合して一覽に便ならしめ、更に返送する事とせり。希くは之を利用して雲山萬里、隔居疎遠の消息を窺知せられ、益和合輯睦圓滿交情の資となし、國家の為め自重せられん事を祈る。

附記

各家庭に於ける人員の増減及び住所變更等の際は、其都度相互

通信の勞を執られ、而して名簿中に記入を乞う。

昭和六年八月上浣

高木磯太郎誌

この名簿は、大野城市所蔵「竹田家文書」三七七一「親戚家族名簿」であり、竹田修吉宛に送られてきて保存されていたものである。表紙には筆者名などは記されていないが、竹田家と高木磯太郎との密接な関係を証明する大切な資料となっている。名簿に含まれているのは、竹田猗（謙窓）の六人の子、二男四女とそれぞれの配偶者及びその子や孫の名前と年齢や住所などである⁽¹²⁾。磯太郎が妻の兄弟姉妹とは言え、竹田家につながる人々との和合円満をいかに大切にしていたかが分かる逸話である。

翌年、昭和七（一九三二）年十一月二十三日に福岡市崇福寺で開催された「福岡医学校関係物故者追弔会」に出席する⁽¹³⁾。そして、「親戚家族名簿」を送付してから三年後、同九（一九三四）年八月三十一日に糟糠の妻アグリが病没する。享年六十四であった。前後のことを詳細に記録している義弟修吉の「定修日誌」（昭和九年度）によれば、その遺骨は多磨墓地（現多磨霊園）に埋葬されたようである。この時、磯太郎は六十八歳であった。

同十二（一九三七）年十月八日には、最大の恩師であった池田陽一が享年八十で逝去する。同十七年十二月、磯太郎の喜寿のお祝いに修吉が画幅（掛軸）を贈呈したところ、東京の磯太郎から礼状が来た、と「定修日誌」（昭和十七年度）の十二月十九日に見える。そして、残されている「定修日誌」もこのあたりまでである。昭和二十年に磯太郎の義弟竹田修吉が享年七十三で病没する。高木磯太郎が亡くなったのがいつだったのかは分からない。墓所はおそらくアグリが埋葬されたところと

同じ多磨墓地ではないかと推測される。

〔註〕

- (1) 県立福岡病院については、『九州大学百年史』第1巻…通史篇Ⅰ・第1編「第1章 賛生館から県立病院へ」を参照した。
- (2) この日の集合写真は、『九州大学百年史写真集』（九州大学大学文書館編集、二〇一一）第1章（五頁）に、「福岡医学校最後の卒業生と教師たち」として掲載されている。本稿附録資料（5）写真を参照。
- (3) 玄洋医学会及び『杏林之葉』については、『九州大学大学史料叢書』第十三輯（第十六輯）（九州大学大学史料室、二〇〇五・二〇〇八）を参照した。
- (4) 『九州大学百年史』第1巻・第1編・第1章所載「県立福岡病院医員等名簿」（福岡県共同公文書館所蔵『辞令原簿』による）を参照した。なお、樋口宗次郎氏（同名簿では「惣次郎」とある）と岩永左右一氏については、同名簿では「所属不明」欄にあるが、いずれも「産科・婦人科」の医員であったと考えられる。
- (5) 同誌の第六巻第十一号（十一月）の「雑報」には、「池田病院開院式の景況」、「池田病院の構造」、「池田病院の盛運」という記事が掲載されている。それによれば、十一月四日正午から佐賀市水ヶ江町で開院式が挙行される。門柱には「池田私立病院」の標札が掛けられていた、とある。
- (6) 岡部千仞については、山梨県西八代郡市川大門町の『市川大門町誌』（市川大門町誌刊行委員会、一九六七）、山梨県西八代郡三珠町の『三珠町誌』（三珠町誌編纂委員会、一九八〇）を参照した。なお、現在は合併により両町とも市川三郷町となっている。
- (7) 古賀康八郎氏「池田陽一先生に就いて」（『産科と婦人科』第26巻第8号、株式会社診断と治療社発行、一九五九）を参照。
- (8) 県立福岡病院においては、明治二十一年七月より、四人の医学士（大森、熊谷、池田、榎本）による巡回診療が開始される。県下十八の郡区を四ブロックに分け巡回し、各地域の開業医等と協力する形で診療が行われた。ま

た明治二十二（一八八九）年に結成された「玄洋医学会」は県下二十市郡に支部が置かれたが、医学巡回の場所である出張所（診療所）が支部の会場となっている（註（1）所掲書を参照）。このように地域医療を行う場所が、診療所、治療所、出張所などと呼ばれたようである。

- (9) 「筑紫郡医師会」は、昭和四十七（一九七二）年に「筑紫医師会」と改称し、今日は「一般社団法人筑紫医師会」（福岡県太宰府市国分）として盛んな活動を続けている。『筑紫医師会七十年史』（社団法人筑紫医師会、一九七七）の中に、設立当時の会員として高木磯太郎の名前が見え、理事のことも記されている。また、「學術講演会」のことも同書に記録されている。

- (10) 矢野恒太（一八六六―一九五一）は、明治二十二（一八八九）年に第三高等中学校医学部（後の岡山医学専門学校、現岡山大学医学部）を卒業した医師でもあった。

- (11) 一般社団法人筑紫医師会が所蔵する資料の中に、「退会届」がある。

- (12) 本稿附録資料（2）高木磯太郎親族家系略図を参照。

- (13) 『福岡醫學校關係物故者追弔會記事』（古賀得四郎著・発行、一九三三）の中に、参加者の名前が記載されている。

むすびに

本稿では、九州大学大学文書館所蔵の「高木磯太郎資料」について、その内容を分析検討した。また、資料の旧蔵者であり筆録者であった高木磯太郎という人物についても能う限りの調査を行った。当初、福岡甲種医学校の卒業生ということ以外全く情報を持たなかったが、資料の一冊「雑記載録」という日記やその他の資料を手がかりとして、少しずつその生涯が明らかになった。日記は明治十八（一八八五）年の一月から七月まで、わずか七ヶ月間の個人的記録ではあるが、福岡甲種医学校をめぐる様々なことがらを取り巻く人々の姿が浮き彫りにされた。中でも、

大森治豊、池田陽一らの医学校教諭によって実施された画期的な帝王切開手術（ポルロー式国帝截開術）に関する一連の記録は、従来伝えられていた事実を再検討させる内容を持っていた。今後の当該研究に対して一石を投じたものであると確信する。

その外、明治十年代の前半のわずか四年程度ではあるが、阿蘇宮地に建てられ徹底した漢学教育が行われた私学「盍簪学舎」についても、新たに光を与えることができた。また、高木磯太郎が幼少期を過ごし、生涯その故郷であった「牛頸」という土地の持っている文化的環境についても注目することができた。それは、彼の日記に断片的に記されている「竹田先生（謙窓）」とのつながりから見えてきたものである。そこから先、ことに彼の後半生のことがらについて理解させてくれたのは、竹田謙窓の長男であり、高木磯太郎の義弟であった竹田修吉（定修）の書き残した多くの文書類であった。それは、大野城市所蔵「竹田家文書」に収蔵されている竹田家の貴重な資料群の中に眠っていた。「高木磯太郎資料」の発見と研究は、それらの資料の再認識にもつながったと言える。

ともかく、「高木磯太郎資料」四十九冊は、九州大学の歴史の一部分である「福岡医学校」の教師や生徒の歩みを考察する上で、貴重な資料を提供するものである。「雑記載録」が記されてから一四〇年の歳月を経て再び姿を現した本資料は、九州大学大学文書館が所蔵する他の資料と同様に、様々な研究の道に我々を誘ってくれるものと言える。なお、「雑記載録」に関しては、今後全文の文字起こしを行い訓読文を作成した上で、関心のある方の利用に供する予定であることを記して結びとする。

（えとう まゆみ 九州大学大学文書館事務職員）

（しばた あつし 九州大学名誉教授、同館協力研究員）

〔附記〕

本稿をまとめるに当たって、多くの方々や機関に大変お世話になりました。以下にお名前を挙げて深甚なる感謝の意を表します（順不同、敬称略）。

竹田準、竹田亨、池浦秀隆（阿蘇神社・権禰宜）、折田悦郎（九州大学・名誉教授）、高橋健二（株式会社ブラナアソシエーション・代表取締役社長、阿蘇出身）、阿蘇市教育委員会、安積国造神社、一般社団法人筑紫医師会、高岸修（筑紫医師会・事務局長）、立花孝裕（東京大学文書館・助教）、木下哲夫（大野城市牛頸公民館・館長）、門井慶介（大野城心のふるさと館・学芸員）、大野城心のふるさと館、福岡県立図書館、国立国会図書館、九州大学附属図書館医学図書館、同中央図書館、熊本県立図書館

附録資料

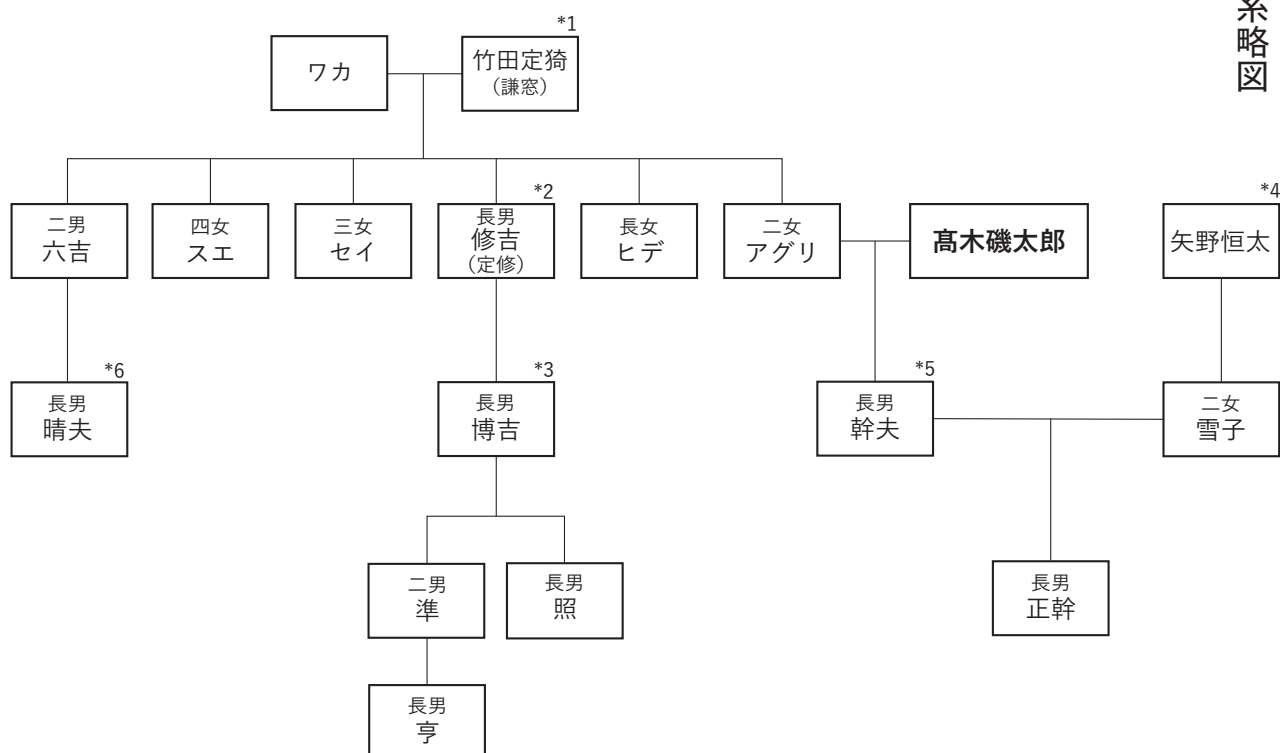
(1) 高木磯太郎略年表

西暦	年号	満年齢	高木磯太郎の事蹟	
一八六五	慶應元	0	12月28日に福岡藩士田中又十郎の子として生まれる	(慶応3) 福岡藩藩校賛生館設立
一八七三	明治6	8	3月に田中又十郎逝去(のち田中格仙の養子となる。牛頸に居住)	(明治5) 賛生館廃校
一八七八	11	13	阿蘇宮地の盃簪学舎に入塾	(明治7) 旧藩校修猷館内に診療所を設置
一八八二	15	17	11月に盃簪学舎は廃塾	(明治10) 修猷館内診療所、東中洲に移転し福岡病院として開院
一八八三	16	18	福岡甲種医学校に入学、斎藤武英教諭宅に寓居	(明治12) 福岡病院廃止、同所に福岡医学校を開設、
一八八五	18	20	「雑記載録」(1月～7月)を記録	東京大学医学士大森治豊・熊谷玄旦、福岡
一八八八	21	23	福岡甲種医学校を卒業、医師開業免許を取得	医学校教師に着任
一八八九	22	24	玄洋医会発足、入会 11月22日に竹田謙窓(のち岳父となる)病没(享年57)	(明治13) 福岡医学校開校式
				(明治16) 大河内和逝去
				(明治16) 福岡医学校、甲種医学校として認可
				(明治17) 福岡医学校に乙種薬学校設置
				(明治18) 福岡医学校教師大森治豊・池田陽一、ポル
				ロー式帝王切開手術を行う
				(明治19) 福岡県会、明治20年度福岡医学校予算の全
				廃を決議
				(明治21) 福岡甲種医学校廃止、4月1日県立福岡病
				院を開院
				(明治22) 斎藤武英、公立久留米病院初代院長就任

西暦	年号	満年齢	高木磯太郎の事蹟	関係事項
一八九三	明治26	28	9月8日より県立福岡病院の産科・婦人科医員	
一八九四	27	29	1～5、7～10月『杏林之葉』に「第四回、五十回卵巣囊腫實驗」を寄稿、6月に『代償性膀胱出血ノ一例』を寄稿	(明治27) 池田陽一(産科・婦人科部長および小児科部長) 県立福岡病院辞職、佐賀市水ヶ江町に池田産科婦人科病院を開業
一八九五	28	30	6月に県立福岡病院医員を辞し、自宅(牛頸)で開業	(明治27) 宮本茂任逝去
一八九八	31	33	5月29日～6月7日、牛頸にて漢学者の巡回講師岡部千仞に就いて「新式男女禮法畧記」を聴講、この頃、竹田謙窓二女アグリと結婚か	
一八九九	32	34	3月21日に長男幹夫誕生、池田産科婦人科病院勤務	(明治32) 池田陽一、ドイツ留学(4月)
一九〇一	34	36	大野村大字牛頸に戻る	(明治34) 池田陽一、ドイツより帰国(正月)
一九〇二	35	37	筑紫郡二日市町湯町に居住(出張所)のちに博多へ出張所移転	(明治36) 京都帝国大学福岡医科大学創設、福岡県立病院長大森治豊、初代福岡医科大学長兼附属医院長に就任
一九〇七	40	42	筑紫郡医師会設立認可、会員となる	(明治39) 斎藤武英、公立久留米病院辞職、久留米市斎藤病院院長 (明治40) 柘植宗一逝去

西暦	年号	満年齢	高木磯太郎の事蹟	関係事項
一九〇九	明治42	44	大野村大字牛頸一四八二に居住	(明治43) 九州帝国大学創設
一九一一	44	46	筑紫郡医師会学術講演会で「屍体解剖所見に就て」発表	(明治44) 九州帝国大学工科大学開設、元東京帝国大学総長山川健次郎、九州帝国大学初代総長に就任。元医科大学長大森治豊に九州帝国大学初の名誉教授を授与
一九一四	大正3	49	筑紫郡水城村大字大佐野の出張所を廃止	(明治45) 初代福岡医科大学長大森治豊逝去
一九一九	8	54	大野村大字牛頸一四八二に居住、4月筑紫郡医師会の理事に就任(翌年1月まで)	
一九二二	11	57	大野村大字下大利から二日市へ転居 大野村大字牛頸の出張所を廃止	
一九二三	12	58	幹夫、東京帝国大学法学部卒業、東京海上火災保険入社	(大正12) 熊谷玄旦逝去
一九二五	14	60	筑紫郡二日市町紫に居住、高木産婦人科医院を経営	
一九二八	昭和3	63	3月3日幹夫、英国留学より帰国	
一九三〇	5	65	2月1日に幹夫の長男正幹誕生 11月11日に筑紫郡医師会に退会届を提出、東京へ移住	(昭和5) 池田陽一、福岡市に移住、福岡市極楽寺町に長男一男と共に池田産婦人科病院を開設

西暦	年号	満年齢	高木磯太郎の事蹟	関係事項
一九三一	昭和6	66	4月中旬～6月上旬、妻と共に郷里に墓参、親族を訪問 8月上旬に「親戚家族名簿」を作成	
一九三二	7	67	福岡医学校関係物故者追弔会に出席（福岡市崇福寺）	
一九三四	9	69	8月31日に妻アグリ病没（享年64）、多磨墓地に埋葬	
一九四二	17	77	12月に喜寿を迎える、竹田修吉、祝いに画幅を贈呈	（昭和12）池田陽一逝去
一九四二	20		義弟竹田修吉（定修）病没	



* 「竹田家文書」所収「竹田家系図」を参照した

- * 1 福岡藩藩儒竹田家第9代当主
- * 2 福岡藩藩儒竹田家第10代当主
- * 3 福岡藩藩儒竹田家第11代当主
- * 4 第一生命保険創業者
- * 5 東京海上火災保険第4代社長
- * 6 東京海上火災保険第8代社長

(3) 大森治豊・池田陽一による「ポルロー式国帝截開術」関係年表

報道・公表・関連事項		高木磯太郎「雑記載録」	
		明治18年3月28日	午前十時大森池田齋藤三先生療産婦矣
		明治18年4月8日	大森教師入來與先生對酌談語及於先日婦人治術腹部切開子宮摘出事優笑高談自心中如在快樂
明治18年4月28日	ポルロー (Porro)氏式帝王切開手術日 (伯林臨床週報)		
明治18年5月6日	福岡日日新聞「東洋未聞の大施術 (某氏の報道)」		
明治18年5月8日	福岡日日新聞「大施術母子安全なり」		
明治18年5月12日	東京日日新聞「東洋未聞の大施術」		
		明治18年5月24日	今日中畹町緒田巻屋婦人入院療治此度全癒以故於東公園官宅設回起祝之筵醫学校教諭大森熊谷池田齋藤並醫員青木中畹諸氏招待
明治18年5月25日	醫事新聞第158号「國帝切開術」		
明治18年10月12日	伯林臨床週報第41号「Eine Sectio caesarea nach Porro.」		
明治18年12月19日	東京醫事新誌第403号「ポルロー氏帝王開切術」		
明治19年1月10日	中外醫事新報第139号「ポルロー氏國帝切開術」		
明治20年1月12日	文部大臣森有礼 (1847～1889) が福岡各校巡視で、福岡医学校の施術場に備えてあった子宮アルコール漬けを見学		
明治20年1月14日	福岡日日新聞「大臣截開術を称讃す」		
明治20年2月20日～3月31日	「福岡博物展覧会」第二区第二室に「病院出品」第九号として出品「國帝切開術ノ際扶出シタル子宮及卵巣 (大瓶入)」		
明治27年2月末日	杏林之栞 第6巻第2号「ポルロー氏国帝截開術ヲ施シテ母子共ニ安全ナリシ再度ノ治驗」(池田陽一述)		

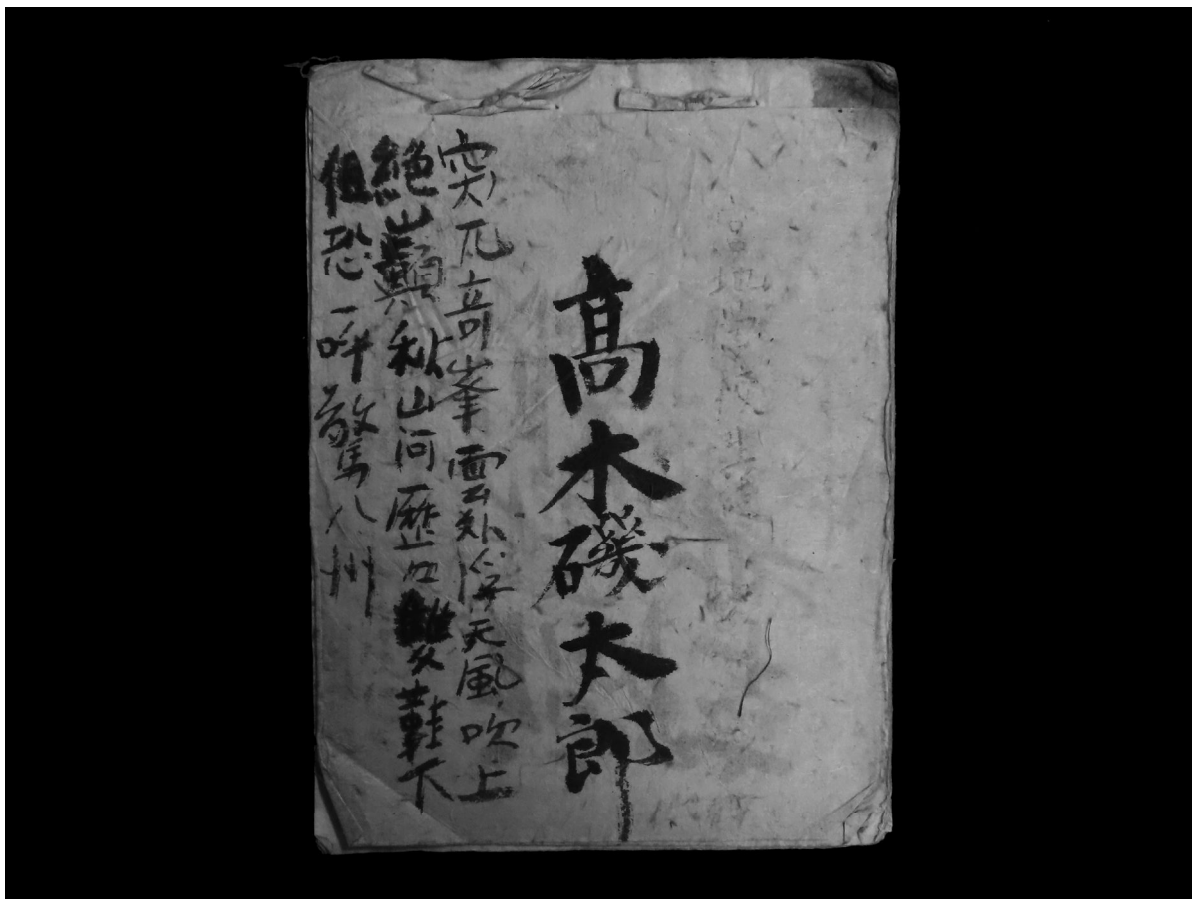
*『東京醫事新誌』『中外醫事新報』に見える「伯林醫事週誌」は、池田陽一「杏林之栞」第6巻第2号には、「伯林臨床週報」と記す。『九州大学五十年史・通史』には、『伯林臨床週報』とある。

No.	表題	種別	内容	年代	備考
1	洋算手控	壺簪學舎 筆記帳		明治11年10月	洋算の練習帳 裏表紙に安積良齋の詩「登筑波山絶頂」を書写
2	洋算手控	壺簪學舎 筆記帳		明治14年5月	計算問題の練習帳
3	和漢雜書暗記手控	壺簪學舎 筆記帳		明治14年6月	漢文の書写 問題文と解答 冒頭頁に「不学牆面、莅事惟煩」 (『書経 - 周官』)と書写 裏表紙に高木磯太郎 高木印有り
4	壺簪學舎教則并試験法	壺簪學舎 筆記帳		明治14年6月	壺簪學舎の教則 試験法は省略 裏表紙に「高木氏所物」 表紙・巻頭・巻末に高木印有り
5	不審字控(上等・第四級不審)	壺簪學舎 筆記帳		明治14年、15年	損傷激しい、多数書き込み有り
6	歴史綱鑑補全 不審字控	壺簪學舎 筆記帳		明治15年4月	難読字など 裏表紙に「明治十有五歳四月 阿蘇宮地 壺簪學舎」
7	洋算傳習手控	壺簪學舎 筆記帳		明治15年10月	計算問題の練習帳 文章問題、約分、通分等
8	外科各論・壹	医学校 講義ノート	大森治豊教諭 彪氏外科各論	(第三年後半期六期生)	大森治豊先生の講義 表紙裏に「福岡医学校三年後半期六期生 高木氏蔵書」 巻末頁に「福岡区内因幡町八番地 斎藤武英殿方寄寓中書之…」
9	外科各論・貳	医学校 講義ノート	大森治豊教諭 彪氏外科各論 (下肢・頸部・花柳・皮膚)	～明治20年11月15日 (第四年前半期生七期生)	大森治豊先生の講義
10	外科各論・〔三〕	医学校 講義ノート	大森治豊教諭 彪氏外科各論 (泌尿・生殖・骨盤・上肢)	～明治20年4月28日頃 (第四年前半期生)	大森治豊先生の講義 巻頭頁に「甲種福岡医学校一等教諭 医学士兼校長 大森治豊先生直訳口授」
11	外科各論・〔四〕	医学校 講義ノート	大森治豊教諭 (外科手術論及胸腹諸病)	明治20年7月頃？ (第四年後半期生)	大森治豊先生の講義 裏表紙に「高木蔵書」 新聞紙(広告欄に明治20年7月)で製本
12	外科各論	医学校 講義ノート	四肢篇等	明治19年11月22日頃～明治20年4月9日頃	表紙無し
13	内科通論	医学校 講義ノート	池田陽一教諭 (病理通論)	～明治19年1月18日	池田陽一先生の講義 巻頭頁に「甲種福岡医学校医学士池田陽一先生講」
14	内科各論・二	医学校 講義ノート	熊谷玄旦教諭 (呼吸器篇)	(第四年前半期生)	熊谷玄旦先生の講義
15	内科各論・三	医学校 講義ノート	熊谷元旦教諭 (神経系諸病)	～明治21年11月6日 (第四年後半期八期生)	熊谷玄旦先生の講義 巻頭頁に「熊谷元旦氏口授」

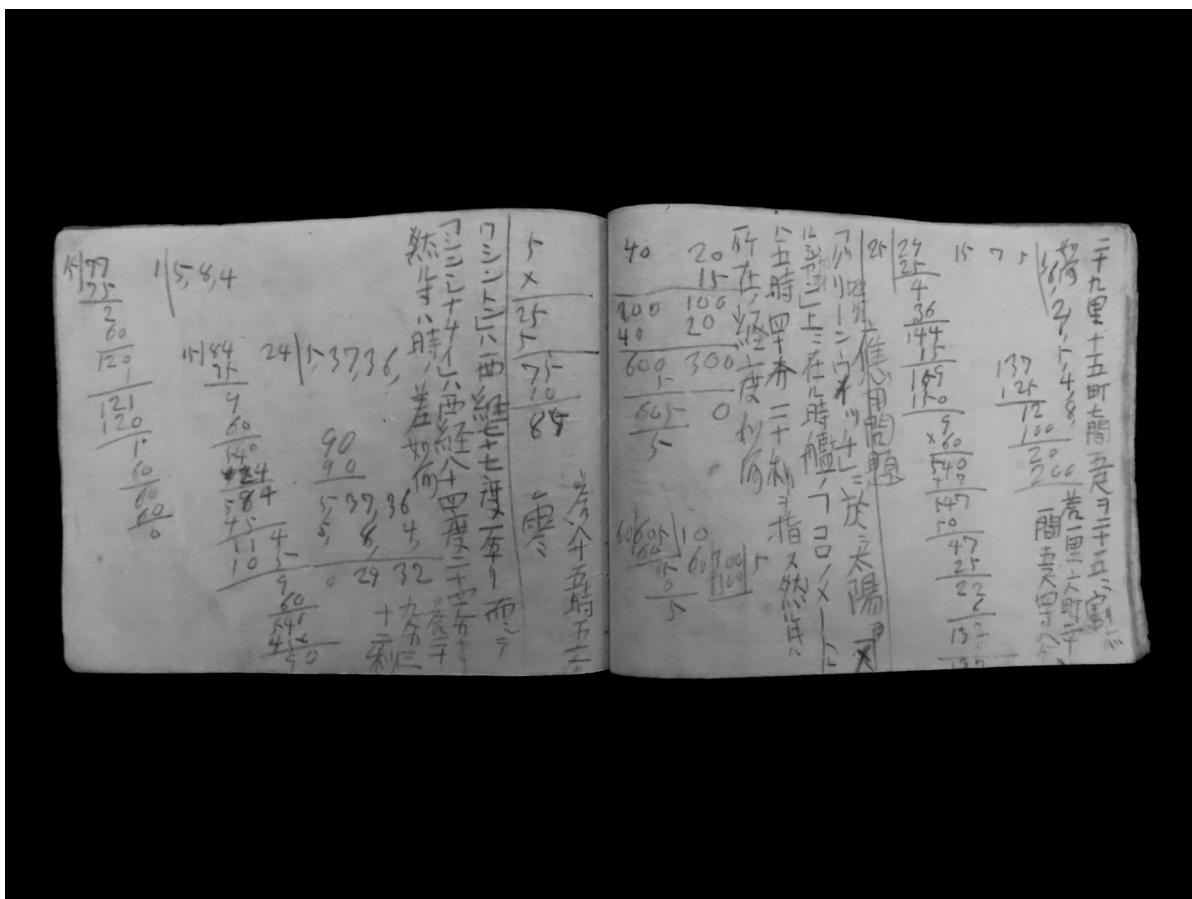
No.	表題	種別	内容	年代	備考
16	内科各論・〔四〕	医学校 講義ノート	熊谷玄旦教諭 (消化器病論)	(第八期生)	熊谷玄旦先生の講義 新聞紙で製本
17	内科各論・〔五〕	医学校 講義ノート	熊谷玄旦教諭 (循環器・泌尿 器・生殖器・ 血液及血液製 造器・新陳代 謝器諸病論)	～明治20年1月頃 (第四年前半期 生)	熊谷玄旦先生の講義 新聞紙(朝日新聞第2571号附録) で製本 裏表紙に「高木蔵書」
18	内科各論・〔六〕	医学校 講義ノート	熊谷玄旦教諭 (伝染病論・第 参章)	～明治26年10月 17日頃	熊谷玄旦先生の講義 第三章から始まっている 新聞紙(朝日新聞第2570号附録) で製本されている 巻末頁: 事実程 取締罰則 爆発物 検察官 当国事犯事件 内科伝染論 裏表紙: 明治26年10月17日…書之 高木蔵書
19	断訟醫學	医学校 講義ノート	熊谷玄旦教諭 斎藤武英教諭	～明治20年10月 23日	巻頭頁に「福岡医学校教諭医学士熊 谷玄旦先生直訳、同教諭斎藤武英先 生補訂、同生徒高木磯太郎筆記」
20	組織學前編	医学校 講義ノート	柘植宗一教諭	明治18年1月「例 言」	柘植宗一先生の講義 巻頭に「柘植宗一識 明治18年1月」 の例言 刊本の一部を綴じ込む
21	組織學後編	医学校 講義ノート	柘植宗一教諭 (訂正・増補)	(第二年前半期 生)	柘植宗一先生の講義 刊本の一部を綴じ込む 巻頭頁に「柘植二等教諭訳 組織學 後編 甲種福岡医学校上梓」 巻末頁に「二等教諭柘植先生訳述 生徒中附活版 甲種福岡医学校生徒 二年前半期生 高木蔵書」
22	産科學	医学校 講義ノート	池田陽一教諭	～明治20年10月、 明治21年3月 (第八期生)(第 四年後期)	池田陽一先生の講義 巻末頁に「明治20年10月25日午前 10時終講」 裏表紙に「福岡甲種医学校卒業生 高木磯太郎」
23	婦人科學	医学校 講義ノート	池田陽一教諭	明治20年頃～ (第四年前期)	池田陽一先生の講義 新聞紙(福岡日日新聞第1997号) で製本 巻頭頁に「福岡医学校一等教諭医学 士池田陽一先生口授…同校生徒高木 磯太郎執筆」
24	診断學・卷之一	医学校 講義ノート	池田陽一教諭	(第五期生)	池田陽一先生の講義 巻頭頁に「福岡医学校一等教諭医学 士池田陽一先生口授…同校生徒高木 磯太郎即日講聞記」
25	診断學・卷之二	医学校 講義ノート	池田陽一教諭 (循環器診法 肚腹臓器診法)	年代不詳 5月12日～ (第五期生)	池田陽一先生の講義 裏表紙に「池田教諭口述 甲種福岡 医学校 五期生 高木磯太郎」

No.	表題	種別	内容	年代	備考
26	眼科学・壹	医学校 講義ノート	榎本與七郎教 諭	(第三年前期)	榎本與七郎先生の講義 新聞紙で製本 巻頭頁に「福岡医学校一等教諭医学 士榎本與七郎氏口述 同校生徒高木 磯太郎筆記」
27	眼科学・貳	医学校 講義ノート	榎本與七郎教 諭	～明治20年1月頃 (第三年後期)	榎本與七郎先生の講義 新聞紙で製本
28	生理學拔記	医学校 講義ノート	榎本與七郎教 諭	明治18年1月～2 月26日頃	榎本與七郎先生の講義 表紙裏に「卒業証書 高木磯太郎 開業 第八期卒業」
29	薬物學	医学校 講義ノート	齋藤武英教諭	～明治19年9月10 日	齋藤武英先生の講義 巻頭頁に「甲種福岡医学校三等教諭 齋藤先生口述 同校生徒高木磯太郎 筆録」 巻末頁に「明治19年9月10日午後6 時焉終於福岡天神町齋藤武英先生寓 居中」
30	動物學	医学校 講義ノート	久能功教諭 實用動物學		久能功先生の講義 巻頭頁に「甲種福岡医学校教諭久能 功先生口述 生徒高木講延筆記」
31	植物學	医学校 講義ノート	久能功教諭		久能功先生の講義 巻頭頁に「福岡医学校教師久能功先 生講述 高木磯太郎筆録」
32	組織學・五官器 篇圖譜	書写			耳や目等の断面図等を書写
33	動脈拔萃表	書写		明治17年10月	
34	摸寫・解剖筋圖 式	書写		明治17年4月	裏表紙に「明治17歳甲申4月写之 福岡医学校生徒高木磯太郎藏品」 人体の解剖図について模写
35	醫科全書 神經學 拔萃	書写		～明治17年12月 頃	医科全書神經學を抜粹 巻末頁に「山日明治17年甲申12月 福岡天神町齋藤武英殿方寓居中於南 窓之下謄写焉」
36	炭素化合物化學 總論	書写	ショウレン マー氏炭素化 合物化学	明治16年頃？	巻頭頁に「ショウレンマー氏炭素化 合物化学」
37	〔急性化膿性中耳 炎〕 〔慢性化膿性中耳 炎〕 〔頭蓋損傷通義〕	筆記帳			表紙無し、損傷多い
38	外科聴講要概録	備忘録		明治18年10月20 日～19年1月頃	大森治豊先生の講義 表紙の裏に「彪氏外科通論」等多数 書き込み 冒頭に「外科通論 大森先生譯講」
39	解剖備忘雜記	備忘録		明治16年12月頃 ～17年10月頃	「明治拾六歳十二月十日講述聞記ス」 解剖図について
40	生理學備忘録	備忘録	(體温論、筋論、 運動論、神經 論、五神論)	明治18年3月～5 月頃	

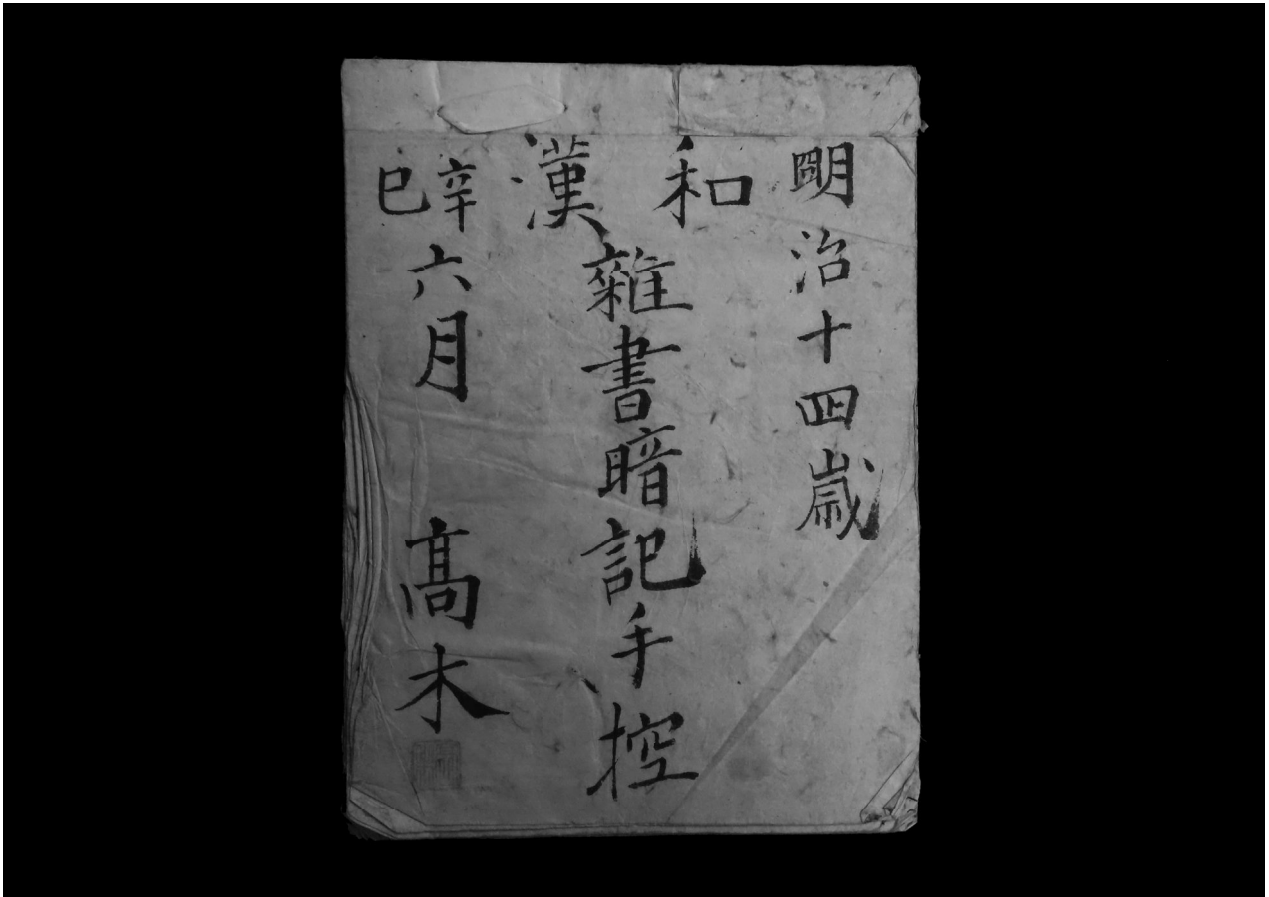
No.	表題	種別	内容	年代	備考
41	〔組織学〕(肥斯都露岐伊 迷摸亂怒)	備忘録		明治17年6月12日 ～明治18年3月頃	組織学（一般解剖学、顕微鏡解剖学等）について 表紙に「福岡医学校 多加喜」 裏表紙に「陽気発処、金石亦透、精神一到、何事不成」(朱子語類)の書き込み
42	組織学「プレバート」備忘録	備忘録		明治17年	巻頭頁に「以下皆顕微鏡的検査備忘録」
43	〔組織学〕(昆斯篤魯義伊 實地演習要摘簿)	備忘録		年代不詳 1月16日～5月12日頃	
44	〔骨や関節に関する覚書〕	備忘録		年代不詳 4月13日頃～5月21日頃	表紙無し
45	医学全科卒業試験問題録	医学校試験問題録	甲種福岡医学校卒業試験問題(総数324題)	明治21年1月5日乃至	「甲種福岡医学校編輯 高木磯太郎 筆記」 各学科の試験問題の項目 裏表紙に「甲種福岡医学校生 takaki (筆記体)」
46	雑記載録	日記		明治18年1月～7月 (第二年前半期生)	明治18年(1885)正月から7月までの漢文による日記
47	産科訓典	翻訳本書写		明治26年4月3日～12日頃	「産科訓典 英国ブリistol病院産科医「スウェイン」著 日本医師… 瀬脇寿雄纂訳」 巻末頁に「明治26年4月3日写始之同年同月12日写終之 圖新堂 高木庫」
48	華氏産科摘要	翻訳本書写	卷之上 卷之下	～明治26年5月10日	紀元253明治6年(1873)に出版された翻訳本を書写 人体図等を書き写した薄い用紙を複数枚貼り付け 巻末頁に「干時明治26年5月10日午後8時25分終結 恩 師池田陽一先生方寄寓中於北窓之下執筆 北筑一寒生 高木磯太郎字子幾」
49	新式男女禮法畧記	卒業後講義ノート	岡部千仞巡回講師 新式男女禮法手續覺 附・嫁入ノ節 御茶ノ配置法心得	明治31年旧5月～6月	岡部千仞先生の講義 巻頭頁に「新式男女礼法手續覺」 巻末頁に「以上明治三十一年旧五月二十九日ヨリ六月七日迄自宅ニ於テ巡回教師岡部千仞先生ニ從ヒ伝習 高木磯太郎記之」



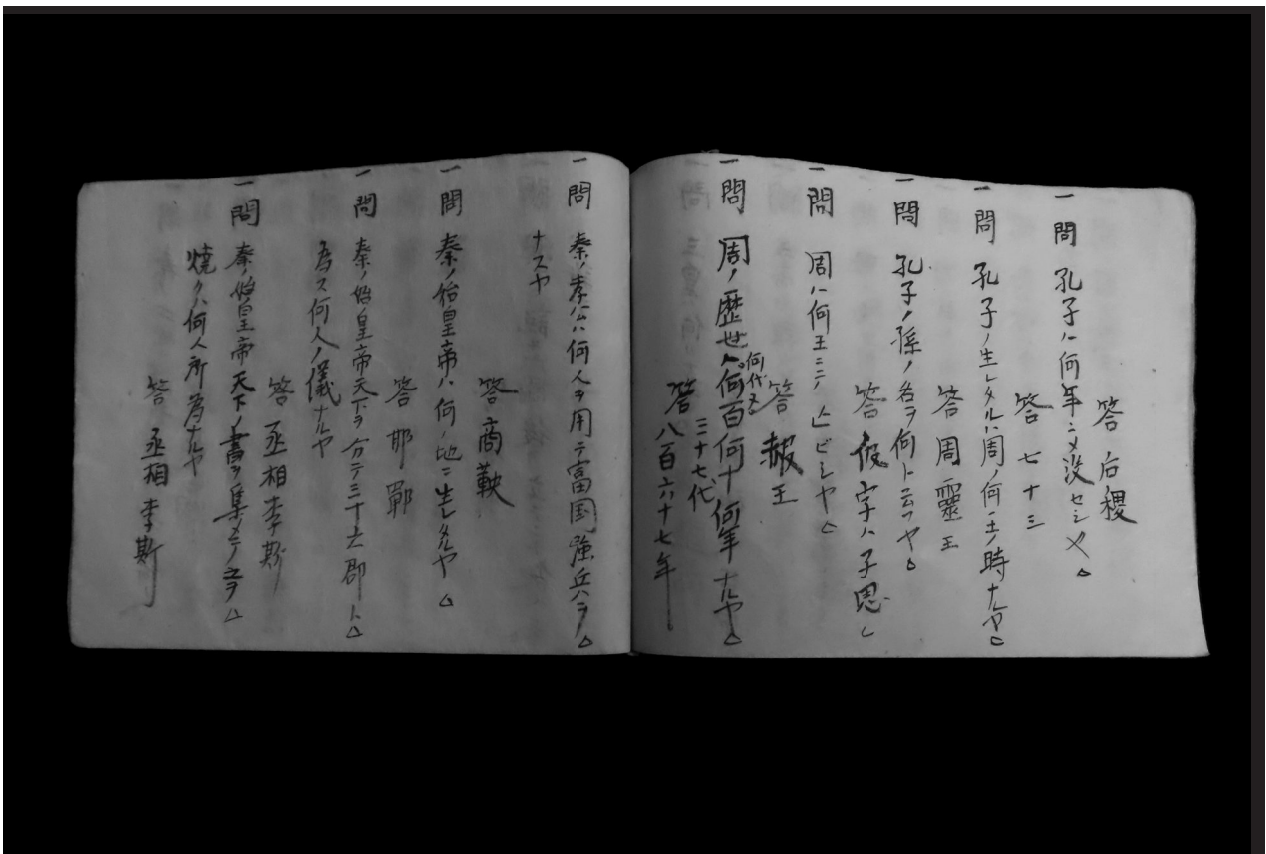
①洋算手控（裏表紙）（明治 11 年）



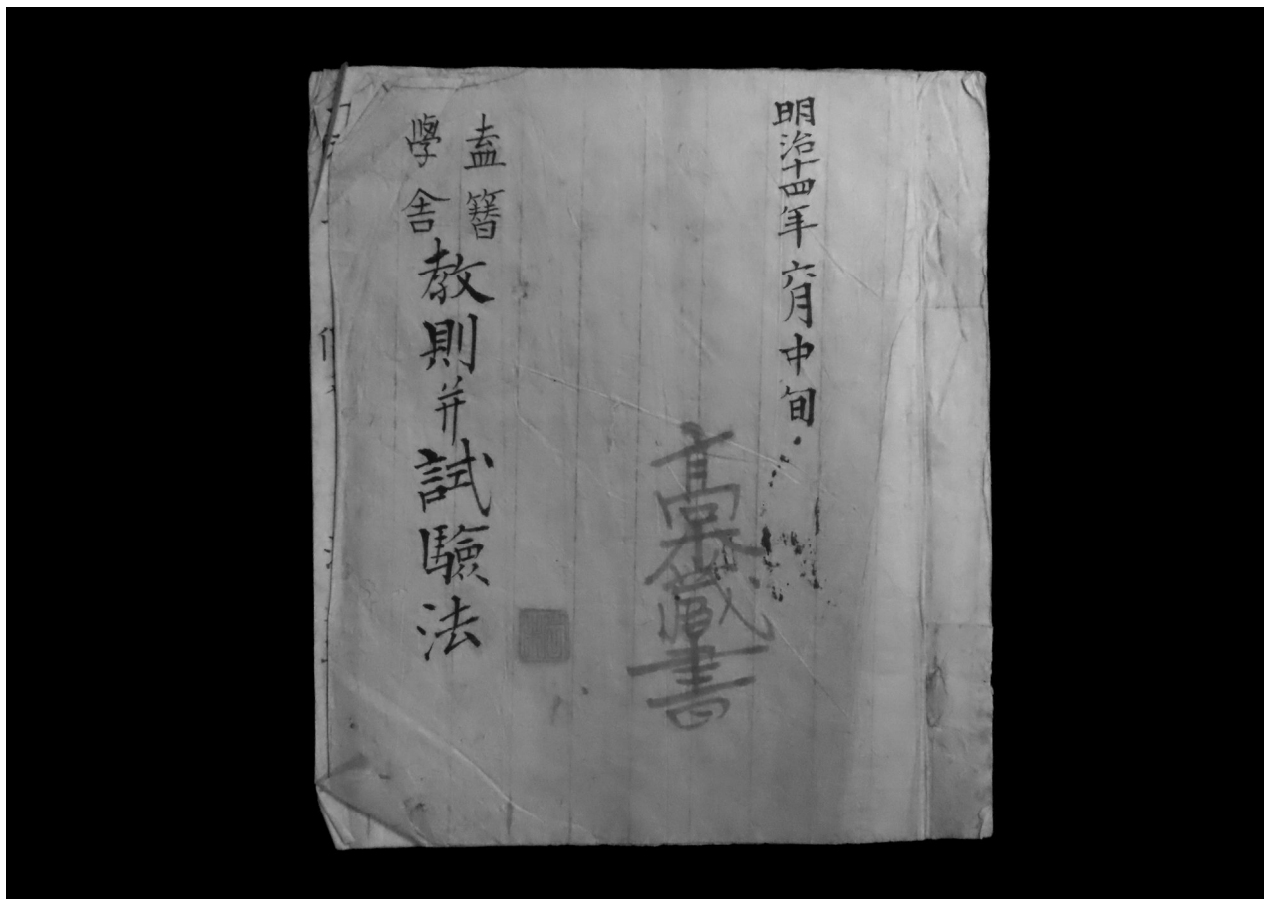
①洋算手控（本文）（明治 11 年）



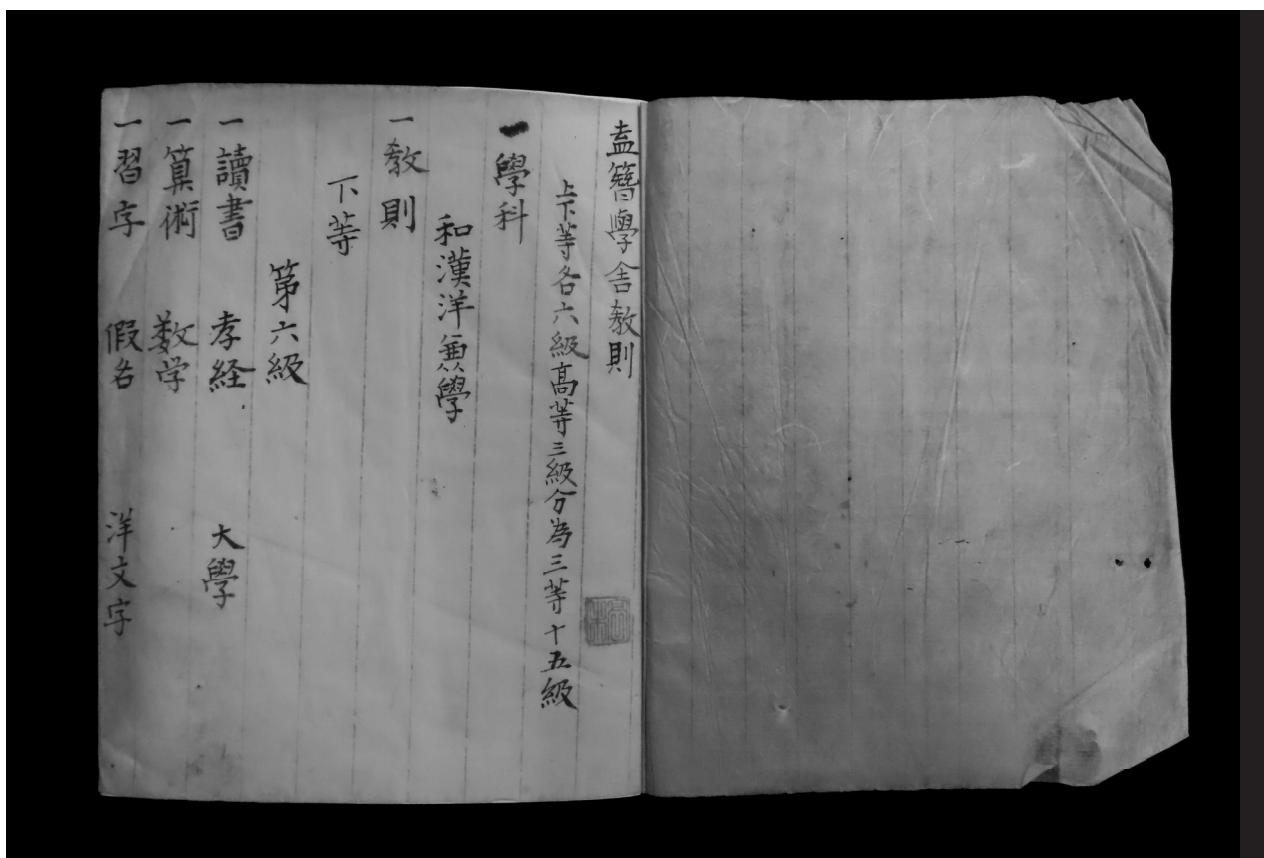
③和漢雜書暗記手控（明治 14 年）



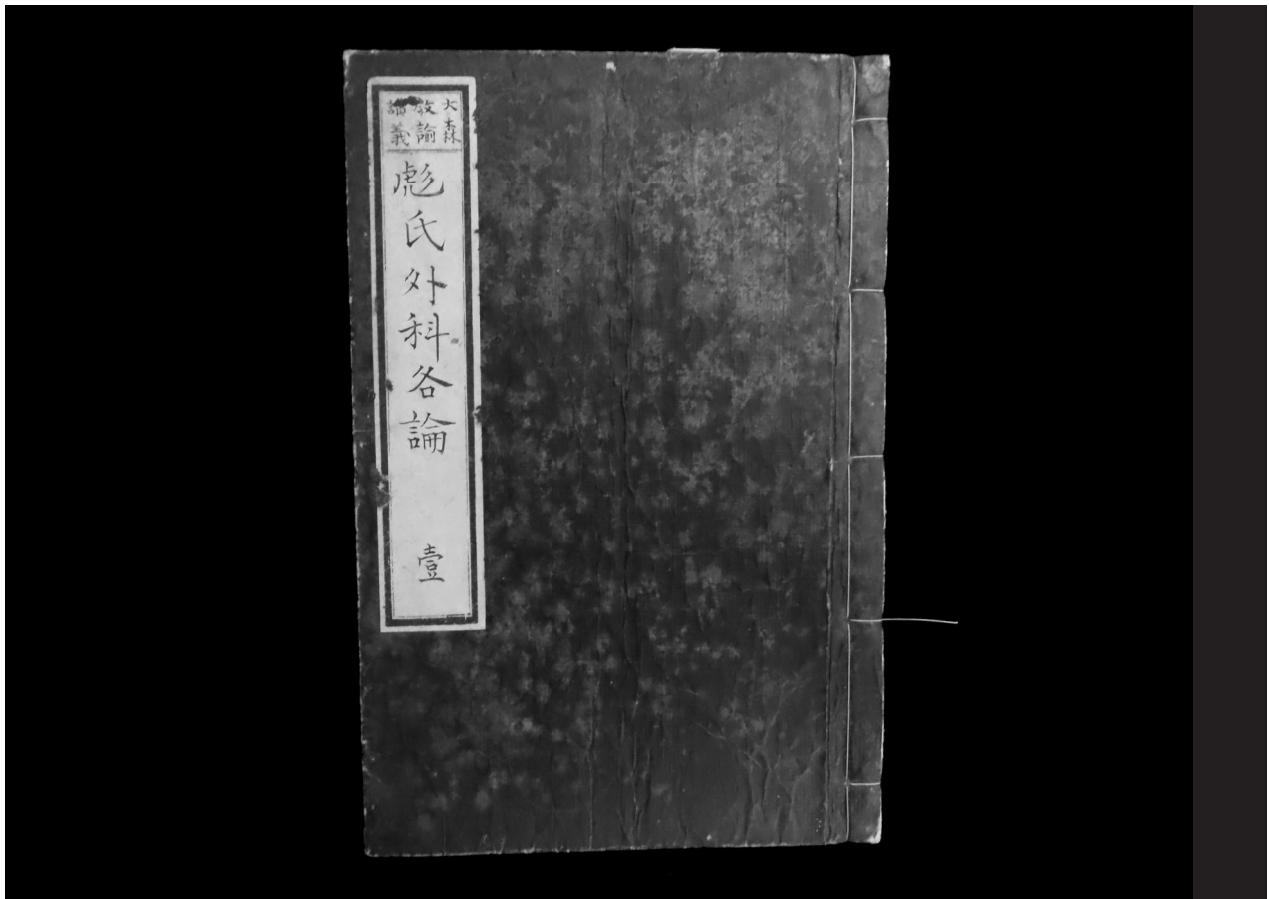
③和漢雜書暗記手控（本文）（明治 14 年）



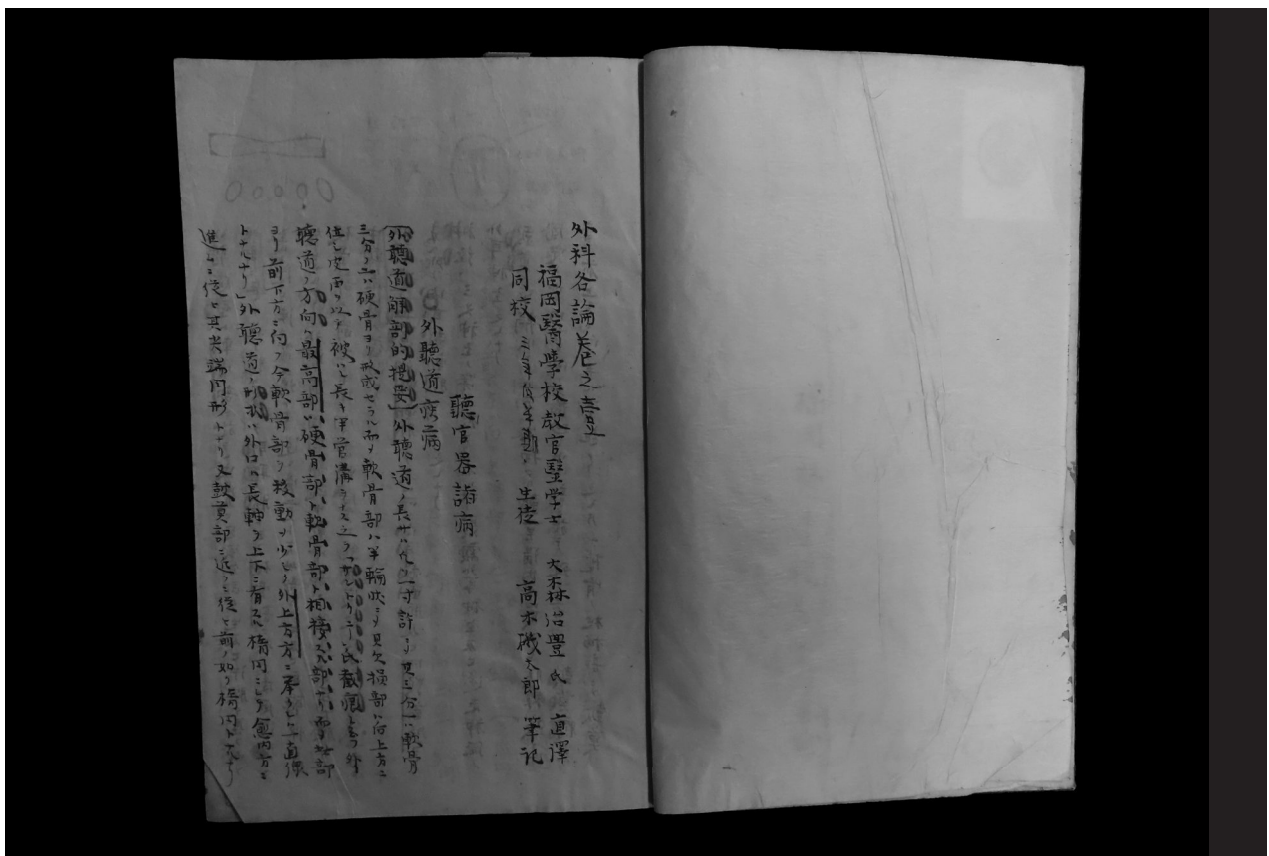
④盍簪學舎 教則并試験法（明治 14 年）



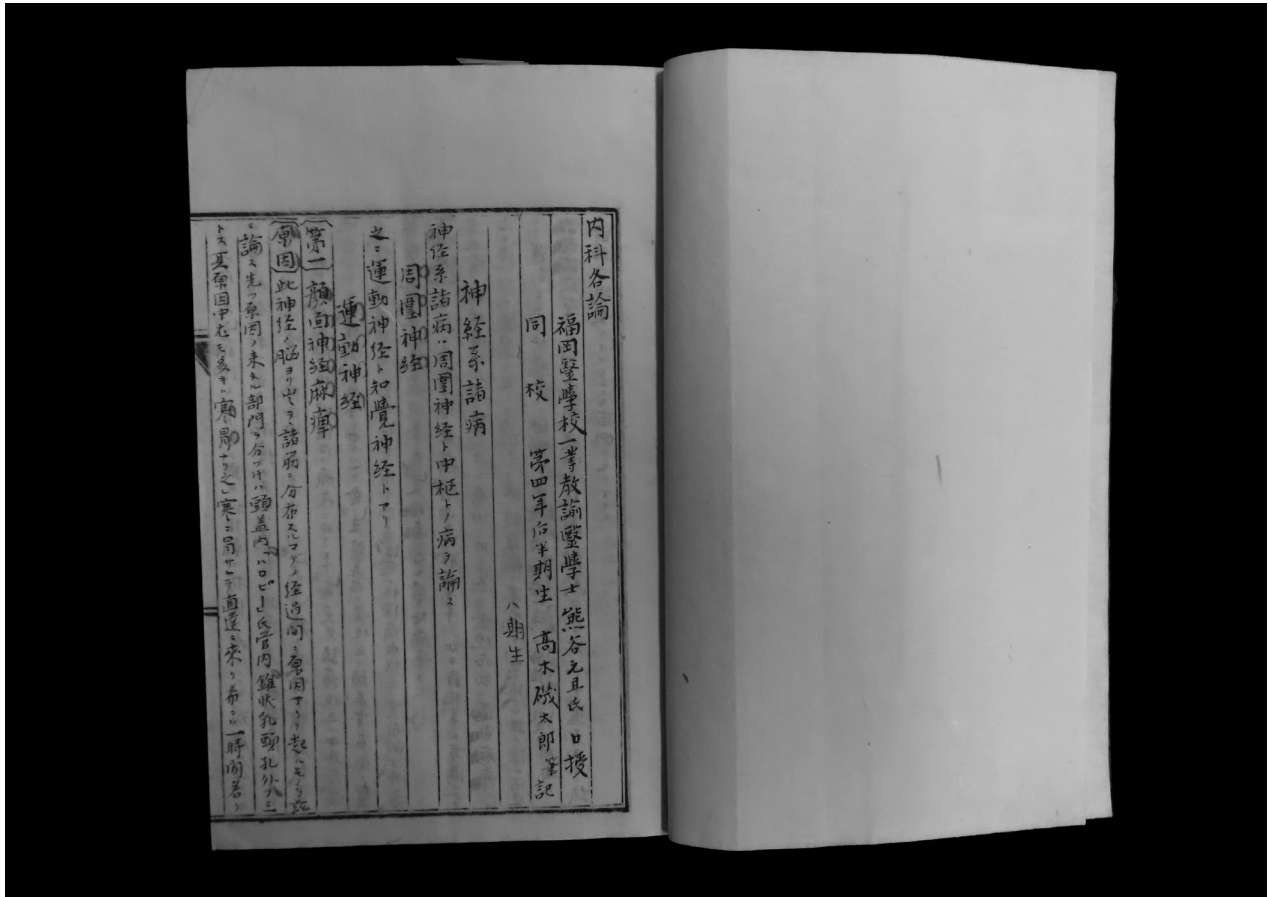
④盍簪學舎 教則并試験法（本文）（明治 14 年）



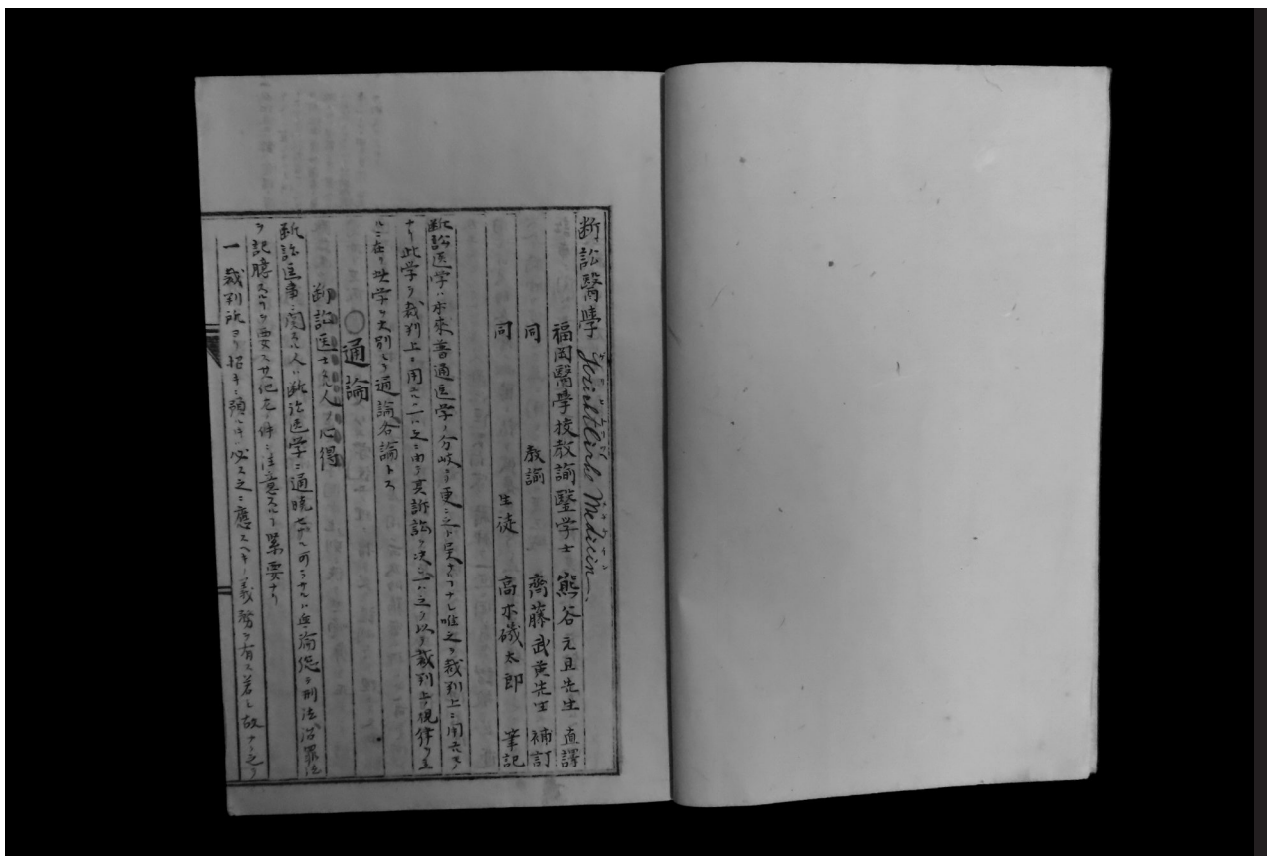
⑧外科各論・壹（大森治豊教諭）



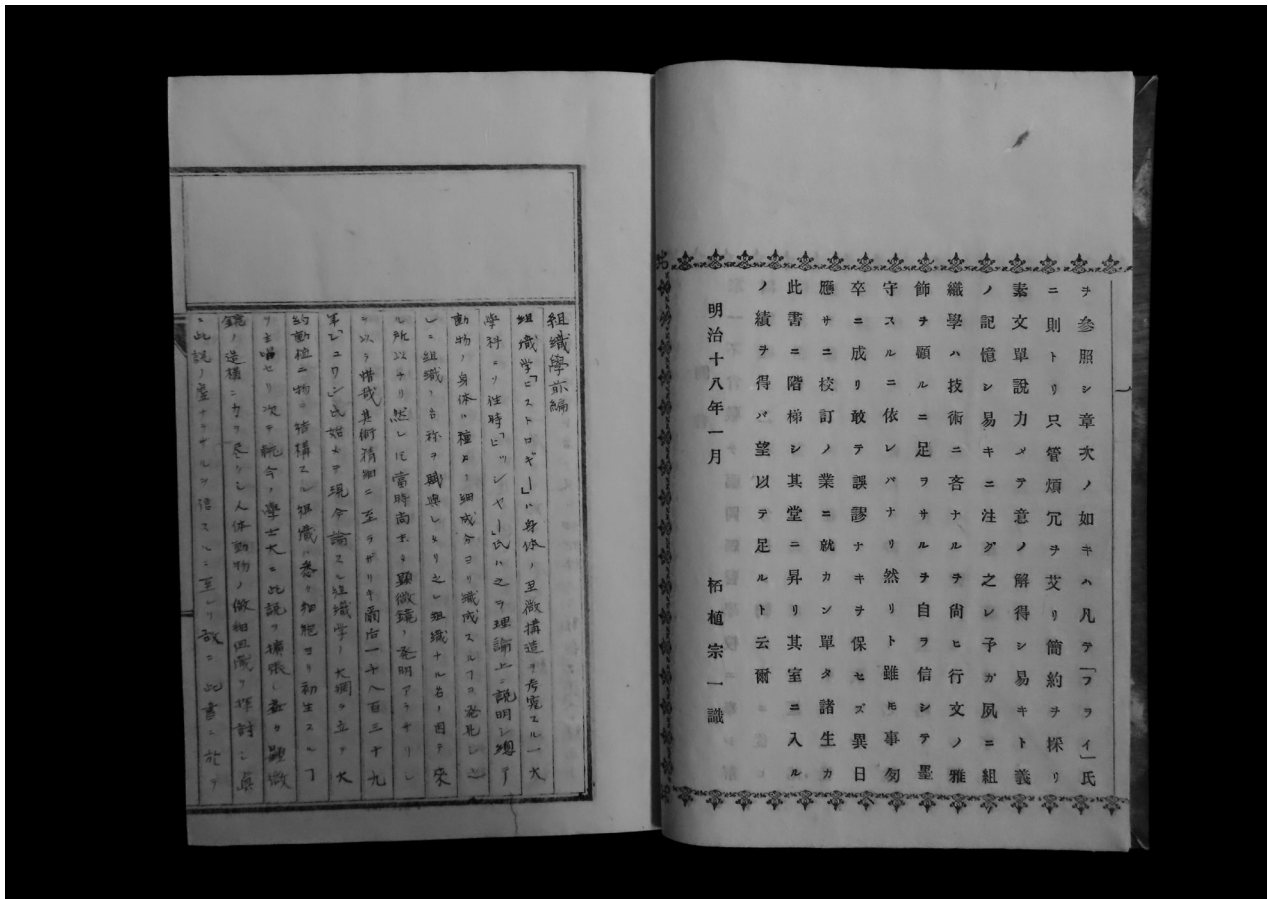
⑧外科各論・壹（本文）（大森治豊教諭）



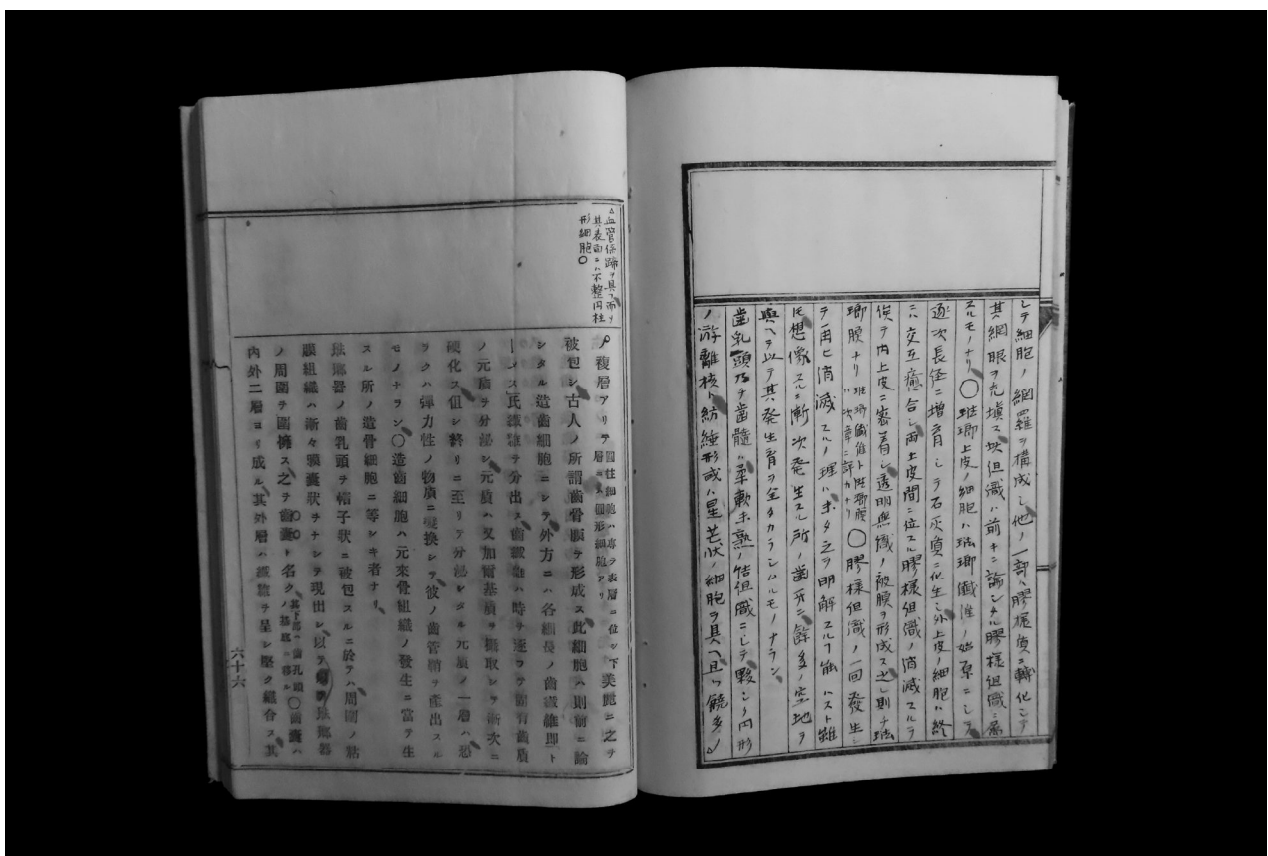
⑮内科各論・三（本文）（熊谷玄旦教諭）



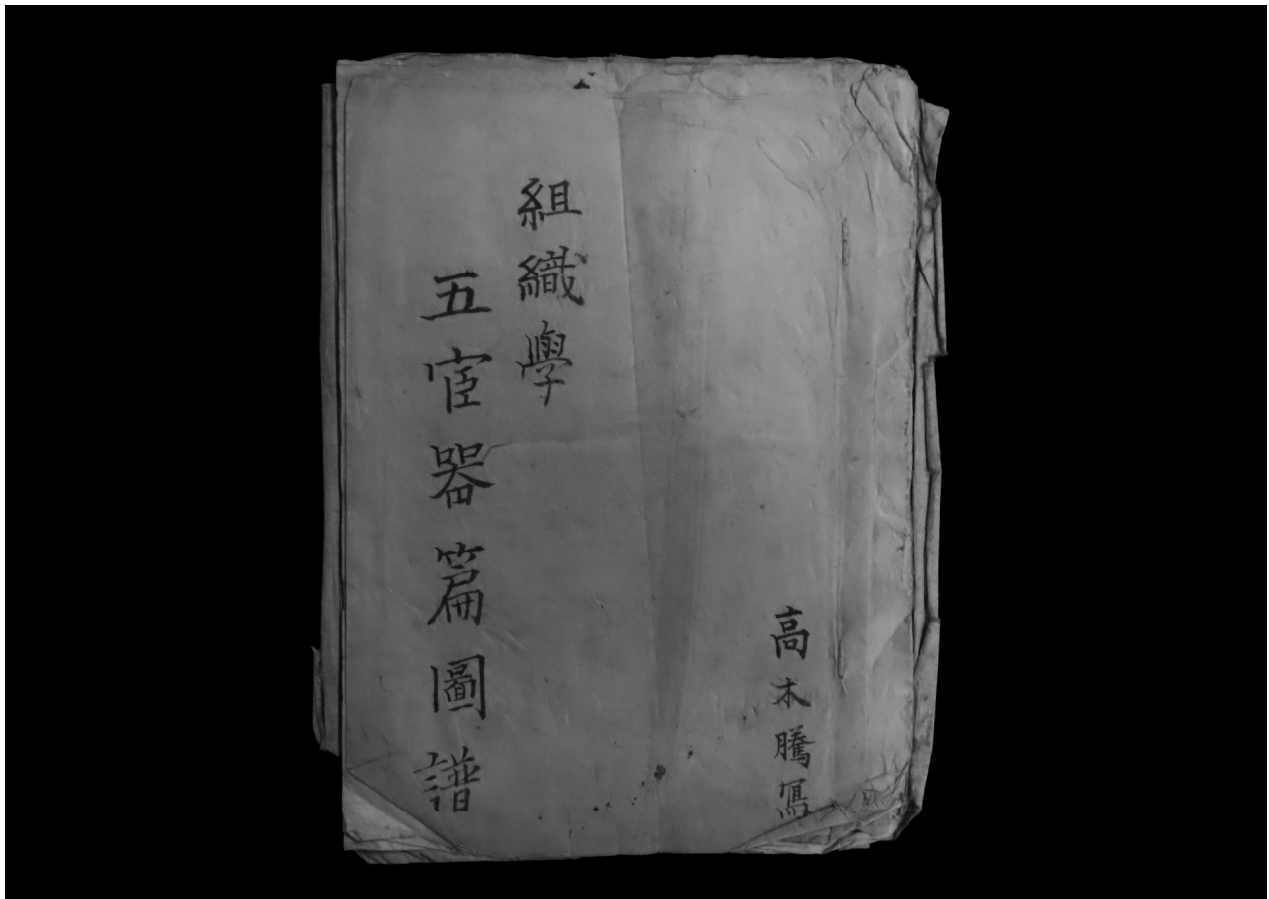
⑲断訟醫學（本文）（熊谷玄旦教諭・斎藤武英教諭）



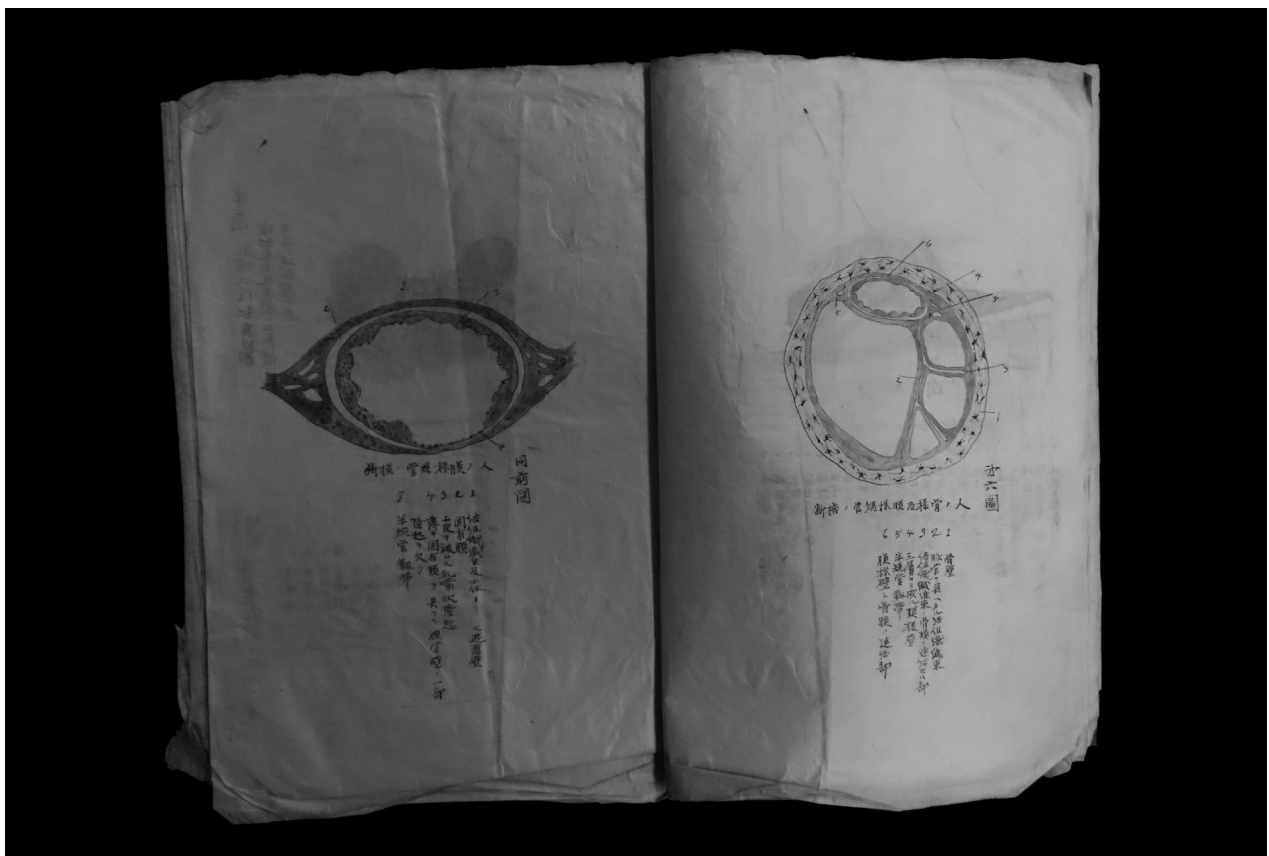
②組織學前編（本文）（柘植宗一教諭）



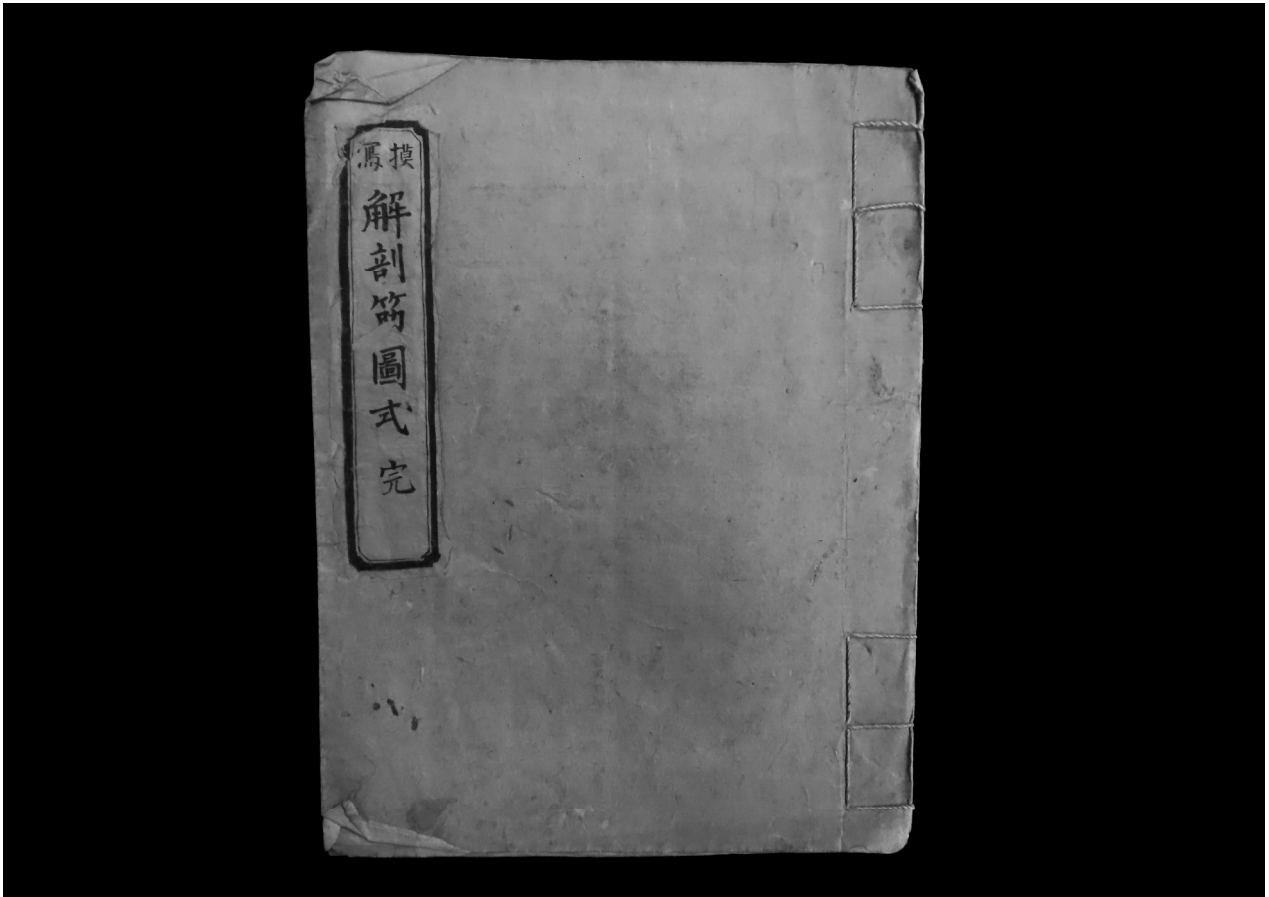
②組織學前編（本文）（柘植宗一教諭）



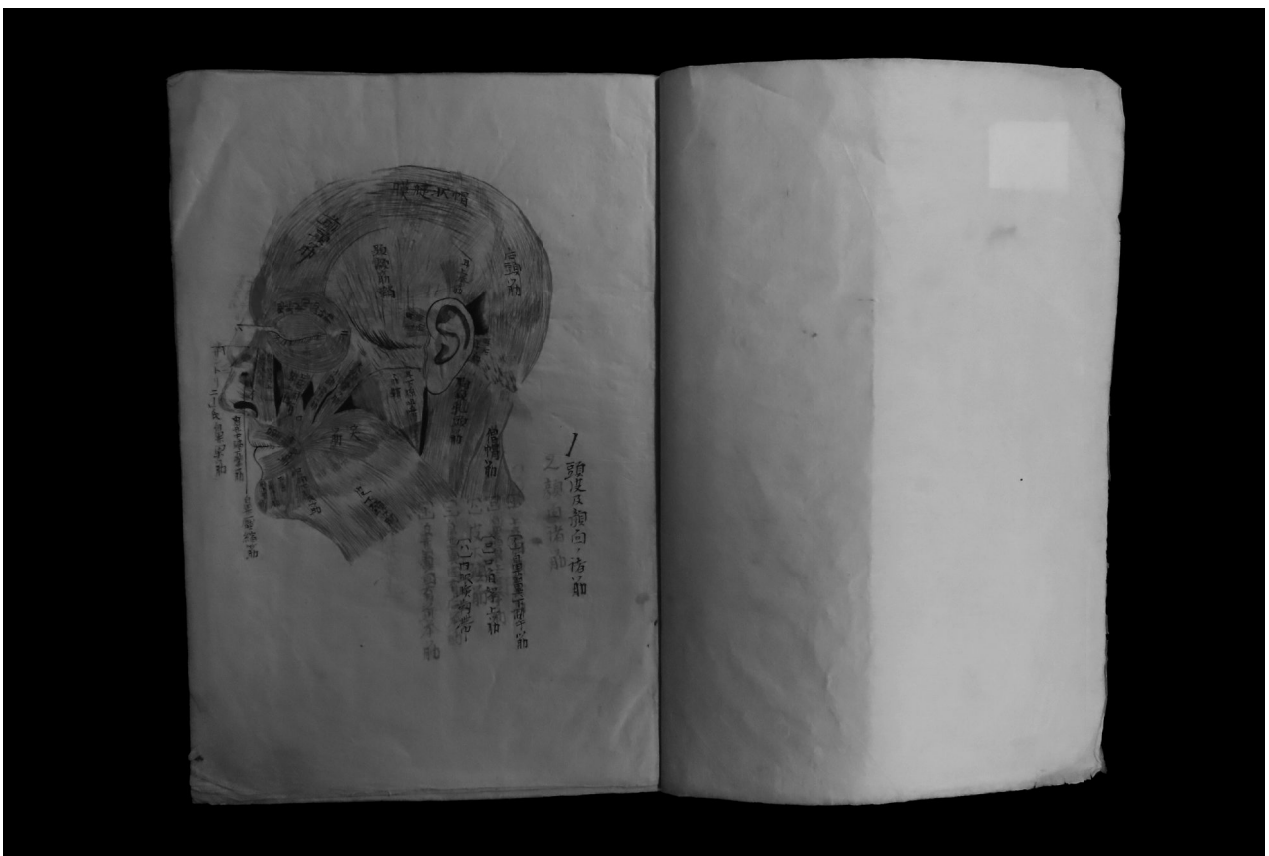
③組織學・五官器篇圖譜



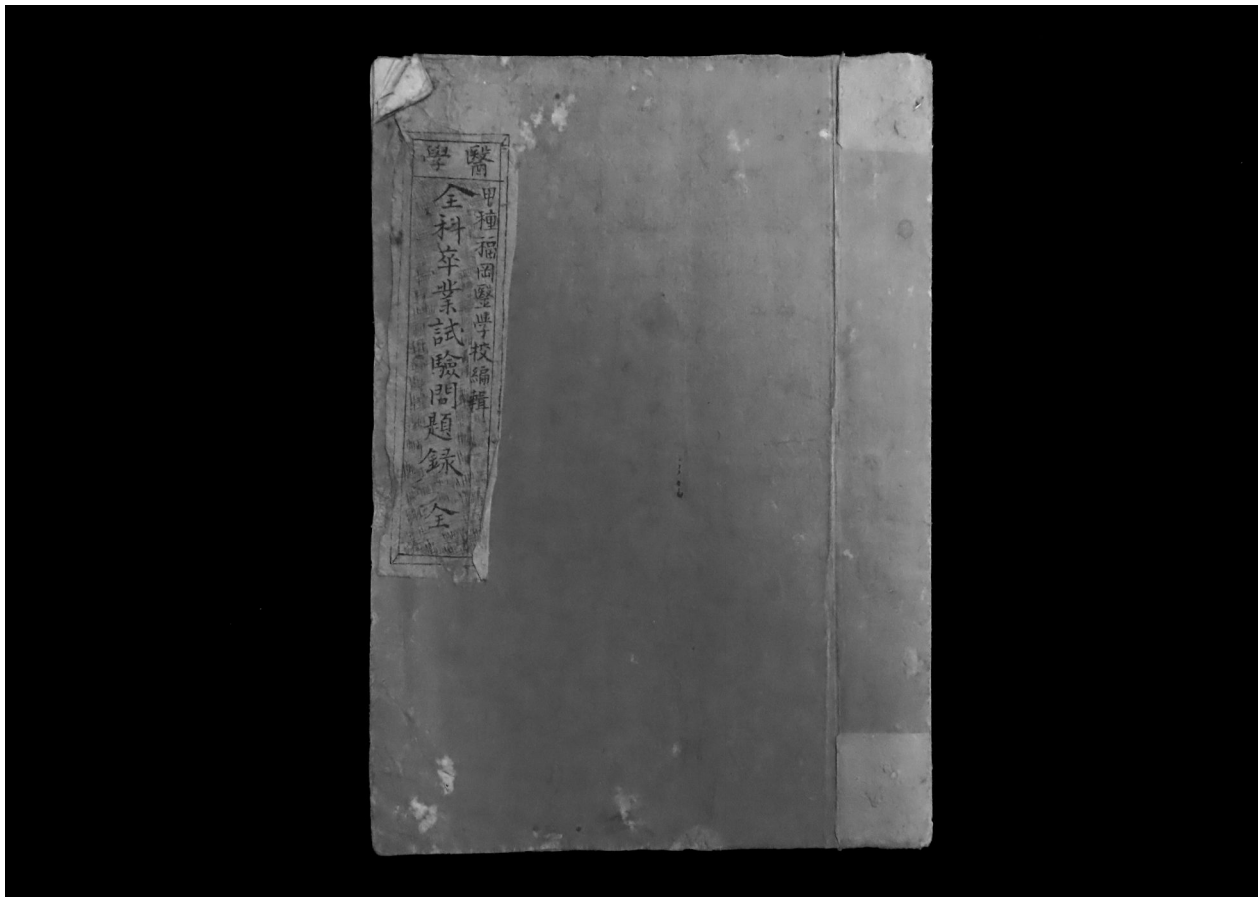
③組織學・五官器篇圖譜（本文）



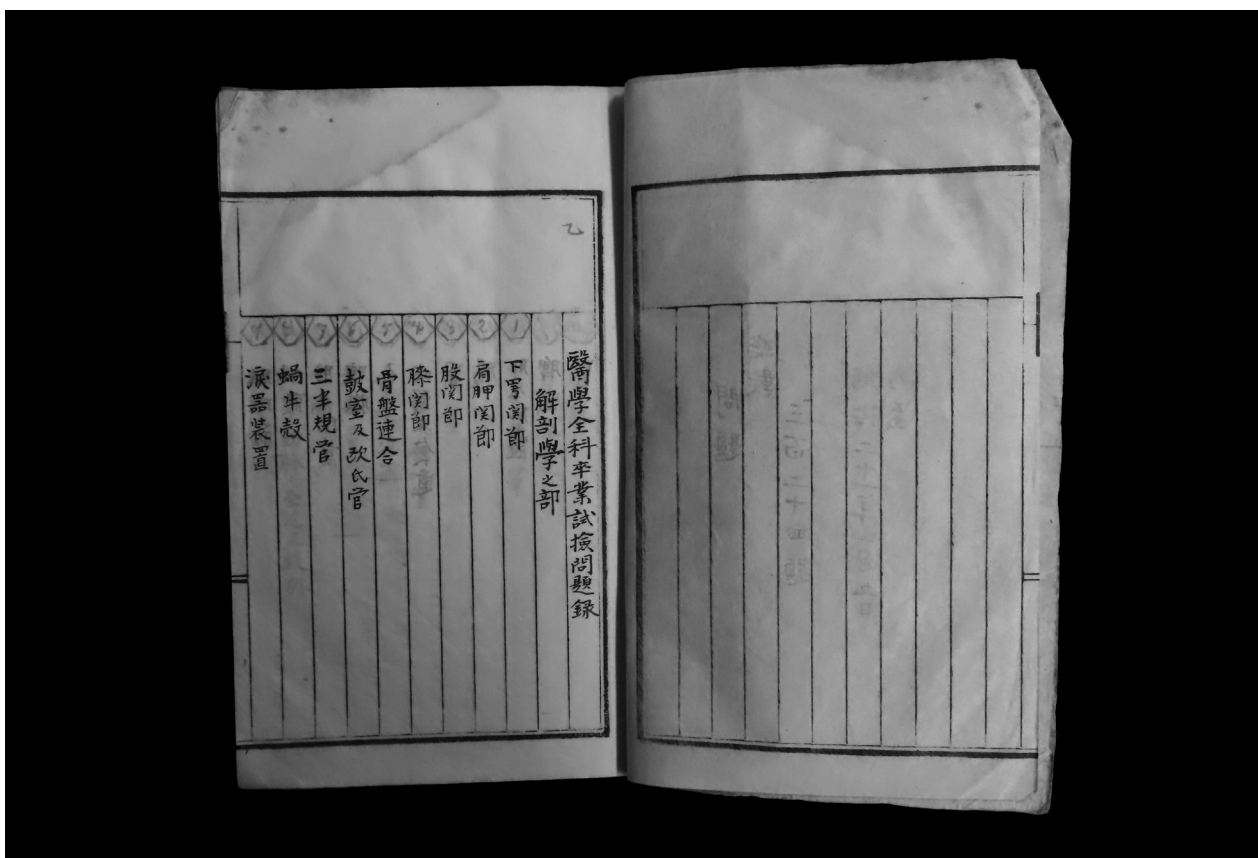
③4摸寫・解剖筋圖式（明治17年）



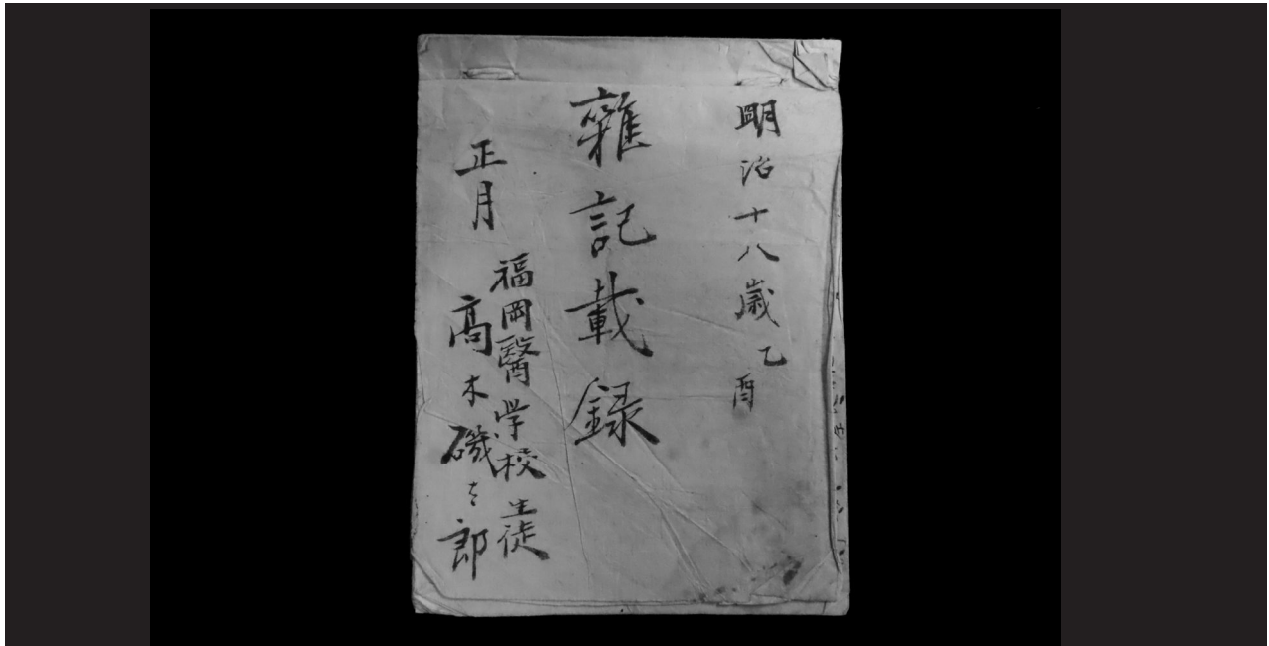
③4摸寫・解剖筋圖式（本文）（明治17年）



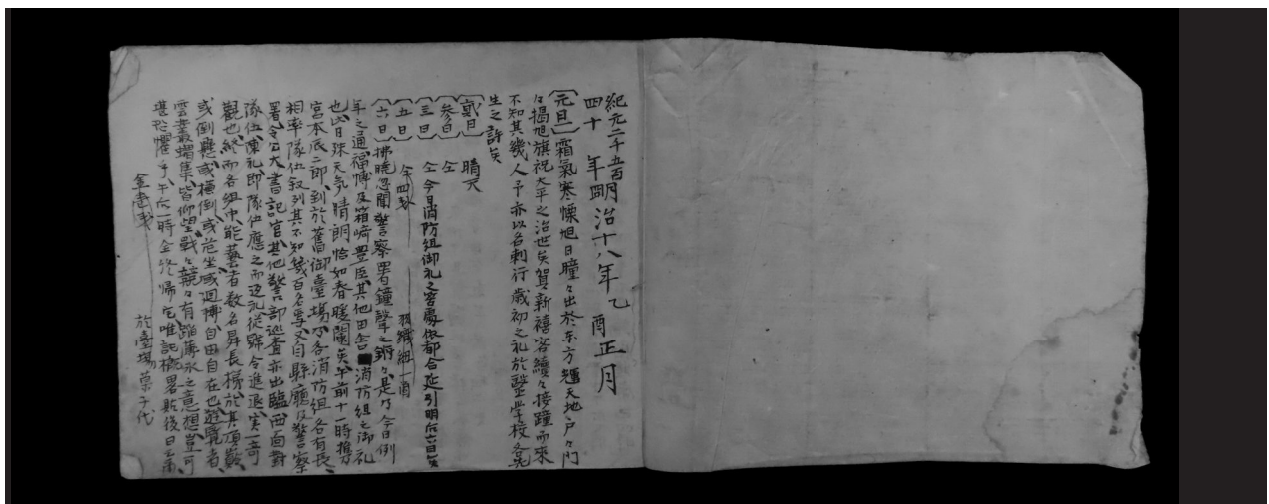
④醫學全科卒業試験問題録（明治 21 年）



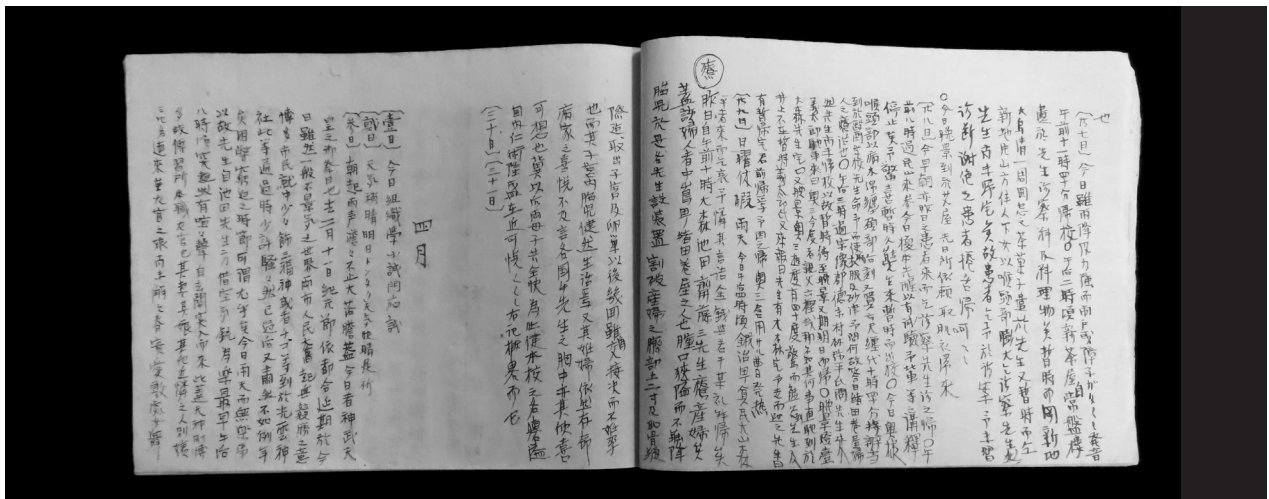
④醫學全科卒業試験問題録（本文）（明治 21 年）



④⑥雑記載録（明治18年）



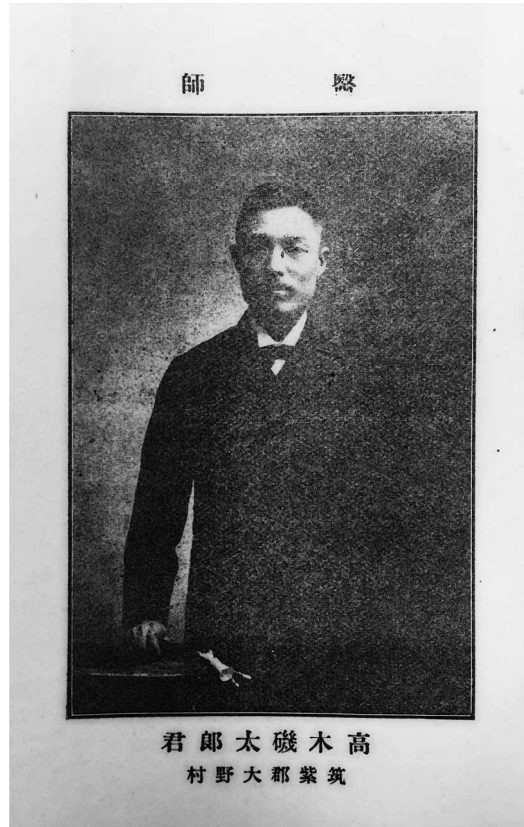
④⑥雑記載録（正月）（明治18年）



④⑥雑記載録（三月）（明治18年）



竹田謙窓夫妻の墓（福岡県大野城市牛頸）
2026.1.18 筆者撮影



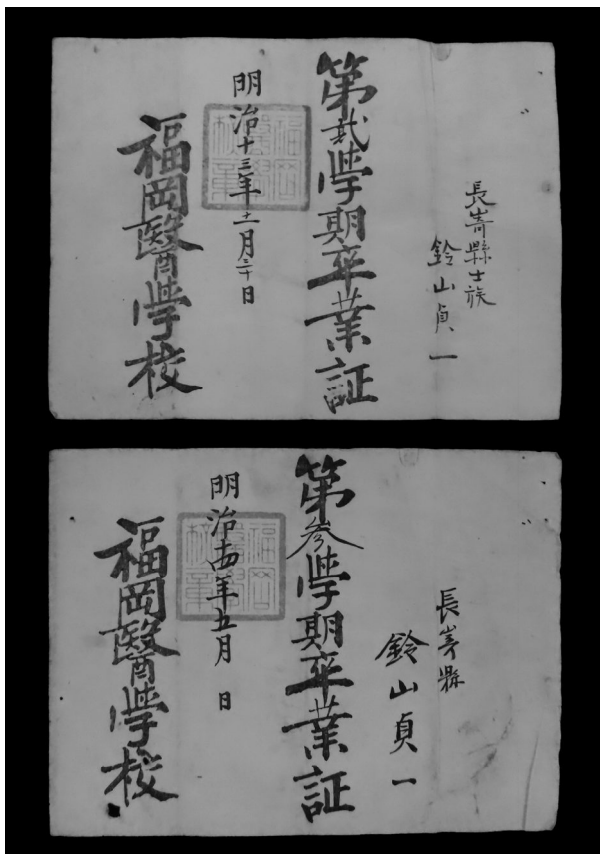
高木磯太郎肖像
(福岡縣官民肖像録・深田豊市著・大正2年)



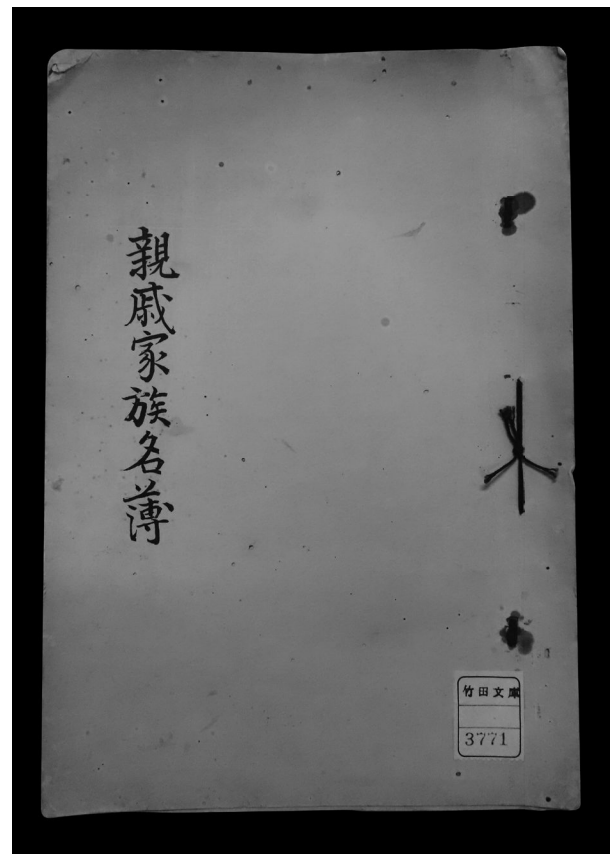
福岡医学校最後の卒業生と教師たち（明治21年・九州大学大学文書館蔵）



県立福岡医院本館（福岡医学校）（九州大学大学文書館蔵）



福岡醫學校第貳學期・第參學期卒業証（明治 13, 14 年）
（九州大学大学文書館蔵）



親戚家族名簿（大野城市所蔵「竹田家文書」）